

令和4年度

第37号

教育実践研究論文集

公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部



「教育実践研究論文集」第37号の発刊に寄せて

公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部
支部長 大竹 誠 司

教職員の皆様には、日頃より(公財)日本教育公務員弘済会(日教弘)千葉支部の諸事業に深いご理解とご支援をいただいておりますことに、心より感謝申し上げます。また、多くの方に日教弘の趣旨にご賛同いただき、「教弘保険」にご加入いただくことで教育振興事業をはじめとする当支部の事業を拡充することができておりますこと、重ねて御礼を申し上げます。

さて、当支部の「教育実践研究論文」募集は1976年(昭和51年)度にスタートし、本年度で46回目を迎えました。「教育実践研究論文」募集事業は、当支部の教育振興事業の大きな柱の一つであり、その目的は、児童生徒の教育・人としての成長に寄り添い、努力と研鑽を惜しまない教職員の教育実践と研究意欲を奨励することにあります。そして、その中で健やかに成長していく子どもたちの姿は、「最終受益者は子どもたち」という私たち日教弘・千葉教弘の理念の具現化にもつながっているものと考えております。

令和2年の年明け早々から新型コロナウイルス感染症が全世界を襲い、日本でも誰も経験したことのない事態への対応を迫られました。この間、学校では、行事の変更や夏季休業期間の見直し、学力保障など次々と新たな対応が求められたことと思います。

多忙を極める中であって日々の教育実践をまとめていただき、多くの学校・教職員からご応募をいただきました。コロナ禍だけでなく、支部優秀論文の日教弘教育賞への推薦を同一年度にするため、今年は応募の締め切りを例年より2か月早く設定しました。このため、応募数が減少するのではないかと心配していましたが、学校部門16本、個人・グループ部門23本、合計39本の応募をいただきました。校種でも、幼稚園・こども園1本、小学校26本、中学校4本、義務教育学校1本、高等学校3本、特別支援学校4本となっており、すべての校種から応募がありました。いずれも日々の教育実践の工夫改善と児童生徒の成長の様子をうかがうことができ、審査員の先生方からは素晴らしい実践研究であるとの高い評価をいただきました。

厳正な審査の結果、今回入賞された方々は別掲の通りです。入賞された皆様には心よりお祝いを申し上げます。また、今回入賞されなかった先生方におかれましても、引き続き研究を深められ、その成果を日々の実践に活かしていただきたいと思っております。

21世紀を生き抜く子どもたちを育むことは教職員の使命です。県内の先生方が、本冊子に掲載された研究の成果を日々の教育実践に役立てていただければ、この事業は大きな成果を上げることになり、当財団としてこれに勝る喜びはありません。

当支部としましては、今後も事業の充実を図り、児童生徒の学びやすい環境づくりや学校教育の支援など、「最終受益者は子どもたち」という日教弘の理念のもと、教育振興事業の充実に尽力してまいります。今後も、多くの教職員の皆様にご賛同いただき、「教弘会員」になっていただき、引き続きご支援をいただきますようお願い申し上げます。

末筆ながら、この間、審査委員長としてご指導をいただいた千葉県総合教育センター所長神子純一様をはじめ各審査委員の先生方、さらには論文をお寄せいただいたすべての方に感謝を申し上げまして、巻頭のご挨拶とさせていただきます。



新たな教師の学びと質の高い 教職員集団をめざして

審査委員長

千葉県総合教育センター

所長 神子 純 一

令和4年度より新学習指導要領が高等学校でも実施され、新しい時代の教育が全面的にスタートしています。令和4年10月の中央教育審議会『令和の日本型学校教育』を担う教師の在り方特別部会中間まとめでは、今後の改革の方向性として「新たな教師の学びの姿の実現」や「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成」が示されました。子供たちの学びとともに教師自身の研修観を転換し、個別最適な学び・協働的な学びの充実を通じた「主体的・対話的で深い学び」を実現すること、教師一人一人の専門性の向上と教員集団の多様性を確保し、学校組織のレジリエンス(復元力)を向上することは喫緊の課題です。子供たちの多様化と社会の変化に対応した前例にとられない創造的な教育を追求することが、これからの学校と教師の使命と言えるでしょう。

一方、コロナ禍が3年間にもおよんでいる最前線の学校現場では、子供たちの健康・安全の確保と学びの保障の両立が求められてきました。今現在も教職員の皆様が助け合いながら工夫を重ね、「新たな学校」の在り方を模索し、最大限のご尽力をされていることに深く敬意を表したいと思います。

こうした新たな時代の要請と予測困難な状況がある中で、今年度は、学校部門に16点、個人・グループ部門に23点の応募がありました。厳しい現状をむしろ子供の成長に資するチャンスとしてとらえ、取組を計画的、継続的に実践し、論文としてまとめ、応募いただいた学校や先生方の熱意に、あらためて感謝申し上げます。

今年度の論文の中には、コロナ禍における懸命な実践から生まれた特別支援教育の新しい取組、SDGsや個別最適な学びと協働的な学び等の現代的な課題やニーズに積極的に取り組んだ研究、地域や学校の実情・特色・課題等を見つめ直し、「強み」や「良さ」を生かして実践していく創造的な研究など、「私の学校でもやってみよう」「この部分は自校に活用できそうだ」と示唆や動機を与えてくれる実践が数多くありました。学校部門・個人部門ともに「質の高い教職員集団の形成」があり、日常実践を基盤とした「新たな教師の学びの姿」を示していただいたものと、深く感銘を受けた次第です。

日々の実践を評価し、改善へつなげていくという過程、いわば～カリキュラムマネジメントによるPDCAサイクルの構築と円滑な運用～を論文としてまとめ、成果を広く共有していくことは、最終的に子供たちの成長につながる意義ある試みです。今後とも各学校や先生方には、「教職員や子供たちのために」という視点から、機会を捉え実践に根差した素晴らしい研究を応募していただくことを期待いたします。

結びに、教育実践論文を募集されました公益財団法人日本教育公務員弘済会千葉支部様の長きにわたる取組に敬意を表するとともに、これらの論文の普及により、多くの学校や先生方が論文集を手に取り、自校の実践に生かしていただく「共有財産」となりますことを祈念してあいさつ(講評)とさせていただきます。

審 査 委 員

審査部門

審査委員長	千葉県総合教育センター	所長	神子	純一	学校部門
審査委員	千葉県総合教育センター	カリキュラム開発部部长	鈴木	康治	個人部門
審査委員	千葉県高等学校長協会	会長	篠木	賢正	学校部門
審査委員	千葉県特別支援学校長会	会長	青木	隆一	個人部門
審査委員	千葉県小学校長会	会長	山下	秋一郎	学校部門
審査委員	千葉県中学校長会	会長	櫻井	比呂樹	個人部門
審査委員	株式会社千葉教弘	代表取締役	渡邊	均	学校部門

(敬称略)



— 目 次 —

あいさつ	1
公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部 支部長 大竹 誠司 審査委員長 千葉県総合教育センター 所長 神子 純一	
審査委員	3
《最優秀賞》	
学校部門	
病弱教育における「つなぐ」ことによる豊かな学びの実現 ～ICT 利活用による学習環境のデザイン～ 千葉県立四街道特別支援学校 校長 日下 奈緒美	7
個人・グループ部門	
コロナ禍の制約が気づかせてくれた、重複障害児にとっての音楽教育の意義 ～児童の実態に応じた「音楽の個別化」の配慮と相互作用に 「音楽の持つ期待感」を利用すること～ 千葉県立大網白里特別支援学校 教諭 大澤 理恵	12
《優秀賞》	
学校部門	
ESD の視点からリデザインした「小中一貫教育」のカリキュラム・マネジメント ～SDGs に向けて皆で「川戸の子」を育てるホールスクールアプローチ～ 千葉市立川戸小学校 校長 三橋 勉	17
子供と保護者に選ばれ・満足される学校を目指して ～学校存続をかけた小規模特認校の挑戦～ 柏市立手賀東小学校 校長 佐和 伸明	22
個人・グループ部門	
重度・重複障害のある生徒の知的国語科における授業づくりのポイント ～「大きなカブ」単元を通した小学部1～2段階の学びについて～ 千葉県立四街道特別支援学校 教諭 山田 康朝	27
生徒の思いを生きた言葉に変える言語活動の工夫 ～学校PR文を書く活動を通して～ 市原市立双葉中学校 教諭 赤塚 悠	32

《優良賞》

学校部門

学校の課題を児童の心に残る体験活動に変えるチーム学校の取組
～大規模改造工事による壁の塗り替えを活用した「学校を美術館に」の実践を通して～
千葉県立幕張南小学校 校長 久保田 美和 …… 37

児童の資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメント
～全国学力・学習状況調査等の結果の分析を通して～
野田市立清水台小学校 校長 下川 泰弘 …… 42

主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業のあり方
～「実践モデルプログラム」を活用した授業の実践を通して～
旭市立共和小学校 校長 石毛 佐和子 …… 47

個人・グループ部門

主体的で、対話的な、深い学びの実現に向けて
～一枚の写真を読み解く学習を通して～
市川市立第三中学校 教諭 五十嵐 ふみ代 …… 52

学んだことを実生活に生かそうとする子供の育成を目指して
～2年間の理科の実践を通して～
船橋市立船橋小学校 教諭 棚橋 寛子 …… 57

ICTを活用した勤務時間の縮減
～作業の自動化とデータの有効活用を通して～
成田市立三里塚小学校 校長 村田 正志 …… 62

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を実現させる授業の在り方
～算数科における従来型指導方法とICT活用型指導方法の一体化～
袖ヶ浦市立平岡小学校 教諭 高橋 朋彦 …… 67

《奨励賞》

学校部門

自立活動の視点を踏まえた指導・支援の在り方を探る
～さまざまな教育課程における実態把握とアセスメントの充実を目指した取組を通して～
千葉県立仁戸名特別支援学校 校長 相川 利江子 …… 73

自分を大切に、友達に思いやりのある行動がとれる児童の育成
～言葉を豊かにすることで、よりよい人間関係を育む～
酒々井町立酒々井小学校 校長 吉村 忠広 …… 78

今日の「わかった！」を明日の「できる！」に
～思考過程の見えるノートづくりを通して学ぶ教師～
銚子市立双葉小学校 校長 宮内 教夫 …… 83

『サファリ！な子』の育成に向けて
～変化の激しい21世紀をたくましく生き抜いていく子どもたちを目指して～
市川市立中山小学校 校長 松永 裕思 …… 88

個人・グループ部門

科目「課題研究」における自然栽培実践の取り組み
～ユネスコスクールにおける課題研究の在り方を目指して～
千葉県立下総高等学校 教諭 齊藤 一彦 …… 93

英語の家庭学習を通じた「個別最適な学び」の研究と実践
～自己調整をしながら学習を進められる生徒の育成を目指して～
松戸市立第五中学校 教諭 浅野 幸絵 …… 98

「生徒指導の機能」を生かした、「学級だより」発行の在り方について
～「持ち上がり学級」が少なくなった現状のために～
鎌ヶ谷市立鎌ヶ谷小学校 教諭 澤井 謙一 …… 103

《佳 作》 …… 109

最 優 秀 賞

病弱教育における「つなぐ」ことによる豊かな学びの実現

～ICT利活用による学習環境のデザイン～

千葉県立四街道特別支援学校

校長 日下 奈緒美

I はじめに

新型コロナウイルス感染症の感染拡大禍に、全国の学校がこれまでの学びのあり方を根本から見直すというより、従前の形を否定され、創意工夫というチャレンジを繰り返す中で、子供たちも学びの形を変えてきた。病弱教育は、病気で入院や治療を必要とする子供たちの学習保障をする教育である。病気の子供たちは、治療や病気により、様々な生活規制を余儀なくされる。コロナ禍になる前から、「できないことをどうしたらできるか」の創意工夫を繰り返してきた教育でもある。

本校では、平成27年度から4年間、文部科学省の研究指定を受け、「特別支援学校(病弱)高等部における、病気等療養のため通学して授業を受けることが困難な生徒に対するICTを活用した遠隔教育のあり方についての研究開発」に取り組んだ。双方向配信や授業のあり方について検証し、その効用を教育課程に生かすなど早くから遠隔での実践に力を入れてきている。

II 本校の概要

本校は、病弱教育の特別支援学校である。隣接の医療機関(以下、A病院)に入院する子供の学習保障を行う学校として、今年度で開校58年目を迎えた。現在は、A病院のほかに主に2医療機関内に学級を置き、いわゆる院内学級や訪問教育を実施している。近年の医療の進歩に伴い、入院の短期化・頻回化で、自宅での加療も少なくなく、本校も約半数の児童生徒は自宅からの通学生となっている。児童生徒の多くは慢性疾患であるが、かつて多数を占めていた喘息や筋疾患は過少で、精神疾患が増加傾向にあることが特徴の一つでもある。

III 研究の概要

1 主題設定の理由

GIGAスクール構想下、遠隔教育はさまざまな実践が繰り返されている。病弱教育でのこれまでの実践を生かしながら、ICTによる「つなぐ」意味を再考し、豊かな学びの実現を目指した学習環境をデザインするこ

とが重要である。併せて、つなぐ意義を考えることで、学校教育の本来の意義について見つけ、ICT利活用の推進に生かしていきたいと考える。

2 目的

配信することやつなげることが主体となりがちな行事での取組を通して、遠隔における利活用のあり方を整理し、学校教育の意義を考察する。

IV 実践

1 高等部訪問学級の卒業式

(1) 現状

本校から車で40分ほどの距離にあるB病院には、本校の院内学級と訪問学級があり、令和元年度末から長い間、感染症対策が講じられておることから病棟内に教員が入ることができていない。令和3年10月より、遠隔による授業を実施しているが、セッティング等を医療スタッフに全面協力をお願いしている状況である。また、訪問教育は、週2回、一回が30分と限定され、教材等の搬入も月1回と決められている。

対象生徒は、重度重複障害のある生徒で、高等部3年生である。表出の見取りが難しく、多くの時間をベッド上で過ごしている。

(2) 経緯—遠隔での授業再開

本校では、教員が出入りできない医療機関等でも、遠隔授業を実施するなどして学びの保障を行っている。画面越しに一对一の対面で行う形と、画面を通じて児童生徒が教室の授業に参加する形が主である。いずれも画面の向こう側にいる児童生徒が操作することや、活動に参加することが求められる。障害が極めて重い、自らが動いて画面に働きかける反応を示すことが困難な児童生徒にとって、遠隔授業の取組は難しいと考えていた。そこで、分身型ロボットで生徒が教室や外出先で活動に参加する事例を参考に、教員が画面から働きかける授業を試みることにした。

(3) セッティング

教員が病棟内に入れないため、生徒の学習環境に関

しては、全面的に医療スタッフの協力を得なければならぬ。それまでは、録音や録画したデータを送り、ベッドサイドでその音楽等をかけてもらうことはしていたが、今度はPCをWeb回線につなぎ、教員の代替として生徒にかかわってもらうことまでお願いすることになる。事前の協議を経て、理解ある医療側のご協力のもと実施に至った。医療スタッフに教員の代替として動いてもらうためには、事前の準備はもちろんのこと、当日も、わかりやすい伝え方や言葉、教材を考えて臨むことを大切にしたい。最初のうちは、30分の多くを調整にとられることもあったが、授業後に情報交換を必ず行い、伝え方を工夫することでお互いが徐々に慣れ、取り組める活動が増えていった。五感に働きかける音や香り、季節を感じるものを取り入れたり、母学級の友達との交流や、卒業制作、書初めに取組んだりした。これらの授業における取組が、卒業式当日の連携に生かされたと考える。

高等部3年生であるから、卒業式にどう参加するか検討するにあたり、学校での式に遠隔で参加することが一番に想定された。しかし、式に参加することより、本人が卒業を感じられることを大切にしたいという思いがあった。具体的には、本人への直接的働きかけとして「証書を受け取る」ことができる環境設定を実現したいと考えた。通常の授業同様、全面的な医療側の協力が必要である。依頼したいことを具体化して伝え、相互に要望と対応可能なことの調整を丁寧に行っていた。当日までに、①生徒本人の様子を保護者にも伝えられること、②主治医からの祝辞、③卒業証書の授与方法に焦点を置いて環境を整えた。

(4) 当日の様子



図1 本人(病室)・主治医・学校をつないで一訪問学級卒業式

訪問学級の卒業式は、学校での卒業式の午後に実施した。当初は、「式に参加する」ことや「遠隔でつなぐ」ことを優先し、学校での式の時間に合わせて実施する方法を考えた。しかし、生徒本人にとってどんな式がよいのか、学校の式に参加することより本人が「感じられ

る」ことを大切にしたいと考え、もう一つの卒業式を実施した。



図2 画面の向こうの卒業生へ一訪問学級卒業式

①生徒本人の様子を保護者に伝える

保護者も、約2年近くの間、車いすの手続きで昨夏に会った程度でほとんど生徒に会えていない。卒業式への参加について、当初は単に遠隔でつなぐだけだと思っていたのか、来校の意思はなかった。しかし、卒業式の内容や展開等を丁寧に伝え、当日は、画面を通しての間接ではあるが対面がなかった。母親の言葉かけに、わずかではあるが表情の変化が見られ、それに気づいた保護者が満面の笑みを見せたことが印象的であった。

当日は、日頃の授業での双方向だけでなく、カメラ映像で生徒の表情をとらえ、学校での参加者にはよりわかりやすく大きな映像として伝えられた。そのことにより、保護者も細微な本人の表出に気付くことができ、卒業の喜びを親子で共有できている感覚を得られたようであった。

②主治医からの祝辞

本来は、同じ病室のベッドサイドで、主治医からの祝辞が述べられる予定であった。しかし、当日の不測の事態により、主治医は他の場所からの出席となった。想像をはるかに超える多忙な中で、出席を快諾いただけただけでなく、祝辞を頂戴できたことには本当に感謝している。「もうひとつの式」を実施することは、他の病弱教育を担う学校でも珍しいことではないし、本校でも場を異にする式を執り行うことはあった。その際には、どうしても場所や時間の都合から縮小されて実施することが少なくない。今回の訪問学級の卒業式も、制限時間が30分であるから縮小は否めない。そのような中で、医療関係者からの祝辞をいただけたことは、生徒本人も喜んでいるであろうが、関係する教員はもとより、保護者も身の引き締まる思いで、言葉に耳を傾けていた。不測の事態でも臨席いただけたのは、遠隔での環境設定をしていたからでもある。

③卒業証書の授与

今回、「本人が感じられる式に」という思いの中で一番にこだわったのが、証書授与の仕方である。アイデアを出し合い、医療スタッフと相談した。学校で校長が証書を読み上げて画面越しに差し出し、病室で医療スタッフが本物の証書を本人に渡すという演出とした(図3)。

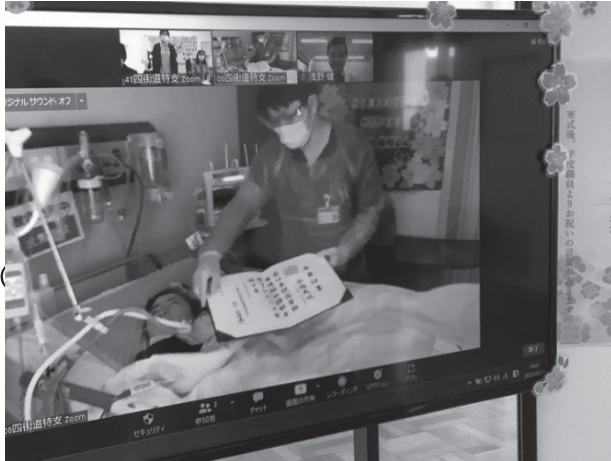


図3 卒業証書授与

(4) 医療スタッフの感想

予定の式次第を終え、そのあとに、これまで本生徒に縁のあった職員がお祝いの言葉を伝えるために会場に集まった。12名の本校職員が列を作り、一人一人順番にカメラの前に座り、画面向こうの生徒に語りかけた。本人と一番長く時間を共にしたという旧担任が話しかけた時、画面から医療スタッフの驚きの声が聞こえてきた。「心拍数が上がっています!」「〇〇さん、泣いています、涙が…」一番に驚いていたのは、医療スタッフで、後に「考えさせられることが多かった、患者さんとの向き合い方が変わります」と感謝の言葉を伝えてくれている。

2 全校運動会

(1) 現状

本校では、小学部、中学部、高等部が一堂に会する運動会を、例年5月頃実施している。全校が一体になれる、重要な行事の一つである。しかし、「一堂に会する」ことは、ここ何年かコロナ禍にあって実施できていない。令和2年度は、休校で予定日にできず、その後も見通しが立たない等の理由から、その年度は中止された。

昨年度は、感染拡大の心配があるものの、形を変えた実施を模索し、遠隔でつなぎながらの分散実施とした。当初は、教員の中には、一緒にできないことや画面で観ても限界があることへの否定的な意見もあった。しかし、実際に行ってみると、競うことの楽しさ、見合い応援しあう嬉

しさを、そして称えあう喜びを、児童生徒がそれぞれに感じることができ、その大切さに気付くことができた実感した。

今年度も、つなぐことで精いっぱいな感も強かった昨年度の経験を活かし、再び分散実施をすることとした。

(2) セットアップ

体育館をメイン会場として、競技ごとの入れ替え制とした。競技に参加していない学部学年は、各教室から画面を通して応援する。また、A病院の感染対策コントロールにより登校できない児童生徒は、病棟内の別会場で競技に参加し、応援する。他病院や自宅からも同様に参加できるようにした。

昨年度の経験を活かして、「臨場感が持てるよう」にすることに力を注いだ。昨年度が、“まず”つながることを目標に全校が一体になれる環境を作り出したが、今年度は、“どう”つながるかの工夫をした。専門の業者に依頼すれば容易なことかもしれないが、ある機材で、流れや活動の工夫をすることで、一体になれる空間を子供と大人とともに作り上げることを目指した。

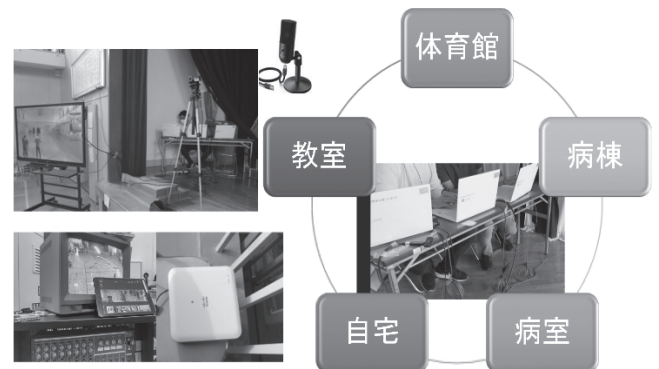


図4 分散実施の運動会—つながりの工夫

①音を伝える工夫

USB コンデンサーマイクの設置場所を工夫し、より各会場で聴く本会場の様子が伝わりやすいようにした。このマイクの特徴は、低域から高域まで集音可能な周波数の幅が広く、些細な音や息遣いまでしっかりと集音できる感度の高さに優れているところである。通常の集音マイクであると、体育館のような会場の音がきれいに伝わらず、聴き手にはストレスになってしまう。体育館のスピーカーの音を拾うのに、どの位置に設置をしたら一番臨場感のある音が伝わるかを何度もシミュレーションして当日に備えた。

②流れを止めないタイミングの工夫—3台のPC

入れ替え制をとっていることや、画面の切り替え等が必要なことから、ベストパフォーマンスを目指すために、ホスト用、モニター用、レコーディング用の3台

のPCをセットした。ホスト用はビデオカメラの映像と音声配信する。また、入室者の参加許可や、動画や写真、資料の配信も行うことを用途とする。モニター用はモニターに映し出す機器専用で各場所からどのように聞こえているかの確認も行うことができる。それぞれの配信状況に応じた微調整も可能である。レコーディング用は記録するためであるが、他の2台と分けることでパフォーマンスの向上が期待できる。

③流れを止めないタイミングの工夫—練習風景動画

入れ替え制をとっているため、児童生徒が各教室等から体育館まで移動する等、入れ替えの時間が必要である。一定の時間の換気、体調に合わせた移動ペースの配分等を考慮すると、どうしても各競技の間に児童生徒の待ち時間が多くなってしまふ。

そこで、事前に各学部学年が取り組んでいた練習風景を動画に編集し、入れ替え等の待ち時間に流すようにした。これは、昨年度の実践から、児童生徒の参加がより主体的で、一体感をもてるものになるかとの工夫である。児童生徒は、「間」の時間も十分に楽しみながら、他学部が、友達や先輩・後輩が、どんな取組をしていたのかを知る機会にもなり、その後の応援にもつながっていた。

④臨場感をもたせるカメラワークの工夫

本会場の体育館の様子を配信するにあたり、その様子を撮影するのにビデオカメラではなく、より機動力が高くなる iPad 等の端末を活用した。

昨年度は、主にビデオカメラによる広角等の機能を用いていたが、迫力の点で限界があった。そこで、今年度は、撮影要員を増やし、端末でより柔軟な角度で撮影することで、各教室等から応援している児童生徒に体育館の臨場感を伝えようとした。



図5 自宅がもうひとつの競技場

(3) 当日の様子

体調により登校できない児童生徒は、自宅から参加した。家庭の協力があつてのものであるが、自宅に競技スペースを設け、リアルタイムで競技に参加した。同じ組の児童生徒は、映し出される画面に集中し、その勝敗に一喜一憂して盛り上がった。自宅で参戦した児童生徒は、自身の結果が体育館の得点板に反映されるのを見て満足そうな表情をしていた。

V 考察

1 学習を保障する—学びたいを大切に

ICT 活用により、多様な学びの形態が可能となった。実践の2全校運動会では、児童生徒がそれぞれの体調等により、多様な参加形態をとった。登校できなければ参加できないではない。体調がよくなければ競技に出られないではない。また、自分のことで精いっぱいだから他の人のことまで関心が及ばない、ではない。子供たちは友達や仲間の頑張っている姿を見て、自分も頑張ろうとする力を得ることができている。自分の体調が悪くなるまで友達を応援する姿、他人に無関心だった子が画面の向こうにいる仲間を一生懸命励ます姿、負けず嫌いな子が自分に勝った相手を称賛する姿、そんな姿が運動会で見られた。このような姿を見せられると、大人もどんなに準備が大変であっても、やってよかったな、と感じる。こうやって、教員も子供たちから力ももらっている。

児童生徒にとっての学びたいは、希望であり、生きる力そのものだと考える。「学びたい」を大切にすることは、希望を持っていいよ、という学校・社会からのメッセージでもある。

そして ICT でつなぐということは、学習を保障する手段の一つにほかならないことも忘れてはならない。

2 学習環境のデザイン—わかる喜びにつなげる

実践の1高等部訪問学級の卒業式では、儀式的行事を行うことだけでなく、生徒本人を主体に演出を考えた。どのような内容であれば、本人が卒業を感じられるか、周囲の祝う気持ちが伝わるかを、担当が大事にすることで、学校での式に合わせてつなぐことにこだわらない式を行うことができた。ここに、本当の意味での「つなぐ」ことの大切さがあると考えている。本実践では、医療側の協力がなくてはなしえなかった。卒業式が無事に行われた背景には、令和3年10月から始めた遠隔授業において、医療スタッフが徐々に教員の指示への対応に慣れ、生徒へのかかわりのポイントを押さえて

くれていた等の積み重ねが功を奏していたものとしてあると推察する。週2回、一回が30分程度の限られた遠隔授業ではあるが、単につないで配信するのではなく、常に教員が生徒の実態に合わせた働きかけを行っていたから、医療スタッフも真摯に取り組んでくれ、その結果が卒業式の当日に生まれたのだと考える。本当の「つなぐ」を考えると、具体的なつなぎ方に回答があるのではなく、やはり、児童生徒の実態をとらえ、どのような豊かな学びを実現するかが考えられることなのである。

3 「学ぶ」ことの意義—教育の意義を考える

平成6年12月、当時の文部省は「病気療養児の教育について」で、病弱教育の意義を次のように示した。

- ・学習の遅れの補完、学力の補償
- ・積極性・自主性・社会性の涵養
- ・心理的安定への寄与
- ・病気に対する自己管理能力
- ・治療上の効果等

ここでは、退院後の適応、再発の頻度の低下、健康の回復やその後の生活に大きく寄与するQOLの向上にも影響があるとして、病気療養する児童生徒の教育の重要性が示された。平成25年3月には、文部科学省が「病気療養児に対する教育の充実について(通知)」で、平成6年の通知内容の取組の徹底を図るよう示した。

このように、これまでも病弱教育の充実については、病気療養している児童生徒の教育保障の点からその重要性が示され、理解と啓発が進められてきているところである。国のがん対策事業も推進する中で、入院中の高校生支援が注目されるなど、平成6年のころより、病気療養している児童生徒が学ぶ体制整備が進み、その形も多様な形で保障されていると感じる。

一方で、GIGAスクール構想下とコロナ禍での「学校にいけない」状況対策が相乗し、ICT利活用での遠隔授業等は、Society5.0推進において、珍しいものでなくなっている。これまで、退院後の復学(自分の元の学校に戻る事)の際の支援に、遠隔でつなぐことを提案しても、接続環境がない、前例がない、といった理由で相手校からよい回答を得るのは難しかったが、その障壁も近年少なくなってきたと感じることもある。また、入院中の高校生へ、自校の授業配信を行い、学習保障をする学校も出てきているなど、先行きが明るいと感じなくもない。ICT利活用による、つなぐことへのハードルはだいぶ低くなっているのは事実である。

そこで、今一度、病弱教育が従前から大事にしてきたことや、平成6年の通知で示された意義を改めて考え、現況における学校教育の役割を考えながら取り組まなければならないと考える。単に、学習保障とは、知識・技能を教えることだけではなく、教科書の内容を進めることでもない。「学習保障」することで、子供たちが担任の先生や学級の友達から離れた孤独感や喪失感を埋めることができるのであり、そのことが治療に向かう力となり、その子らの将来につながる力になる。つまり、つながって、お勉強する機会を保障できるような条件が整ったのであれば、どうつながるか、が学校教育としては重要なのである。

VI おわりに

これからの生活に不安を覚えながらも希望に満ち、新しく始まる高校生活にわくわくしていただろう、そんなときに病気がわかり入院した生徒が、この4月、本校に転入した。これから遠隔授業が始まり、自分の高校に戻ることを目標に入院生活も勉強も頑張るつもりだった。そんな矢先に、その子の人生が閉じられた。あまりにも急だった。突然の家族や友達との別れは、本人自身が一番驚いていたことと思う。何より、これからたくさんしたいことがあったであろう、何がしたかったのだろうか、と思うと、「生=いま」という時間に向き合う子供たちの時間を大切にしなければと、病弱教育を担う我々の責務を改めて重く感じる。遠隔授業の準備をもう少し早められなかったか、高校との教育課程の内容の協議を、もう少し早く整えられなかったのか、もっと何かできることはなかったのか、何が必要だったか、できたか。そんな自責の念が押し寄せる。

勉強が嫌い、と言っていた子供ほど、入院してから「今日の宿題は何?」と宿題の催促をしたりする。小学校の担任の先生に伝えると、そんなはずはない、いつも宿題はやってこない子です、と驚かれて笑われる。その子は、宿題がしたいのではないのだ。宿題という「学校」とつながっていたいのだ。学ぶ、学びたい、と思う子供の真髓がここにあるのだと考える。

【引用文献】

- 1) 文部省(1994)「病気療養児の教育について」文初特294号
- 2) 文部科学省(2013)「病気療養児に対する教育の充実について(通知)」24初特支第20号

コロナ禍の制約が気づかせてくれた、重複障害児にとっての音楽教育の意義

～児童の実態に応じた「音楽の個別化」の配慮と相互作用に「音楽の持つ期待感」を利用すること～

千葉県立大網白里特別支援学校

教諭 大澤 理 恵

はじめに

本研究は、コロナ禍の特別支援学校小学部重複障害児を対象とした音楽の授業について、実践による成果や児童の様子を振り返り、コロナ禍の制約に対する工夫の効果を検証しようとするものである。

重複障害をもつ児童は「相手との相互作用」に困難さを持つ場合が多い。また重複障害のある児童の音楽教育では、他教科と同様に「教育の個別化」の配慮が高度に求められる。本報告では、コロナ禍の制約を打開する工夫として行われた、①児童の実態に応じた【音楽の個別化】の配慮と、②相互作用に【音楽の持つ期待感】を利用することの有効性について考察する。

I. 研究の背景

2020年2月下旬、政府が全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等に対して一斉休校措置をとることを要請し、これを受けてほとんどの学校が1～3ヶ月の一斉休校措置をとった。学校が再開されてからも、マスク着用、換気や消毒の徹底、黙食等、学校においてはさまざまな配慮がなされている。

本研究の実践は一斉休校から1年6か月が経過した2021年9月から2022年3月までを対象とした特別支援学校小学部重複学級での音楽の取り組みについての内容である。当時、千葉県教育長は2021（令和3）年9月29日に『緊急事態宣言の解除に伴う県立学校の教育活動等について（通知）』を出し、引き続き感染症対策を徹底した上で、原則として通常の教育活動を実施すること、感染リスクの高い活動については、活動内容や方法を工夫することを要請した。また、文部科学省による『学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～（2020.12.3 Ver.5）』では、「感染症対策を講じてもなお感染のリスクが特に高い学習活動」として、「室内で児童生徒が近距離で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器演奏」が挙げられた。

このような状況下で、特別支援学校の音楽教育の現場でもコロナ禍に対応した活動が迫られた。筆者はコロナ前の音楽の授業では音楽を介したコミュニケーションの活動（図1）を毎時間取り入れていたのだが、感染リスクを減らすために、コロナ禍においては避けなくてはならない状況となった。

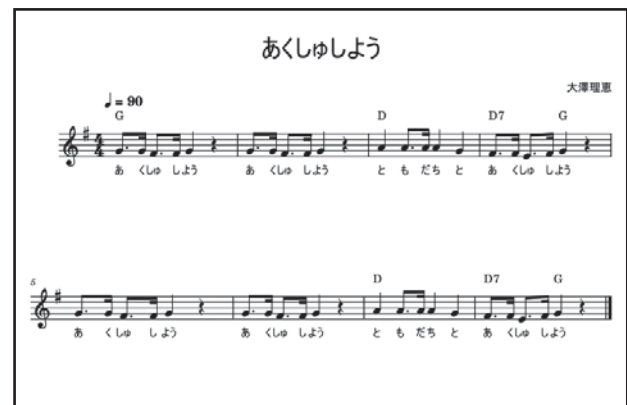


図1 あくしゅしょう（筆者作詞・作曲）

先行研究についてウェブ研究サイト Google Scholar で検索をしたところ、コロナ禍に対応した特別支援学校の音楽を扱ったものは、ゼロであった。しかし、コロナ禍に対応した小学校の音楽について、白井（2022）は非常時においても音楽教育が子どもたちの豊かな心を育てるために、普段から児童が様々な音楽活動を幅広く体験する授業内容の工夫をするよう心がける必要性等を述べている。

教師は、コロナ禍にあっても、児童に友達や教師と一緒に音楽活動をする楽しさを感じてほしいという願いをもっているといえるだろう。そこで、コロナ禍にあっても児童が心躍る音楽活動となることを目指した実践を行い、教育効果について省察することとした。

II. 目的

コロナ禍の制約がある中での音楽の授業の取り組みと成果について、小学部重複学級1年生を対象とした授業実践と児童の様子を振り返り、検証する。

Ⅲ. 方法

1. 対象

小学部重複学級1年生の3名であった。児童らは肢体不自由、知的障害、聴覚障害、斜視等を併せ持っており、生活全般に支援を必要としていた。また、3名とも発語はないものの、発声のみられた。1名は常時車椅子を使用していた。2名は歩行が非常に不安定で、移動時は教師の支援を要する児童であった。

2. 授業の形態とコロナ禍の制約

コロナ禍前は重複学級が一同に集まって音楽の授業を実施していたが、コロナ禍での重複学級の音楽は、学級での実施となっていた。また、感染リスクを減らすために、授業の実施場所は教室であった。重複学級に在籍する児童は、呼吸器や心臓に疾患を抱えている子がおり、特段の配慮を要する。

2021年9月から2022年3月までの本校「音楽」における感染予防対策は、以下の3項目であった。

- ①唾液が楽器に付着する可能性のある児童生徒は、共用楽器の使用を控える。
- ②鍵盤ハーモニカについては、個人持ちの物を使う。
- ③歌唱の指導は、児童生徒、教員ともにマスクを着用し、一方向を向いて歌う。

上記3項目のうち、対象の児童3名は「①唾液が楽器に付着する可能性がある児童生徒は、共用楽器の使用を控える」という項目に該当したため、感染予防対策に従って音楽室にある楽器の使用を避けることにした。

3. 実施時期

2021年9月～2022年3月の毎週水曜日13:20～13:50に実施し、合計23回であった。

4. 授業者

筆者（特別支援学校での音楽科指導歴10年）、音楽科指導歴30年以上の教師1名、特別支援学校勤務歴30年以上の教師1名の計3名であった。

5. 全体を通しての【配慮点】

キーボードはキャスター付きの台に乗せ、児童と音源（キーボード）との距離を調節できるようにした。キャスターに乗せて移動式にし、全ての曲を教師が伴奏することで、児童のそのときどきの様子に合わせて柔軟に対応できるようにした。【音楽の個別化】

6. 授業の目標

本実践の目標は以下のものであった。

音や音楽に注意を向けて気付き、身体部位を動かしたり、打楽器の音を出したり、声を出したりして自分

なりに表現しようとする事ができる。

なお、本実践は『特別支援学校小学部学習指導要領』音楽の第1段階の目標に基づいて設定している。『特別支援学校小学部学習指導要領』音楽の第1段階の目標は以下の通りである。

ア 音や音楽に注意を向けて気付くとともに、関心を向け、音楽表現を楽しむために必要な身体表現、器楽、歌唱、音楽づくりにつながる技能を身に付けるようにする。

イ 音楽的な表現を楽しむことや、音や音楽に気付きながら関心や興味をもって聴くことができるようにする。

ウ 音や音楽に気付いて、教師と一緒に音楽活動をする楽しさを感じるとともに、音楽経験を生かして生活を楽しいものにしようとする態度を養う。

7. 使用した曲や楽器

以下にある◎は、活動における目標を示す。

()内は表現と鑑賞の2領域のうち、どちらの活動であるかを示す。

1) 「はじまりのうた」

・「こどもかいのうた(近藤尚子作詞・大塚恵子作曲)」の歌詞の一部分を変更。

・授業の始めに必ず取り入れた。

・教師1名がキーボードを弾き、教師2名はリズムに合わせて児童の体に触れながら歌った。

◎音楽が始まると手足を動かしたり、動きを止めてじっと聴いたり、発声したりすることができる。

(表現)【音楽の持つ期待感の利用】

2) 「おわりのうた」

・「さようならのうた(高すすむ作詞・渡辺茂作曲)」の歌詞の一部分を変更。

・音楽の授業の終わりに必ず取り入れた。

・教師1名がキーボードを弾き、教師2名はリズムに合わせて児童の体に触れながら歌った。

◎音楽が始まると手足を動かしたり、動きを止めてじっと聴いたり、発声したりすることができる。

(表現)【音楽の持つ期待感の利用】

3) 「おちたおちた」わらべうた

・音楽☆(特別支援学校小学部知的障害者用) p.124.

・ソとラの2音だけで作られた4小節の短い曲。

・曲に続いて、教師が実際に物を落とした。

◎音楽に気付いて注目することができる(鑑賞)

◎物が落ちたときの音にも注目することができる。

(鑑賞) 【音楽による注目、期待感の効果】

- 4) 「おおきなたいこ」 小林純一作詞・中田喜直作曲
・音楽☆ (特別支援学校小学部知的障害者用) p.122.
・共用の楽器使用を避けたため、調理用の「粉ふるい」を使って手作りのオーシャンドラムを作った。
・手作り楽器は3人分作り、共用を避けた (図2)。
◎大きな音に期待感をもち注意を向けることができる。(鑑賞) 【音楽の持つ期待感の利用】

◎音楽の規則性 (歌詞に合わせて大きな音、小さな音の順に音が鳴る) や教師の歌声や身振りによって、次に大きな音、小さな音のどちらが鳴るのが分かり、期待感をもって聴くことができる。(鑑賞) 【音楽の持つ期待感の利用と促進】

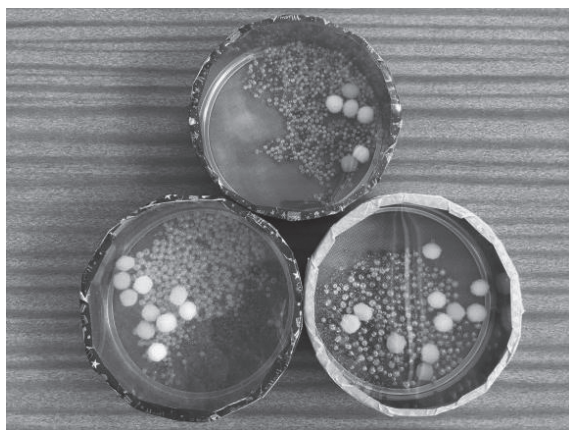


図2 手作りオーシャンドラム

- 5) 「はしわたりのうた」 阿部恵作詞・家入脩作曲
・音楽劇「3びきのやぎのがらがらどん」の1曲。
・音楽☆ (特別支援学校小学部知的障害者用) p.125.
・橋をそっと渡る様子を表現しており、言葉の抑揚が短い旋律になっている。
・曲想は、音の強弱の表現のうちの「弱」を表現したものである。

◎音楽を感じて、自分なりに「そっと」打楽器の音を出すことができる。(表現) 【音楽の個別化】

- 6) 「幸せなら手をたたこう」 きむらりひと作詞・アメリカ民謡
・呼びかけとこたえの仕組みが用いられ、旋律は反復させている。
・児童によって音を出すまでにかかる時間が異なるため、一人ずつ順番に行い、児童によって音楽の速さを変えたり、音楽の進行を待ったりした。【音楽の個別化】

・児童が呼びかけとこたえの「こたえ」の部分に気付けるように、「こたえ」の部分ではキーボードの音を出さないようにした。【音楽の相互作用化】

◎呼びかけとこたえの「こたえ」の部分で音を鳴らそうとすることができる。(表現)

- 7) 「ひらひらひら」 村田さち子作詞・乾裕樹作曲
・リトミックスカーフ (以下、スカーフ) を使用 (図3)。児童3名にスカーフを2枚ずつ配り、名前を書いた。共用はせずに個人使用。

・使用後は児童が使用したスカーフを洗剤で手洗いし、さらに洗濯機で洗った。

・音楽が流れる中でスカーフを揺らしたり、振ったり、落としたりした。

◎音楽が流れている中でスカーフを使って自分なりの表現ができる。(表現) 【音楽の個別化】

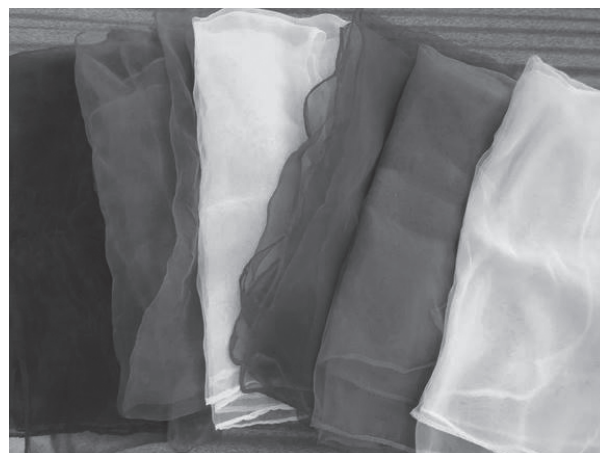


図3 リトミックスカーフ

- 8) 「アイスがとけた」 筆者作曲
・下行形音階 (図4) で棒アイスが溶けていく様子を表現し、上行形音階 (図5) で溶けたアイスが凍っていく様子を表現した。続いて「おんまはみんな」 (中山知子作詞・アメリカ民謡) を弾いて四つ這い移動、再び下行形音階が聞こえたら、その場で棒アイスが溶ける様子を表現した。なお、「おんまはみんな」を使用したのは、四つ這いで移動ができる児童が2名おり、児童の動きに曲の速さやリズムが適していたためである。

・車椅子を使用している児童については、車椅子に座って活動したり、床にマットを敷いて横になって活動したりした。【音楽の個別化】

◎下行形音階や上行形音階に気付き、手足を動かしたり、姿勢を変えたりして自分なりの表現ができ

る。(表現)【音楽の個別化】



図4 下行形音階



図5 上行形音階

8. 倫理的配慮

本論文の対象とした内容は、通常の授業としての音楽教育におさまる活動であり、研究倫理審査を要しないものである。しかし、本稿では、児童の個人情報が特定できないよう配慮し、個人のプライバシー保護をはかっている。

IV. 結果

児童の様子は以下の通りであった。

(1) 「はじまりのうた」「終わりのうた」

1名の児童は曲が始まると声を出し、曲が終わると同時に発声を終わる姿が見られるようになった。

1名の児童は、曲が流れている間は声を出さず、曲が終わったときに声を出すようになった。

(2) 「おちたおちた」

曲が始まると3人ともキーボードを弾く教師に視線を向け続け、教師が落とす物に関心をもっていた。特に、キーボードを弾く教師が椅子から落ち、椅子の倒れる音がすると、児童3人が声を上げて笑い、楽しんでいた。

(3) 「おおきなたいこ」

児童3名とも大きな音の前に音源に注目したり、目をつぶって構えたりしていた。2名の児童は、繰り返し取り組む中で、教師が腕を大きく振り上げる動作をしなくても、音楽の流れを理解して、大きな音が鳴ることを期待して注目するようになった。

(4) 「はしわたりのうた」

障害の状態により、強い音を出すことが難しい児童が1名いたが、そっと音を出す雰囲気音楽であったため、児童の出した音が周囲に認められ、褒められて成功体験となった。他の児童も、教師がかすかな声で歌うのを聴いたあと、そっと音を鳴らすことができた。

(5) 「幸せなら手をたたこう」

障害の状態により、タイミングよく音を鳴らすことが難しい児童であっても、呼びかけとこたえの「こたえ」の場面で腕を動かし始め、音を鳴らそうとする姿が見られた。このような場合、伴奏者は次の旋律を弾くのを待ち、児童が音を鳴らしたのを聴いてから次の旋律を弾き始めるようにした。

1名の児童は、友達の順番の間、「幸せなら手をたたこう」の旋律の後にタイミングよく「タンタン」と足で床を叩くことがあった。

(6) 「ひらひらひら」

障害の状態により、物を握り続けることが難しい児童が、薄い布であるスカーフを握り続け、ときどき上下に腕を動かそうとしていた。その児童にとって、この活動は疲れやすい内容であったため、短時間で切り上げるようにした。

(7) 「アイスがとけた」

繰り返し取り組むと、児童2名は下行音階が始まる場面で笑うようになった。このことは児童2名が「おんまはみんな」から下行音階への音楽の変化を聞き分けていることを意味する。

障害の状態により、姿勢を変えることが難しい児童は、腕を動かすことで溶ける様子、凍る様子を自分なりに表現しようとしていた。他の2名の児童は、教師が溶けたり凍ったりする動きに関心を示し、溶けていく教師の動きを見て声を出して笑っていた。

(8) 全体を通して

活動準備のために、キーボードをキャスター台に乗せると、児童は音楽活動が始まることを期待して声を出して喜ぶようになった。

活動の途中で立ち上がることの多い児童であっても、音楽活動では最後まで着席することができた。児童が一人ずつ順番に活動する場面においても、自分の順番がくるのを期待して待つことができたり、「誰からにしますか」という問いかけの場面で、キーボードや楽器に手を伸ばして、やりたいという気持ちを表現するようになったりした。

2名の児童は、昼休みや空き時間などに、教師の腕を引いて「キーボードを弾いてほしい」と要求を伝えるようになった。

V. 考察

重複障害児の音楽教育で、児童の実態に応じた【音楽の個別化】の配慮と【音楽の持つ期待感】を利用した実践を行った。この工夫は、コロナ禍によって音楽室にある楽器の使用を避けるという、音楽教育の制約を打開するために行ったものでもあった。

1) 【音楽の個別化】

1名の児童は曲が始まると声を出し、曲が終わると同時に発声を終わる姿が見られるようになり、別の児童は、曲が流れている間は声を出さず、曲が終わったときに声を出すようになった。このように児童と音楽との関わりは、個々に異なりながらも、児童の中で音や音楽に自ら関わろうとする共通の気持ちが育っていると考えられる。教師は個々の児童と音楽との関わりをみきわめ、児童のわずかな動きを見逃すことなく応答的に関わるのが大切であるといえるだろう。また、「幸せなら手をたたこう」の活動では、教師が児童の動きに合わせて次の旋律を弾くのを待ち、児童が音を鳴らしたのを聴いてから次の旋律を弾き始めるようにした。このような児童の実態に応じた「音楽の個別化」によって、タイミングよく音を鳴らすことが難しい児童であっても、呼びかけとこたえの「こたえ」の場面で腕を動かし始め、音を鳴らそうとすることができるようになったと考えられる。

2) 【音楽の持つ期待感】の利用

「アイスがとけた」では、児童が教師の身体表現に関心を示し、溶けていく教師の動きを見て声を出して笑う姿が見られた。「おちたおちた」では、歌に合わせて教師が椅子から落ちると、児童3人が声を上げて笑っていた。「おおきなたいこ」では、児童が大きな音の前に音源に注目したり、目をつぶって構えたりする姿などが見られた。これらには、【音楽の持つ期待感】の利用が共通していた。また、【音楽の持つ期待感】の利用には、音楽の持つ規則性（例えば、「おおきなたいこ」であれば、大きな音、小さな音の順に音が鳴る、「アイスがとけた」では、下行音階の次に上行音階になるなど）が関わっているといえる。

3) 学習指導要領との関連

学習指導要領に記載されている目標に基づき、本実践を振り返ると、「ア 音や音楽に注意を向けて気付く

とともに、関心を向け、音楽表現を楽しむために必要な身体表現、器楽、歌唱、音楽づくりにつながる技能を身に付けるようにする」という目標に関する成果の一例は、「はしわたりのうた」の活動で児童が音楽の「弱」の表現を感じ取り、そっと音を鳴らすことができた様子から見て取れる。次に、学習指導要領に記載されている目標「イ 音楽的な表現を楽しむことや、音や音楽に気付きながら関心や興味をもって聴くことができるようにする」という目標に関する成果の一例は、児童が「おんまはみんな」から「アイスがとけた」の下行音階への音楽の変化を聞き分けていた様子から見て取れる。学習指導要領に記載されている目標「ウ 音や音楽に気付いて、教師と一緒に音楽活動をする楽しさを感じるとともに、音楽経験を生かして生活を楽しいものにしようとする態度を養う」という目標に関する成果の一例は、児童が昼休みや空き時間などに、教師の腕を引いて「キーボードを弾いてほしい」と要求を伝えるようになった姿から見て取れる。以上のように、コロナ禍の制約があるなかでも、学習指導要領に書かれたア、イ、ウの目標を網羅した授業実践ができたと考えられる。

VI. 本研究の限界

本研究対象となったのは、重複障害学級の一部の児童のみであり、本研究結果が十分な普遍性をもつとはいえない。今後はコロナ禍における特別支援学校の音楽の実践研究が集まることが求められるだろう。

VII. 結論

コロナ禍の制約の中で、重複障害をもつ児童の音楽教育には児童の実態に応じた【音楽の個別化】の配慮と、相互作用に【音楽の持つ期待感】を利用することが有効であると改めて気付くことができた。さらに、【音楽の個別化】と【音楽の持つ期待感】は、重複障害児の「相手との相互作用」を促していた。これこそが、重複障害児にとっての音楽教育の意義であるといえるだろう。

引用文献

- 千葉県教育庁 (2021) 「緊急事態宣言の解除に伴う県立学校の教育活動等について (通知)」。
- 文部科学省 (2021) 『音楽☆特別支援学校小学部知的障害者用』東京書籍株式会社。
- 臼井真 (2022) 「小学校音楽科授業における一考察 コロナ禍に対応して」神戸親和女子大学児童教育学研究, 41.

優 秀 賞

ESDの視点からリデザインした「小中一貫教育」のカリキュラム・マネジメント

～SDGsに向けて皆で「川戸の子」を育てるホールスクールアプローチ～

千葉市立川戸小学校

校長 三 橋 勉

1 はじめに

本校は千葉市中央区の東端に位置し、児童数は計 329 名の中規模校である。同一学区で隣接する川戸中学校と共に千葉市初の「小中一貫教育校」となり、令和4年度で3年目を迎えている。学校の周囲には支線都川が流れ、緑豊かな自然に恵まれた環境が今も残り、古くから地域とのつながりも強い地域である。年間を通して学校と地域とが連携・協力しながら「川戸の皆で川戸の子を育てる」をモットーに歴史を重ねている学校である。

2 研究の目的

本研究は、小中一貫教育に SDGs(持続可能な開発目標)に向けて ESD(持続可能な開発のための教育)の視点からリデザイン(再設計)したカリキュラム・マネジメントについて、その有効性を探ることを目的としている。その方向性としては、新たに取り入れる ESD の視点のため、さらに活動量を増やしていくのではなく、両方を重ね合わせることで相乗効果を図り、教育活動の質的向上をねらっている。ESD と教員の働き方改革の両立も、学校教育を「持続可能なもの」にしていくための重要な要素のひとつである。以下に、昨年度の実践を中心に、リデザインしたカリキュラム・マネジメントを通して、皆で「川戸の子」を育てるホールスクールアプローチについて述べる。

3 ESD「6つの視点」と「7つの資質・態度」

国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究[最終報告書]」では、ESD とは現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む(think globally, act locally)ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらす、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動とある。つまり ESD は「持続可能な社会の創り手を育む教育」のことと言える。

(1)持続可能な社会づくりを構成する「6 つの視点」を軸にして、教員・児童・生徒が持続可能な社会づくりに関わ

る課題は次のようにまとめられる。

1. 多様性(いろいろある)
2. 相互性(関わりあっている)
3. 有限性(限りがある)
4. 公平性(一人一人を大切に)
5. 連携性(力合わせて)
6. 責任制(責任を持って)

(2)持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な「7つの能力・態度」は次のとおりである。

1. 批判的に考える力
2. 未来像を予測して計画を立てる力
3. 多面的・総合的に考える力
4. コミュニケーションを行う力
5. 他者と協力する力
6. つながりを尊重する態度
7. 進んで参加する態度

こうした視点を取り入れ、児童の能力・態度を育成するために一貫教育のカリキュラムのリデザインを実施する。

4 研究内容

小中一貫教育のグランドデザイン(図1)には共通の目指す姿と目標がある。ここに「郷土を大切にし、社会の一員となる」とあるため、さらに上位目標として SDGs を位置づけ、9年間を通して SDGs4「質の高い教育をみんなに」をホールスクールアプローチで具現化していく。

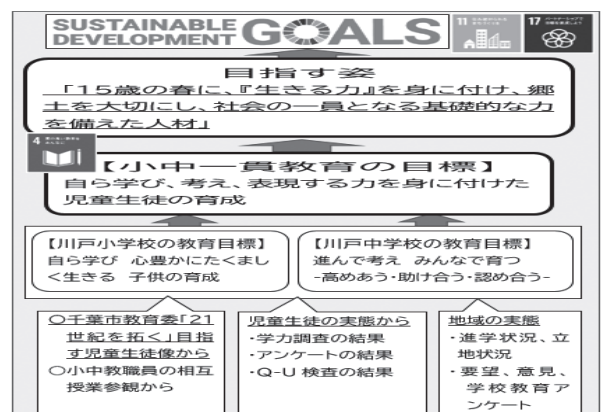


図1 小中一貫教育校のグランドデザインと SDGs

5 活動組織

小中一貫教育推進委員会(図2)には、学校運営部会と各学習部会がある。共に活動している保護者・学校評議員会・地域も連携・協力パートナーとして構成員とし、ホールエリアでSDGs1「すみ続けられるまちづくりを」と17「パートナーシップで目標を達成しよう」をめざしている。

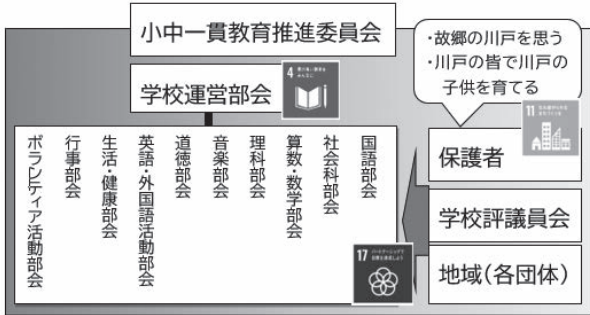


図2 小中一貫教育校全体の部会構成図

6 令和3年度年間活動(コロナ対策のため縮小版)

月	小中一貫研究・研修内容	小中関連行事
4月	・4/2 小中教員の顔合わせ会 ・4/21小中一貫代表者会議①	・外国語・外国語活動の教員研修 ・故郷づくりの会「菊作りボランティア」(通年) ・エコキャップ回収(通年) ・中学校教諭による家庭科継続指導(中→小6)
5月	・5/21 小中一貫全体会議①	・「いじめについて考えよう」私の行動宣言
6月	・6/4 教育改革推進課、小中校長、教頭、一貫教育担当での打合せ ・6/24 小中一貫全体会議② ・児童生徒アンケート調査・Q-U検査	・「ふわふわ言葉」「チクチク言葉」 ・租税教室 ・生徒総会見学
7月	・7/8 小中一貫代表者会議②	・道徳部会「指導計画」の作成(中)
8月		・子ども会夏季キャンプ(コロナのため中止)
9月		・外国語・外国語活動研修
10月		・担任による英語授業実践(小4対象) ・陸上大会乗り入れ練習(小6→中学校)
11月	・11/1 小中一貫全体会議③ ・11/2 教育改革推進課、小中校長、教頭、一貫教育担当での打合せ ・11/30 小中一貫代表者会議③	・算数 計算確認テストの実施(小全クラス) ・担任による英語授業実践(小3) ・俳句を作成し中学生と交流(小6→中3) ・川戸美術館(中→小6) ・子ども会「子ども会祭り」(中止)
12月	・12/13 小中一貫全体会議④	・小中教え合い学習(中2→小6) ・担任による英語授業実践(小6) ・俳句を作成し中学生と交流(中3→小6) ・川戸手作り公園の清掃ボランティア
1月	・1/27 小中一貫代表者会議④	・小5算学習(中の音楽専科→小) ・音楽の授業参観(小6→中の音楽専科) ・都道府県かるた作成(小4) ・担任による英語授業実践(小5) ・英語スピーチコンテストの動画視聴(小6) ・小6体験入学
2月	・2/22 小中一貫全体会議⑤	・中学校での「校歌」指導(小6)
3月		・フラワーロードプロジェクト(小4→中3) ・子ども会「お楽しみバス旅行」(中止)

令和3年度は「縮小版」で実施したが、縮小前には下記の小中関連行事も実施しており、今後再開が望まれる。

月	小中関連行事
4月	・情報モラル講習会(小5・6中1) ・川戸小学習参観(中学校教員の参観) ・川戸中授業参観(小学校教員の参観)
5月	・川戸小運動会(中学校教員の参観) ・川戸中体育祭(小学校教員の参観)
6月	・生徒総会見学(小6→中) ・川戸中授業参観日・バザー ・川戸小土曜参観 ・音楽発表会の講評(中の音楽専科→小) ・小中全校「いじめ撲滅宣言」への取り組み ・小学生の絵をみる会(中→小)
7月	・ジェイコー千葉(高齢者施設)ボランティア ・都苑納涼会(高齢者施設)ボランティア
8月	・ホテルを見る会
9月	・地域美化活動(小中高児童生徒、保護者・地域の方々参加) ・敬老会ボランティア ・理科乗り入れ授業(小6→中)
10月	・全校遠足でゴミ拾いボランティア ・川戸小地区スポーツ祭 ・川戸公民会文化祭ボランティア ・合唱コンクール練習見学会(小6→中3)
11月	・保健体育(柔道)交流(小→中) ・川戸っ子フェスティバル(中→小) ・イングリッシュルーム交流(中1→小)
12月	・音楽の授業参観(小6→中の音楽専科)
1月	・球技大会練習(中のバスケット→小6) ・音楽の授業参観(小の音楽専科→中3)
2月	・小6中学校への体験入学 ・川戸小学習参観日

7 各部会での取り組み

各部会の取り組みをESDの持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な「7つの能力・態度」を育成するために重ね合わせてリデザインすると次のようになる。(活動で育成したい番号をESD【1～7】として表記する)

(1) 学校運営部会

学校部会の構成員は管理職、教務主任、一貫教育主任であり、代表者会議を定期的に開催し、カリキュラム全体計画や進捗状況の把握、児童・生徒の様子などの情報交換を中心に行っている。年間を通して課題達成のためにPDCAサイクルを回しながら一貫教育のカリキュラム・マネジメントを実施している。

(2) 学習部会 (活動事例の一部のみを紹介)

① 国語部会 ESD【1, 3, 4, 5, 6, 7】

ア. 俳句交流会(12月)

小学6年生と中学3年生が自作の作品を交換しあい、鑑賞会を開催した。小中とも指導の中で系統性をもたせ俳句の作り方、鑑賞の仕方などを行っている。児童生徒は「自作を発表する」という目的意識をもって学習に取り組むため意欲を高めることができた。また、互いに感想を書きあうことで相手の句の良いところを認めようという気持ちや改善点を考える力も育てることにつながった。

③算数・数学部会 ESD【1, 2, 3, 4, 5, 6, 7】

ア 全児童の計算確認テスト(11月)

小学校の全児童を対象に基礎的な計算テストを毎年実施し、計算力の定着状況を確認している。児童の成績分析の結果は中学校と共有し、進学後の指導に生かしている。令和3年度は前年に比べ4つの学年で平均正答率の向上が見られたり(図3)、進級に伴う変化では3つの学年で昨年度に比べ正答率が向上したりするなど着実に成果が表れている。継続することにより、児童生徒の成績を9年間追い続けることのできるため、正答率が低い児童は中学校において個別最適な学習指導を行うことにつなげている。経年変化も追い続けているため、全体傾向として、2けたの数のかけ算や分母のちがう分数同士の計算につまずきが多いことなどもわかり、適切な補習へとつなげられている。今後も継続してデータをとることで学力面でのSDGs4「質の高い教育をみんなに」も実現したい。

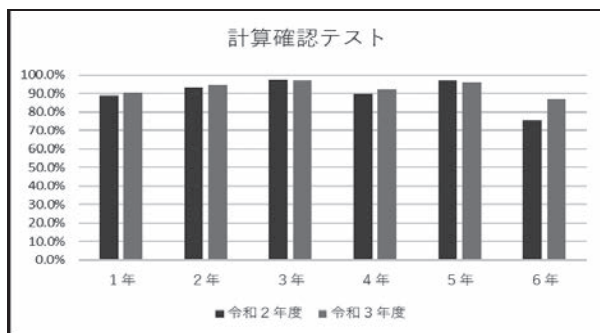


図3 計算確認テストの結果

イ 小中「教え合い学習」の実施(12月)

中学2年生と小学6年生がペアになり、算数をマンツーマンで教える「教え合い学習」を実施した。6年生が3コース(基本的な計算問題、基本的な図形の計量、発展的な文章問題)から自分で選択した課題を参考に、小学生と中学生の両者が適切な組み合わせとなるように中学生とのペアリングを行っている。授業では、小学生の解答を中学生が丸付けをして間違えたところを解説する形の学習会を続けている。



写真1 教えあい学習の様子

【3コースで扱った問題例】

- A 計算問題(かけ算九九・分数など)
- B 図形の計量(面積・体積など)
- C 文章問題(割合など)

＜小学6年生の感想＞

・自分の苦手なところを知ることができてよかった。中学生に教えてもらったので、算数をもっと好きになれた。
・中学生の説明はわかりやすくてすごいと思った。自分もそんな中学生になりたい。

＜中学2年生の感想＞

・小学生に教えるのは難しかったが、自分自身も小学校の学習を振り返るよい機会になった。
・わかりやすいように工夫し、数字だけではなく、図や文字も使って説明したので、納得してもらうことができた。

教え合い学習は、小学6年生にとって、自分の得意不得意を確認する学習面のメリットだけではなく、中学生に対する感謝や憧れを醸成するよい機会となった。中学2年生にとっては、説明することの難しさを感じることで、表現方法を工夫することができ、学習内容のより深い理解につなげることができた。算数の学習が、これから学ぶ数学ともつながっていることにも気づけたので、今取り組んでいる学習の重要性も感じる事ができた。この「教え合い学習」は楽しいイベントではあるが、それだけではない、双方の深い学びにもつながるものとなった。

⑤英語・外国語活動部 ESD【2, 3, 4, 5, 6, 7】

(1)外国語・外国語活動の一貫教育活動(4月・1月)

小中とも同一の外国語活動担当教員が一貫した指導を行っているため、4月初めに全教員を対象に小中共通させている授業形態、授業開始までの準備、評価等について説明を行った。1月には中学生のスピーチコンテストの動画を小学6年生が視聴する学習も行き、9年間を意識した一貫教育ならではの内容も盛り込んでいる。

(2)中学校教員による小学校参観授業(10,11,1,2月)

3年から6年までの学年で、担任と外国語担当の T.T による授業を中学校教員が参観し、小学生の学習状況や発達段階、学習内容についての理解を深めた。小学校の担任も教材研究をいつもより深めることで、普段よりも積極的に取り組む児童が多いと感じている。

＜小学校担任の感想＞

T.T のため教員と児童、児童と児童のコミュニケーションを多く取りながら楽しく活動することができた。指導・助言をいただいた経験を他の授業でも生かしていきたい。

＜中学校教員の感想＞

6年生が、日本の観光地をタブレット端末を使って紹介するという授業を参観した。一人一人の児童が端末を使いこなし、積極的にコミュニケーション活動に取り組んでいる姿を見て中学校でもやってみようと感じた。

同一の教員が小中を兼務し、両校で授業をしているため、9年間の指導の継続性を担保しやすいことが利点である。授業の形態や指導法についても、小中で一貫した取り組みが可能であり、教員間の情報交換も小中間で密にすることができるため児童生徒理解にも役立った。

また、小中で共通する児童生徒のつまづきも見つけやすいため、中学校で差が開きがちな「書く活動」に対する個人差を小学校段階から意図的・計画的に取り入れて、先取りした指導も実施することができた。

⑥音楽部会 ESD【2, 4, 5, 6, 7】

ア. 中学校教員による小学校での乗り入れ授業(1月)

中学校の音楽教員が小学校で箏の楽器の仕組みや演奏方法などの授業を行い、その成果を中学校において演奏会を披露した。普段の先生とは違うこともあり、小学5年生は中学校の音楽教員の説明をよく聞き、積極的に練習に取り組む姿が見られた。「箏のことは今まで知らなかったけど、もっと知りたくなった。」「中学生になったら、もっとうまく弾けるように頑張りたい。」と児童からは意欲的な感想も得られた。今後は、教員による乗り入れ授業だけでなく、算数で実施しているように中学生が小学生に演奏の方法を教える「琴の教えあい学習」にも発展させることで中学生の主体性やリーダーの育成にも繋がると考えている。

⑦道徳部会 ESD【1, 2, 3, 4, 5, 6, 7】

ア. 小中全学年の「いじめについて考えよう」～私の行動宣言～(5月)

いじめ撲滅のための「行動宣言」は、児童生徒一人一人がいじめについて考え、いじめをしないという自分の目標をシートに記入し、それを教室や廊下に掲示している。一貫校全員で同じめあてに向けて行動宣言を宣誓しているため全体での一体感が感じられ、意識の高揚と行動の改善が図られている。

イ. 「友達とのコミュニケーションを見直そう」～「ふわふわ言葉」・「チクチク言葉」～(6月)

全児童生徒が、自分が言われて「うれしい言葉(ふわふわ言葉)」や「いやな言葉(チクチク言葉)」について考え、それぞれの思いを伝え合うことができた。発達段階に応じて他者理解が一層進むため、普段の自分の生活や振り返り、今後の生活に生かそうという気持ちが高まった。

こうした取り組みは、小中共通の取り組みとして毎年実施しており、「いじめ防止」や「より良い人間関係作り」のための授業として定着している。毎年全員で継続することにより、児童生徒もその意義について心の成長とともに

捉え直し、理解を深めることができていると考える。

とくに小学生の場合は個人の語彙力の差から、相手や状況に応じて、適切な言葉遣い方ができない子も少なくない。学年の発達段階にあわせて、自分が発する言葉によって相手がどのような気持ちになるか、自分と相手の受け止め方の違いなども想像する学習を繰り返すことで、誰にでも優しい言葉かけをしていこうとする態度を育てている。中学生の場合は「いじめ」や「より良い人間関係」について、それぞれの立場で考えることはできるが、実生活ではその「考え」が「行動」として伴わない場面がしばしば見受けられる。「個人」が「集団」になると本音と建前に差が生ずることがあるので、小学校から継続した心を育てる取り組みが重要であると感じている。

⑧生活・健康部会 ESD【2, 3, 5, 7】

ア. 小学校陸上大会の乗り入れ練習(9月～10月)

小学生のソフトボール投げの練習を中学校の広い校庭を借りて実施した。中学へ練習場所を移動したことにより、気持ちも改まるだけでなく、小学校の校庭で練習する他の児童との接触回避もできたので安全面にも成果があった。一貫校として「人的」な関わりだけではなく「場所的」な連携も効果的であると感じた。

⑨行事部会 ESD【1, 2, 3, 4, 5, 6, 7】

ア. 生徒総会見学(6月)

以前は中学校に直接見学に行っていたが、令和3年度はタブレット端末による生徒総会の動画視聴となった。6年生にとっては中学校生活への具体的なイメージをもつことができ好評であった。ただし例年と比較するとオンラインであったため生徒総会ならではの臨場感や緊張感が感じられないのが残念であった。

イ. 川戸中美術館(中学生の作品鑑賞会)(11月)

中学生の美術作品を小学生が鑑賞する川戸美術館の開設に向けて、中学生にとっては、よりよい作品をつくりたいという意欲の向上につながり、中学生の作品を見た小学生にとっては、レベルの高さに感動するとともに、自分が学んでいる図画工作への興味・関心も高めることにつながった。



写真2 川戸美術館で鑑賞する児童

ウ. フラワーロードプロジェクト(3月)

小中一貫教育のさまざまな取り組みでお世話になった中学生の卒業式を彩るため、小学生が一人一鉢栽培で育てた花で式場までの通路をいっぱいにするフラワーロ

ードプロジェクトを実施した。中学生の感想には「きれいな花を見て、私たちのために大切に育ててくれたのだな」と思い嬉しくなった」「体育館までの道がきれいなフラワーロードになり、卒業式がより楽しみになった」などがあった。小学生にとっては感謝の気持ちや数年後の自分の将来像を見ることができ、中学への憧れや進学への期待や目標にもつなげることができた交流となった。

⑩ボランティア活動部会 ESD【1, 2, 3, 4, 5, 6, 7】

ア. 川戸手作り公園の清掃ボランティア(12月)

6年生が学区内にある川戸手作り公園の清掃を計画し公園内の清掃や、花壇の整備、立て札の付け替えなどを地域の方々と一緒に行



写真3 手作り公園を清掃する児童

った。総合的な学習の時間での身近なボランティア活動を通して、ボランティア活動そのものに関心をもつ児童も増えた。毎年、継続的に活動を進めていくことで地域の方々とも親しくもなっている。その成果は中学校でのボランティア活動の参加率の向上にもつながっており、活動後のアンケートでは、「人の役に立つと嬉しい、気持ちがよい」、「達成感を感じた」と答えた児童がほとんどであった。今後も小中学校で行っているボランティア活動に進んで参加したいと98%の児童が答えていて、ボランティア活動に対する意識も高い水準を維持している。令和3年度は、感染症予防のため、小中合同でのボランティア活動が中止となったが、例年は合同での活動を実施している。

イ. 中学生によるボランティア活動紹介(3月)

中学の生徒会本部が小学生に向けてボランティア活動を紹介する活動がある。中学校で行ってきた数々のボランティア活動(エコキャップ回収等)をスライドで紹介することで、小学生のうちから意識を高め中学へ進学したときの自分の姿をイメージすることにもつなげられている。

⑪地域との連携活動(各団体) ESD【2, 3, 4, 5, 6, 7】

ア. 川戸故郷づくりの会との連携(4月から11月まで)

川戸故郷づくりの会は「菊づくり部会」「蓮部会」「螢部会」「歌声部会」「凧づくり部会」に分かれており、児童生徒と共に様々な活動を行っている。コロナ禍で休止しているものが多いが「菊づくり部会」は活動を実施し菊の差し芽や水やり、3本仕立てなどを児童生徒が地域の方と一緒にいき、秋には大輪の花を公民館に展示した。

イ. 川戸地区子ども会との連携

子ども会とも連携し「夏季キャンプ」「子ども花壇活動」「子ども会祭り」「お楽しみバス旅行」などの地域ふれあい活動をホールエリア(地域全体)で実施している。年間を通した数々の楽しい活動を体験する中で、川戸で育つ良さを実感し、「郷土を大切に作る心」を育てている。

8 成果と課題

(1) 成果

①リデザインによる「持続可能な社会の創り手」づくり

小中一貫の教育活動とESDにおける「6つの視点」と課題解決に必要な「7つの能力・態度」には高い親和性と多くの共通性があるため、リデザインしたカリキュラム・マネジメントを実施することで、活動の質的向上につながるということがわかった。ESDの視点を取り入れた9年間の多様な教育活動を通して、ふるさとの自然や他者との深いつながりに気づくことができ「郷土を愛する心」を育てることができる。こうした環境で育った小学生は成長したのちに、ふるさとを大切に作る大人となり、子や孫といった次の世代にバトンをつなぐ社会の一員になっていくのであろう。

ESDがめざす「持続可能な社会の創り手」を育てるには、まずは自分が暮らしている地域を大事にする心、故郷の自然や人々に感謝し、愛おしく思う心を育てることが不可欠である。その心が、やがて地域から地球規模の社会問題、環境問題へと考えを広げ、行動していく基盤になっていく。そうした未来に向けて、これからもホールスクールで心を育てる感動体験を積み重ねていきたい。

(2) 課題

①ウィズ・コロナにおける活動のリデザインの継続

新型コロナウイルス感染症対策のため、活動計画を縮小したり変更したりすることが迫られている。人との接触機会を減らすためタブレット端末でのオンラインによる取り組みなどを工夫して実施しているが、対面での話し合いや触れ合い、共に活動する学習に比べると十分ではないと感じる場面も多い。とくに小学生にとってはモニターを通して間接的に学ぶより、人やものどじかに触れ合う直接体験の方がより効果的な深い学びにつながるであろう。ウィズ・コロナの時代であっても児童にとって価値ある学びとなるように、これからも教育活動をリデザインし工夫を続けていく必要がある。

【参考文献】

「学校3.0×SDGs」 諏訪哲郎他(キーステージ21)
「SDGs思考」 田瀬和夫(インプレス)

子供と保護者に選ばれ・満足される学校を目指して

～学校存続をかけた小規模特認校の挑戦～

柏市立手賀東小学校

校長 佐 和 伸 明

1 はじめに

本校は、学制が公布された1872年(明治5年)度に創立し、今年度で150周年を迎える。学区には、現存する首都圏内の教会堂として最古の「手賀教会」など、歴史的価値のある建造物も多数残されている。近年は、児童数が減少し、複式学級を有していることから、2013年度より柏市内全域からの転入学を認める小規模特認校に指定された。小規模特認校制度は、学校選択制の一形態である特認校制のうち、小規模校において取り入れられている制度であり、法規に根拠を持たない。

筆者は、2018年4月に校長として着任し、小規模特認校に求められる学校経営の在り方を模索してきた。本稿は、今日までの4年4か月間に取り組んできた内容と、その結果について述べるものである。

2 研究の背景

小規模特認校制度がスタートした2013年度は、学区外より新入生4名、転入生1名、合計5名の児童を迎えた。しかし、その後2018年度までの6年間は、在籍数の大きな変化は見られない。(図1)

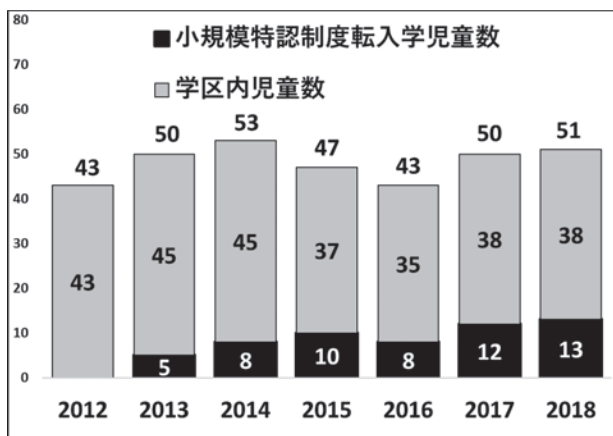


図1：在籍数と小規模特認校制度転入学児童数の変化(5月1日)

その理由の一つは、学区内の児童数の減少である。2013年度の学年平均児童数は7.5名であったが、2018年度は6.3名に減少した。その傾向は今後も続き、柏市の推計によると、この後6年間(2019年度から2024年度まで)の入学予定者の平均は3.7名となっている。また、学区全域が市街化調整区域になっているため、転

居による児童数の増加は見込めない。

もう一つは、小規模特認校制度による転入学児童数があまり増えていないことである。初年度と同様に、年間5名程のペースで増えていけば、2018年度は30名程度在籍している計算となるが、実際には13名で、その半分にも満たない。この最大の理由は、通学の課題である。学校見学会に参加したが入学しなかった家庭にアンケートを行った結果、全家庭(100%)が「登下校の送迎」を理由にあげていた。柏駅からの路線バスはあるものの、運行本数が少なく、通学に利用することは不可能である。転入学すれば、自家用車で送迎することになるので、保護者が負担だと感じたり、送迎ができなくなった時の心配をしたりするのは、もっともなことであろう。スクールバスの運行や路線バスの増便、タクシー料金の割引等について教育委員会やバス会社等に相談しているが、どれも実現の目途はたっていない。

このまま児童数が減り続ければ、いずれ「学校統廃合」せざるを得ない状況になってしまうだろう。柏市教育委員会が地域住民に意見を聞いたところ、「伝統ある学校を残したい」という意見が大半であったと聞いている。その意見を尊重し、小規模特認校に指定して学校の存続を図ったのである。学区の児童数はどんどん減少していく。学区外から通学するための交通手段の整備は進まない。それでも、保護者や地域住民は学校の存続を願っている。そうすると、学校を存続するために私たち教職員ができることは、子供と保護者に選ばれる魅力ある学校を創る以外はないと考える。

3 研究の目的

本研究の目標は、「学区外の子供と保護者から選ばれる学校になること」である。そのための手立てとして、保護者の送迎の負担をも超えて転入学したくなるような、特色ある教育活動を推進していく。指標となるのは、転入学児童数の変化ではあるが、増加することだけを目指すのではない。これからの時代に求められる資質・能力を育む教育を実現し、『子供にも保護者にも満足される学校を創造すること』が、最終的な目的である。

4 研究の方向性

本校では、地域の豊かな自然環境を活かし、異学年集団(縦割り)による様々な取り組みが、長年受け継がれてきた。全校児童で行っている、田植えや稲刈り、いちご狩り、収穫祭、全校宿泊などの体験活動では、子供たちが自然の大切さを学び、お互いに助け合い、年下の友達にやさしく教えてあげる姿が随所に見られる。「地域の特性を活かした自然体験活動」や「異学年による交流活動」は、本校の大きな特色と言える。しかし、これらの「不易」の教育だけでは、学区外から転入学してくる児童が限られていることは、先に述べた6年間の状況から明らかとなった。

一方で、児童数が少ない状況にあることは、これまでの教師主導の一斉一律の授業スタイルの限界から抜け出し、情報活用能力や言語能力、問題解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を確実に身につけさせつつ、個人の進捗や関心に応じた学びの場を目指す、これからの時代に求められる「流行」の教育を、他校に先駆けて実施することが可能であると考えた。

そこで、全国的な取り組みが始まったGIGAスクール構想に先駆け、2018年度から児童1人1台端末環境を整備し、「1人1台端末による最先端の教育」を本校の新たな特色に加えることにした。『小さな学校大きな学び～教育の不易と流行がここにある～』をスローガンに、下記の4つの特色ある教育を同時に推進していく。ただし、本稿では文字数に限りがあるので、「1人1台端末による最先端の教育」に関連した取り組みを中心に紹介することを、ご容赦願いたい。

〈手賀東小が目指す学校の特色〉

- きめ細かい学習支援や生徒指導
- 地域の特性を活かした自然体験活動
- 異学年(縦割り)による交流活動
- ◎1人1台端末による最先端の教育

5 具体的な取り組み

(1) 1人1台端末による学習支援(2018年度～)

小規模校としてきめ細かい支援を行ってきたはずなのに、本校の学力調査の結果は、柏市の平均よりかなり低い状況であった。そこで、これまでの授業スタイルを見直し、効果的な少人数指導の在り方を研究することにした。ここでは算数科の取り組みを紹介する。

柏市の学力・学習状況調査(以下「学力調査」)は、毎年、同じ問題を使っており、過去5年分の結果を分析し

たところ、児童がつまずいている問題は全く変わっていないことが判明した。また、正答率の低い位置にいる児童は、2年生の学習内容で既につまずいており、卒業まで改善されていないことも分かった。

課題の改善に向けては、「PDCA」サイクルが有効だと言われるが、これまでの授業研究で弱かったのは(C:評価)の部分であろう。教師は、綿密に計画を立てて授業をするものの、その結果についてはあまり検証することはできていなかった。それは、評価の基準がはっきりしていないためではないか。つまずきの内容やつまずきそうな児童がわかっているのであれば、それがどう変容したかということ、学級全体の正答率および個の理解度から評価するということが可能となる。そこで「PDCA」サイクルに、学力調査の分析(R:Research)を加え、「R-PDCA」サイクルで研究を進めることにした。具体的には、子供たちがつまずく課題を調べ(R)、なぜできないのか、どうすればできるようになるのか仮説を基に授業を計画する(P)。そして、その計画に基づいて授業を行い(D)、つまずきを解消できたかを類似問題でチェック(C)、その結果を考察して改善を図る(A)サイクルとした。つまり、データを重視した研究である。(図2)

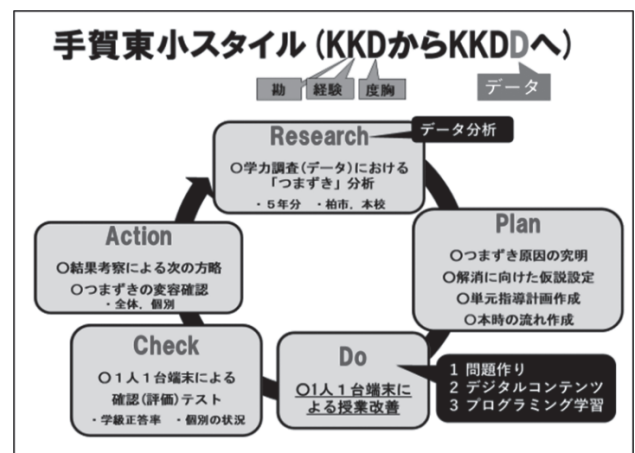


図2: R-PDCAサイクルによる授業改善

授業では、子ども主体の学びを実現させるために1人1台端末を活用する。つまずきの原因分析により、下記の学び方の中から最適な方法を選択して行った。

- 問題作りによる主体的・対話的な学び
- デジタルコンテンツによる試行錯誤の学び
- プログラミングで思考力を育む学び

具体的な事例として、第4学年「立方体の展開図」の実践を紹介する。学力調査による、『右の図の直方体の展開図を選びなさい』という問題の正答率は、5年間の

平均正答率が58.2%と低い傾向があった。この課題に対して、「立方体の展開図は全部で11通りがあるが、これまでの授業では、3、4通り考えるだけで終わってしまっていた。そこで、児童が試行錯誤しながら、より多くの展開図を考える体験が有効であろう。」という仮説を立てた。授業では、1人1台端末によるシミュレーションコンテンツを使い、できるだけ多くの展開図を考えさせるようにした。デジタルコンテンツは、画面上でかいたり、切ったり、動かしたり等の試行錯誤が容易なので、紙上では思いつかないような展開図を数多く発見することができた。その結果、翌年(2019年度)の学力調査は、正答率が75%となり、5年間の平均より16.8ポイントアップした。

図3は、2014年度に入学した学年の学力調査結果を柏市全体と比較したものである。1年生から6年生までの6年間、途中の転出入児童を除いた同一集団である。研究を開始した2018年4月の6年生進級時(5年生の内容)は、柏市平均正答率と26.6ポイントもの差があった。それまでは、授業中に子供がICTを使うことはほとんどなかったが、6年生からは1人1台端末環境を整備し、ほぼ毎日活用したところ、わずか1年間で、柏市平均とほぼ同等(2.9ポイント差)の結果まで引き上げることができた。このように1人1台端末を活用したことで、上記以外のすべての学年において学力調査結果が大きく向上した。

学力を向上させることは、学校の第一義であり、学習内容が確実に身に付いているエビデンスを示すことは、学校を選んでもらうために重要なことだと考える。

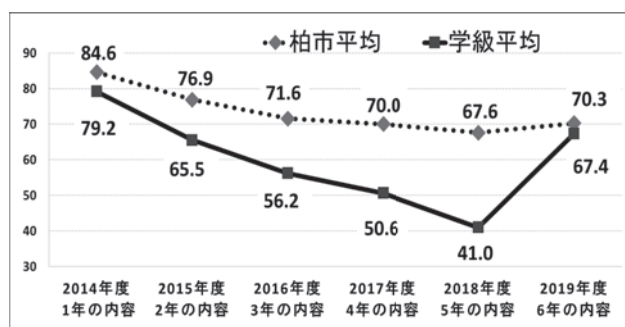


図3：柏市学力調査における本校同一集団の変化

(2) オンラインを取り入れた学校(2020年度～)

柏市では、新型コロナウイルス感染予防のため、2020年3月4日から6月14日まで、数日の登校日はあったものの長い臨時休校が余儀なくされた。臨時休校中のオンライン授業について、文部科学省からは、同時双方向のオンライン指導を実施した公立学校は、わずか5%にすぎないと報告されている(2020年4月16

日)。当時、オンライン授業は、環境整備と教師の運用の両面でハードルが高いものであった。

そのような状況下において、本校では、4月中旬には、入学式が実施できていない新入生を含め、全学年でオンライン授業を実施することができた。同時に、教職員が各家庭を訪問し、教材や図書、児童が行ったプリントなどをやり取りする「テガニ便」も開始した。

当時、マスコミでも、学びを保障し、指導と評価を一体化するためのオンライン授業の必要性が取り沙汰され、筆者(校長)がNHK等のテレビ番組に出演したり、新聞や雑誌にも本校の取り組みが10回以上掲載されたりした。このことは、学びを止めないためにできることを迅速に行い、各家庭にきめ細かい支援を行っている本校の取り組みを知ってもらうきっかけとなり、転入生を急増させることにつながった。転入数の変化は、後に述べる。この他にも、オンラインを取り入れた様々な取り組みを行ってきたが、「令和2年度 公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部 教育実践研究論文」に応募して発表しているので、ここでは割愛する。

(3) 創造性を育む学びの実現(2021年度～)

2019年12月、「子供たち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育 ICT 環境の実現に向けて～令和時代のスタンダードとしての1人1台端末環境～」というタイトルで、文部科学大臣メッセージが出された。GIGAスクール構想のスタートである。その後、コロナ禍で、全学年に前倒しされて実施されることとなった。

学校や教師による温度差は大きいものの、子供が自分の端末でネット検索したり、デジタル教科書やAIドリル等を利用したりする姿が増え、「個別最適化された教育」をめざす1人1台端末活用のイメージは、だいぶ共有されてきたように思う。しかし、もう一つのねらいである、「創造性を育む教育」については、筆者は、まだあまり進んでいないように感じている。創造性を育む教育が進んでいない理由の一つは、「1人1台端末で、創造的な学びをどのようにデザインしていったら良いか分からない」という教師が多いことではないだろうか。そこで、本校では、創造性を育む学びの実現を校内研究のテーマとし、全校体制で単元開発に取り組むことにした。2021年度より全学年で実践を進めているところであるが、ここでは一事例だけ紹介する。

5年生は、外国語の授業で、外国人や他校の友達をオンラインでつなぐ協働学習を行った。外国人(ALT)と英語で話す機会を増やしたいと考え、子供たちを3人ず

つのグループに分け、オンラインで交流を続けた。そして、市内の学校と、「サプライズでTシャツをプレゼントする」という共通のゴールを設定し、ALT から英会話で収集した情報をもとに、他校の友達と T シャツのデザインについての話し合いをオンラインで行った。お絵描きアプリで完成させたデザインを、ネットで発注し、届いたTシャツをALTの自宅に郵送した。オンライン交流の最後の時間に、Tシャツの包みを開けてもらい、ALT が大きなジェスチャーで喜んでくれた姿を見て、子供たちの達成感や満足感も高まった。



写真1:オンラインで外部講師や他校の友達と交流している様子

この事例のように、解のない、もしくは答えが一つではない課題に対して、対話的な学びを通して最適解を見つけていくといった学習は、これからの時代を生きていくために求められる教育である。また、これまでは難しかった活動が、1人1台端末やオンラインによって実現しやすくなったと考えている。

下記に、各学年の代表的な事例を紹介する。尚、本校の実践をまとめた書籍が出版社から発行された。(『創造性を育む「1人1台端末」活用授業』監修:佐和申明 発行所:株式会社小学館 2022年4月23日発行)

	タイトル名	課題の設定
1年	おしえてあげる！ キラキラ1年生	学校のことを動画にまとめて、 新一年生に教える
2年	ザリガニ釣り大作戦	釣れると予想したエサで実験し、 動画を編集して伝える
3年	いちご園のおいしさの秘密を伝えよう	いちごのおいしい理由を追求し、 チラシにして直売所で配る
4年	「ごんぎつね」の挿し絵を動かそう！	プログラミングで動く挿し絵を使って 全校読み聞かせを行う
5年	CMで伝えよう！ 手賀東小学区の魅力	学区の歴史やお店など魅力的な ところをYouTubeで広める
6年	自分たちで修学旅行のプランを立てよう	クラウドで情報を共有し、話し合っ てコースを決定する
特支	おすすめの動物を紹介しよう！	動物園に行く下学年に、おすすめ の動物や特徴を紹介する

(4)体験活動とICTの融合(2022年度～)

今年度は、11月5日(土)に創立150周年記念行事を計画している。儀式的なものではなく、野外に300インチの大型スクリーンを設置し、柏市長や地域の方々に向け、子供たちの学習成果を発表する機会としたい。

活動のテーマは『地域学習』である。「端末を小脇に抱え、地域を駆け回る子」をめざす児童像に、地域に向いて農業体験や文化遺産の調査を行う。体験活動の中で1人1台端末を使う場面は多岐にわたる。例えば、畑での農作物の成長記録、害獣についての調査、収穫体験のチラシや応募フォームの作成、発表時のプレゼンテーションなど、もはや端末は学びに欠かせないツールとなっている。

現在、体験とICTを融合させた活動を進めている途中であるので、本活動の特色と活動内容のみを下記に記述する。成果については、改めて報告したい。

- ① 活動単位が異学年集団であること
学年単位で活動するのではなく、1年生から6年生を縦割りにした3グループで活動を進めていく。
- ② 学校をとび出し地域で学ぶこと
月2回以上フィールドワークを行うなど、学校をとび出し地域全体を学びの空間とする。
- ③ 多様な人材から学ぶこと
縦割りグループのため、担当の教師は担任とは限らない。また、地域の農家の方や企業や団体の方など多様な人材が「先生」となる。
- ④ 学び方を変えること

1人1台端末を活用して情報活用能力の育成を図ることで、教師による一斉伝達型の授業から、子供主体の学びへ改革する。

手賀地区	・栽培する作物:とうもろこし(ドルチェ・ドリーム) ・アウトプット:もぎ取り体験の企画・運営 ・文化遺産調べ:手賀教会 他 ・協力者:大山農園(地域の農家) 他
片山地区	・栽培する作物:落花生(おおまさり) ・アウトプット:道の駅での販売 ・文化遺産調べ:古墳群 他 ・協力者:道の駅しょうなん 地域の農家 京葉ガス 他
布瀬地区	・栽培する作物:ジャンボカボチャ ・アウトプット:コンテストに出品、地域に飾る ・文化遺産調べ:百庚申 他 ・協力者:JA東葛・地域の農家 他

6 評価と考察

1人1台端末による最先端の教育を新たな特色として打ち出した翌年(2019年度)は、新入生が0名、転入生がわずか1名しかいなかった。

変化が行ったのは、2020年度からである。2020年度と2021年度に合わせて12名の児童が転入してきた。保護者への聞き取りでは、「コロナ禍におけるオンライン授業への取り組みが他校より迅速で、内容も充実しているから」という理由が多かった。学区外からの新入生については、2021年が6名、2022年度は15名となった。柏市小規模特認校制度で、1学年あたり17名以内(2021年度までは16名)と定めてあり、学区内からの児童と合わせると2年連続して上限に達した。(図4)

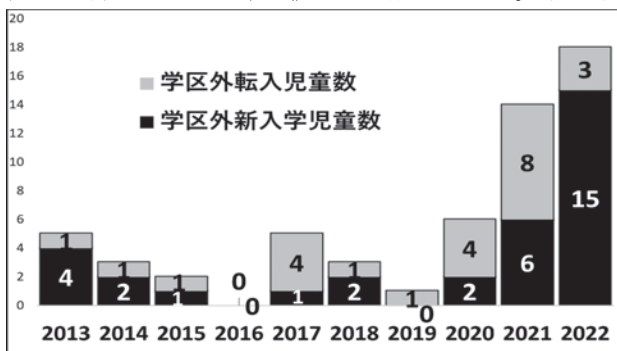


図4：小規模特認校制度による新入生と転入生の数(5月1日)

転入学児童数が増加したことにより、学校全体の在籍数も右肩上がりになってきた。2020年5月には41名まで落ち込んだ在籍数が、2021年度は57名、2022年度は70名まで増えてきている。(図5)

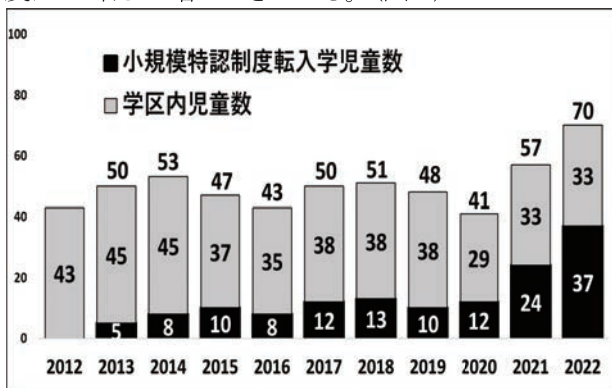


図5：在籍数と小規模特認校制度転入学児童数の変化(5月1日)

本校を選んだ理由については、「きめ細かい学習支援や生徒指導」「地域の特性を活かした自然体験活動」「1人1台端末による最先端の教育」「異学年による交流」のいずれも、85%以上であった。なかでも、新たな特色として力を注いできた「1人1台端末による最先端の教育」は95.2%となり、小人数指導や自然体験活動だけでは転入学を躊躇していた家庭に対して、本校を選択する決め手になったものと考えられる。(図6)

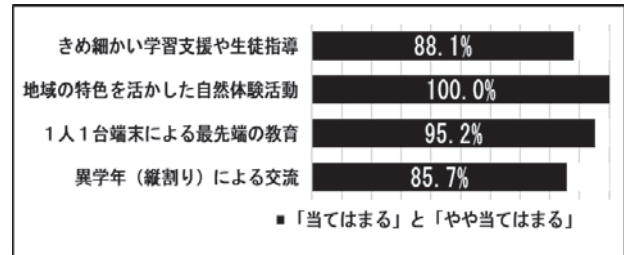


図6：転入学の理由(2022年6月実施 回答数31名)

研究の目的である、教育活動への満足度について、保護者と子供に調査したところ、すべての項目において、85%以上の高評価を得ることができた。転入学の期待に応える結果であったことに安堵した。(図7、図8)

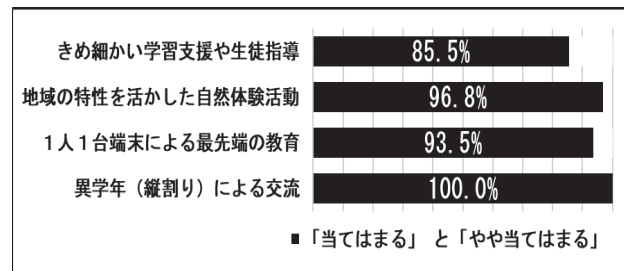


図7：保護者満足度(2022年6月実施 回答数31名)

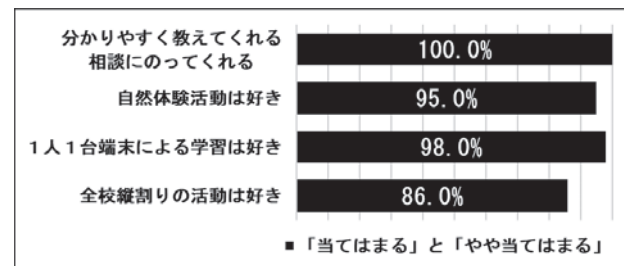


図8：児童満足度(2022年7月実施 回答数68名)

7 おわりに

特色ある教育活動を行っていても、市民に伝わらなければ、学校を選んでほられない。そこで、学校ホームページ等による広報活動に努めてきた。また、柏市教育委員会学校教育課には、ポスターやパンフレット作成、広報誌への掲載等で多大なご支援を賜った。ここに深謝の意を表したい。

研究の目的とした、子供と保護者に選ばれ・満足される学校創りは、データ上では成果を上げてきたといっていよう。しかし、この先の学校の姿は、依然として不確かである。柏市の推計では、来年度以降の3年間、学区内からの新入生は毎年2名しかいない。一方で、学区外からの新入生が、今年度と同様に集まる保障はない。また、学区外の児童の割合が5割を超えており、地域に根差した学校をどう創っていくのか、といった新たな課題も生じている。選ばれ・満足される学校にするために、今後も教職員がアイデアを出し合い、一丸となって取り組んでいかなければならないと考えている。

小規模特認校の挑戦は、まだ終わらない。

重度・重複障害のある生徒の知的国語科における授業づくりのポイント

～「大きなカブ」単元を通した小学部1～2段階の学びについて～

千葉県立四街道特別支援学校

教諭 山田 康 朝

1 はじめに

本校は、病弱者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校である。本校に在籍する約半数が重度・重複障害のある児童生徒であり、自立活動を主とした教育課程で学んでいる。自立活動を主とした教育課程では、学習上・生活上の困難を改善・克服するための自立活動の指導を基盤として、各教科等の指導を行っている。

重度・重複障害児の指導について、野崎・川住(2012)は、“重度・重複障害児を担当する教師は、「実態把握」「目標設定」「進め方」「学習評価」「実践評価」のいずれにおいても指導上の困難を抱えている”と述べている。このような状況では、教師一人一人、異なるであろう発達観や教育観、経験に依拠して指導目標・指導内容を設定することになり、系統的な指導が継続的に実践されることは少なくなり、活動あって学び無しの指導実践につながると推察される。

現行学習指導要領は、小・中学校、特別支援学校の学びの連続性が、育成を目指す資質・能力、指導目標、指導内容等により、系統的に示されている。具体的には、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の国語科(以下、知的国語科)においては、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で理解し表現する資質・能力」を、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」(三つの柱)に基づいて、指導目標、指導内容が整理されている。田丸(2022)は、“特別支援教育に携わる私たち教員が最も得意としてきた、純粋に子供一人一人の実態を出発点とする、個別性の高い指導の視点だけではなく、子供たちが各教科の見方・考え方を働かせ、それらを問題解決に向けて活用できるようにするといった、教科の系統性の視点をもって指導を組み立てる”必要があると述べている。こうした状況下において、今年度から、私が担任するクラス(自立活動を主とした教育課程)で、教科別指導の国語科の授業が開始された。試行錯誤する中で、教科別指導

の国語科の授業を、どのように計画・実践・評価・改善していけば、質の高い学びにつながるのだろうか。

そのためには、現在、学校教育に求められる方向性を踏まえた授業づくりの追究はもとより、自分自身のこれまでの実践を整理することを通して、授業づくりのあり方を再考する必要があると考えた。それは、先行研究から浮かぶ課題や直面する日々の悩みについて、解決の糸口となり、重度・重複障害のある生徒の教科別指導の授業づくりの質の向上に寄与すると考えたためである。

そこで、本研究は、教科別指導である知的国語科の授業づくりを取り上げ、重度・重複障害のある児童生徒の学びの質を高める授業づくりについて検討する。

2 目的

重度・重複障害のある生徒の教科別指導である知的国語科の授業づくりを整理する。整理した中で、生徒の学びの質を高めた授業づくりのポイントを考察する。

3 方法

計画段階、実践・評価・改善段階に分けて、授業づくりを整理するための方法を示す。

(1) 計画段階の方法

①教育の内容の整理

学習指導要領を参考にして、学校の教育目標から教育の内容に至る、生徒の学びを構成する各教科等の全体像を整理する。

②指導内容の精選

福島県特別支援教育センター(2020)が作成した「学びの履歴」シートを活用して、生徒の学習状況や習得状況を評価する。評価した内容から、教科間の関連性や指導内容の優先度を検討する。

③生徒の国語科の実態把握及び目標設定

自立活動の指導との関連を加味した国語科に関する生徒の実態把握から年間指導目標設定に至る過程を整理する。

(思考力・判断力・表現力等)

「A 聞くこと・話すこと」では、相手の声に含まれる抑揚や感情等から、大体の内容を把握していると思われる。例えば、穏やかな口調で名前を呼ばれた時は、「なにかな（疑問）」と視線を向けたり、褒められた時は、「うれしい、やったあ（充実感）」と身体を伸ばしたりする身振り等から伺えた。このことは、【知識及び技能】の実態とも関連し、生徒にとって馴染みのある言葉を中心に、相手の声に含まれる抑揚や感情等を感じ取り、表情や身振り等で表現をしていると推察した。一方で、比較的簡単な言葉を扱う絵本で、新たな言葉に触れても、授業の中での活用に留まっていることが多い。例えば、絵本「はらぺこあおむし」は、話を繰り返し聞けば、大まかに内容を捉えている姿（繰り返しのフレーズ時に、絵本や教師に視線を向ける姿）は確認できるが、日常生活に活かしているか曖昧である。

「B 書くこと」では、目的的な手の動きは確認することができず、教師が手を添えて動きを引き出すことが多い。そこで、形や色から十分楽しめるようにするため、美術科に関連付けて指導していくこととした。

「C 読むこと」では、同じ言葉を繰り返す絵本やシンプルなストーリーの絵本等を、繰り返し見聞きすることで、特定の言葉や話の内容に注目することがある。しかし、側弯症の影響を受けた体幹部の不安定さや見え方に関する学習上の困難さから、学習姿勢が整っていないと、絵本や言葉に注目することが難しい。そこで、絵本の読み聞かせの際は、三角マットで傾斜をつけた布団上に、右下側臥位の姿勢で行うこととした。これにより、頭部から体幹部の接地面が広がり、安定して左側に視線が移りやすくなり、絵本や言葉に注目できるようにした。

・生徒の国語科の年間指導目標の設定

生徒は、かかわりの少ない教師との間でも馴染みのある言葉を通して、相手の声に含まれる抑揚や感情等を感じ取り、言語感覚を養っていると推察した。一方で、相手の声に含まれる抑揚や感情等から、新たな言葉のイメージや話の内容を理解する学び方は、日常生活への定着に、不確実な要素があるだろう。その背景には、同じ言葉でも教師によって伝え方やニュアンス、その場の雰囲気が異なるため、生徒の受け取り方が変わり、多くの時間をかけて言葉のイメージを形成しているといった学びにくさがあることが考えられた。そこで、新たな言葉のイメージをふくらませることを中

心的な指導の方向性とした。そのためには、言葉を繰り返し使って、形式的に覚えるのではなく、他者と言葉のイメージを共有しながら、言葉のイメージをふくらませていくことが必要だと考えた。それには、国語科の見方・考え方を働かせていくことが必要であると考えた。国語科の見方・考え方は、特別支援学校学習指導要領解説各教科等編において、「対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。」としている。これを生徒の学びに捉え直すと、動きと言葉を結びつけたり、言葉のイメージを捉えたりする過程で、教師とその言葉のイメージを共有していく学び方になると考えた。このような実態を踏まえて、国語科の年間指導目標は、「教師とともに、動きと言葉を結びつけながら、言葉のイメージをふくらませることができる」とした。

④単元計画

・単元名

「大きなかぶ」

・単元目標

「うんとこしょ、どっこいしょ」の言葉のイメージをカブを引っ張る動きで表現することができる。

・単元における工夫

(学習活動の工夫)

「大きなかぶ」のイメージを構成する言葉である「うんとこしょ、どっこいしょ」と、カブを引っ張る動きを少しずつ一致するようにする。単元の始めは、「うんとこしょ、どっこいしょ」の言葉に慣れるように、音節ごとに生徒の身体をタッピングしたり、あえて、カブを引っ張る動きを行わずに取り組みだりする。その後、生徒自身がカブを引っ張る動きに少しずつ移行できるように、教師とともに引っ張る動きを取り込みながら言葉のイメージを形成していく。

(教材の工夫)

声に含まれる抑揚や感情等を毎回一定にすることで、話の流れや終わりが予測しやすくなるように、ipadに録音した音声で毎回取り組むこととした。

(教師のかかわり方)

毎回、指導略案を作成し、ねらいを達成するための手立てを計画してから取り組む。ただし、その都度、生徒の動きに注目したり、生徒が何を感じ取っているか読み取ったり働きかけたりする等、生徒の学習状況に応じてかかわり方を創造し工夫する。

(2) 実践・評価・改善段階の過程

実践の経過を3期に分けて、以下に示す。なお、表に記載された1-1等の番号は、「話題になったこと」の記述が分かりやすいように示す。

① I期：話の終わりを大まかに把握する時期

表1 2022年4月25日に実施した授業の抜粋(時数4/16)

生徒の動き	授業の流れ	教師の動き
1-1 教師の方向を見たり、視線を上に向けたりして目をあちこち動かしている。	大きなカブの話がiPadから流れる。	
	大きなカブの話の終盤の「うんとこしょどっこいしょ、やっど、カブは抜けました」が流れる。	
1-2 教師の方向に視線を移動する。その際、上脛がわずかに閉じかけ、注目する。		直後に、ペープサートのカブを目の前に提示し、声を出さずに見守る。
	1秒間、教室全体が無音に包まれる。	
1-3 肘をあげ、手で、口元から耳元に向けてこすりつけ、身体の後ろまで左腕を引く動きができる。		
		「やっど抜けました、○○君、やっどあ」と称賛をする。
1-4 両方の眉を一瞬挙上させた後、視線を教師の方向から上方向に移動させる。		

・振り返りのテーマ

話が終わった直後は称賛せず、少し「間」をおいてから表出された生徒の学びについて

・話題になったこと

1-1の目の動きは、普段の集中している姿と比べると、注意を向ける先が定まらず、周囲を探索しているように見えた。一方、1-2の目の動きは、わずかに上脛に力が入り、閉じかけつつ教師の方向を見る姿から、話が終わった直後の教師の称賛を待ち構えているように見えた。その後、教室全体が無音になる「間」を経て、1-3の腕の動きがタイミングよく表出された。1-3の腕の動きに付随して、1-4では、教師を見つめ続け、称賛直後に両方の眉をあげておでこに皺をつくる姿から、大きなカブの話の終わりを感じ取ったのではないかと考えた(写真1)。なぜなら、大きなカブの話の終わった直後、教室全体が無音の「間」になり、大きなカブの話が終わったことを感じ取ったこと。その感じ取ったことを腕の動きで表している最中に、教師の称賛があり、応じるように眉をあげたこと。これらの教師の環境設定及び働きかけと生徒の一連の動きが、タイミングよく一致しており、妥当性があると判断したためである。



写真1 生徒の動き (1-4)

・次回に向けた改善点

教室全体が無音になる「間」によって、話の終わりを感じ取ったことは妥当だと捉えた。次なる学びとして、腕の動きと、「うんとこしょ、どっこいしょ」や「抜

けました」という繰り返しの言葉から大まかに話のイメージをすることだと考えた。そこで次回は、「うんとこしょ、どっこいしょ」や「抜けました」が流れた時に、カブの葉っぱに見立てた紐を手で引っ張るようにしていくこととした。

② II期：大まかに話のイメージを意識する時期

表2 2022年5月19日に実施した授業の抜粋(時数10/16)

生徒の動き	授業の流れ	教師の動き
カブの葉っぱに見立てた紐の持ち手を持つ。	大きなカブの話がiPadから流れる。	
2-1 「うんとこしょどっこいしょ」の言葉に合わせて、教師に左腕を引かれる。目は薄く開いている。		生徒の手首と肘を触れて「うんとこしょどっこいしょ」の言葉に合わせて、教師に左腕を引くように動かす。
	大きなカブの話の終盤の「うんとこしょどっこいしょ、やっど、カブは抜けました」が流れる。	
		持ち手に抵抗が加わるように、腕を引き、カブをお腹のあたりに出す。
2-2 左腕を元に戻すように腕を動かす。その際、ゆっくり口を動かし嚙下運動をする。また、持ち手を持つ指を屈曲させて握り込む。目は薄く開いている。		

・振り返りのテーマ

持ち手を引く動きと話の全体的なイメージの捉えについて

・話題になったこと

2-1は、他動的に教師に腕を引かれており、受け身的に教師の動きを受け入れているように見えた。2-2の直前の教師の動きで、持ち手に抵抗が加わりながら生徒の手が動いた。これが、2-2の自発的な腕の動きで持ち手を引くことにつながったと考えられた。これは、手に加わった力に反応した反射とも捉えられるが、腕を引く動きと、「うんとこしょ、どっこいしょ」という言葉や話の全体的なイメージが、関連付けられつつあるのではないかと考えた。その理由は、本生徒の場合、伸張反射であれば他部位も連動して突発的な力が入りやすいが、そのような力が現れなかったこと。持ち手を引く動きに、ゆっくりした口や指の動きが現れたことが、自発的な手の動きの妥当性を高めた。

・次回に向けた改善点

次回は、「うんとこしょ、どっこいしょ」の言葉に焦点をあてて、自分で持ち手を引く動きが出やすいように、カブの葉っぱに見立てた紐を2股にして、生徒と教師が同時に引っ張れるように支援をすることとした。

③ III期：動きと言葉のつながりに注意を向けた時期

・振り返りのテーマ

生徒は、「うんとこしょ、どっこいしょ」の言葉のイメージをどう捉えたかについて

・話題になったこと

3-1の目の動きは、これまでの経過から、生徒が大きなカブの話として理解して聞いているように見えた。

表3 2022年5月26日に実施した授業の抜粋(時数12/16)

生徒の動き	授業の流れ	教師の動き
カブの葉っぱに見立てた紐の持ち手を持つ。	大きなカブの話がiPadから流れる。	カブの葉っぱに見立てた紐を持つ。
3-1 時折、教師の方向に視線を送る		
		生徒の視線が教師に向けられたときに、顔くように身体を動かす。
	大きなカブの話の中盤の「うんとこしょどっこいしょ、まだまだカブは抜けません」が流れる。	
		「うんとこしょどっこいしょ」の言葉に合わせて、生徒の手に抵抗感が伝わるようにカブを引く。
3-2 自ら左手指の握り込み動きや左手首を曲げた動きが出てくる。反対側の手にも力が入る。		
	大きなカブの話の終盤の「うんとこしょどっこいしょ、やっと、カブは抜きました」が流れる。	
		直後に、カブを少しずつ土に見立てた部分から、がさがさとした音を出しながら引き出す。
	カブが生徒の前に出てくる。1～2秒間、教室全体が無音に包まれる。	
3-3 視線を右側に移動させ、視線を止める。1秒程度すると、視線を正面に戻す。再度、視線を右側に移動させ、左手で持ち手を引っ張る。		
3-4 教師の発言にビックリと身体を動かし驚いた様子。		「カブが抜けたね。〇君、今驚いたね、今ね。よく見えました。大きなカブです。」
3-5 教師の話が終わると、眉毛を上に動かして、教師に視線を向ける。		

3-2では、「うんとこしょ、どっこいしょ」の言葉や直前の教師の動きから、自らカブを引こうとする姿を見せた。このことから、話の内容を大まかに理解しており、「うんとこしょ、どっこいしょ」の言葉が聞こえてきたら、カブを引くというイメージができたのではないかと考えた。また、教師の称賛を受けた3-4の姿は、それまでの状況に思いを馳せていたこと。3-5の姿は、「先生、一緒にできたね(取れたね)」と、教師と意思を共有しようとしたことが考えられた。なぜなら、3-4の教師の発言に対する身体反応は、3-3の直後であり、動きや言葉の余韻に浸っていた(内省していた)と考えるのが妥当であると判断したためである。また、その内省した思いのまま視線を教師に向けたとすれば、その思いを「先生、ね。(できたね。)」とつながりたい、という意味があったとすることが妥当であると判断したためである(写真2)。このことから、動きと言葉のつながりに注意を向けるとともに、その時感じた思いを共有しようとする、意思と行動が現れたと言えるだろう。



写真2 生徒の動き(3-5)

5 考察

(1) 計画段階における授業づくりのポイント

①前提としての学習指導要領の視点

生徒にとって最適な学びを提供するためには、学校教育目標から日々の授業のねらいに至る過程を前提とした授業づくりが欠かせない。それは、学習指導要領

に示してある内容は児童生徒に対して確実に指導しなければならぬものとされているからである。なおかつ、教師の得意な指導分野や意識している問題に偏った判断を避けるためでもある。

②国語科としての視点

生徒の障害の状態だけではなく、国語科の学びを踏まえた実態把握から背景要因や指導の方向性を導き出した。それを基盤にして、個に応じた指導内容を精選した。特に、言葉のイメージをふくらませる手段として、動きと言葉のつながりを教師と共有した視点(国語科の見方・考え方を参考にした視点)は、国語科の目標設定に至る根拠を示すことができた。

(2) 実践・評価・改善段階における授業づくりのポイント

①生徒の主体的な学びの読み取りと教師の働きかけ

生徒の主体的な学びは、表情や身振り等の細かい動きを、単元期間中の変容や授業で見せる細かい動きの関連性から読み取った。その読み取りは、何度も繰り返し反証することで、妥当性を高めた。

この読み取り方から、生徒が学びを深めるための働きかけのポイントは2つあった。1つめに、教師が生徒の学びを読み取り、読み取った気持ちや行動をフィードバック(頷きや称賛や見守り等)する。そうすることで、教師が生徒の学んだことを映し出す鏡となり、その教師を見た生徒が自分自身の学びを深める経験となった。2つめに、教師が生徒に学ぶべきポイントをわざわざ先行して伝え、(例えば、教師が持ち手を初動のみ動かし緩やかに生徒の主体的な動きに替える等)生徒が自発的にやってみようという意欲を実感できるようにする。そうすることで、動き(行動)と言葉を一致させるだけではなく、感じたことを人と伝え合う良さ(気持ち)を伴う体験として促すことができた。

6 引用文献

- 福島県特別支援教育センター(2020)「学びの履歴」シート. <https://special-center.fcs.ed.jp/> (2022年7月16日閲覧).
- 野崎義和・川住隆一(2012)「超重症児」該当児童生徒の指導において特別支援学校教師が抱える困難さとその背景. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 60(2).
- 田丸秋穂(2022)国語科における肢体不自由児の指導, 肢体不自由教育. 肢体不自由教育研究会, 第253号.

生徒の思いを生きた言葉に変える言語活動の工夫

～学校PR文を書く活動を通して～

市原市立双葉中学校

教諭 赤 窄 悠

1 主題設定の理由

令和3年度全国学力・学習状況調査の結果から、本校の生徒は「自分の考えが伝わるように根拠を明確にして書いたり表現を工夫して書いたりする」ことに課題があることがわかった。また、2018年3月2日、文化庁の文化審議会国語分科会が発表した「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」では、以下のような指摘がある。

「現在、私たちは様々な媒体の発達によって、大量の情報を瞬時に受け取ることができるようになった。その一方で、出会った言葉や言い回し、わからない漢字などを辞書等できちんと調べることが減り、言葉のやりとりも、多くはSNSなどを介した短いものに偏る傾向が強い。そのため、系統的に言葉を身につけ語彙を形成し、それらを十分に活用する機会が少なくなっている。」

近年、SNSの普及により情報を発信する機会は増加しているが、その反面、発信される情報の多くが省略、簡略化されていることが多い。「打ち言葉」といわれる短い文でのコミュニケーションは私的なやりとりでは成立するが、伝えたいことが伝わりきらないこともある。また、公的な場の文章としては文体、内容ともにふさわしくない。そこで、「実用文」を書く活動を通し、日常生活で「打ち言葉」に慣れてしまっている生徒たちに、明確な目的を持った思いのこもった文章を書く力を養いたいと考えた。

本校生徒への事前のアンケートによると、スマートフォンを持つ生徒全員が利用している「LINE」で「一度に送信するメッセージ量」は20文字以下が約9割であることがわかった。しかも、その内の半数は10文字以下と回答した。

この結果から、生徒たちは日常的に行われるメッセージのやりとりの中で、文章や会話の内容を熟考して、相手に理解してもらおうとしている生徒が少ないこと

が考えられる。全国的にSNS利用の増加とともに、インターネットトラブルの件数も急増しており、本校も例に漏れずインターネットトラブル関連の生徒指導が後を絶たない。こうした背景には、昨今の短文化・省略化されたメッセージのやりとりによる文章構成力の低下や他者意識の欠如があると考えられる。また、今後、生徒たちの使用語彙の減少や、それに伴う表現力の低下も懸念される。そこで、本実践では、実用文を書く活動を通し、打ち言葉に慣れてしまっている生徒たちに、明確な目的を持って事実関係を整理し、説得力のある文章を書く場面を設定することとした。

本実践を成立させる動機付けとして、新入生説明会で新入生や、その保護者に読んでもらうための「双葉中の魅力を伝える学校PR文」を作成した。中学校生活を3年間経験した自分たちだからこそのわかる学校の情報を、自身の実体験を根拠にして表現させる中で、読み手である新入生に伝わる文章にするためにはどのようにすべきかなど、読み手の立場を意識して文章を整える力の高まりが期待できるだろう。

また、文章を作成する段階では、他者の意見を取り入れながら、自分の文章を磨き上げていく学習活動を行う。他者の意見を聞き、どのように改善すると良いかなど、その後の自分の書く活動へ生かすための具体的な視点を得ることが重要であると考え。読み手の気持ちを知るためには他者の視点が必要であり、課題に合わせた様々な学習形態で他者の文章を読み合ったり、話し合ったりすることは、新たな視点や表現の仕方に気づき、自分の考えを深めることにつながると考え、本主題を設定した。

本実践における伝わる文章とは

→ 双葉中学校の良いところや書き手である三年生の母校への思いが伝わって、新入生が「安心して入学できそう」と思える文章。

2 研究目標

自分の体験したことを他者に伝える実用文を書く活動を行うことで、生徒一人ひとりが主体的に活動し、読み手意識を高め、また、テーマや話題に合わせて学習形態を工夫し、多くの視点で推敲をしていくことで、読み手の立場に立った文章を書くことができるということを、生徒の活動や変容を基に明らかにすること。

3 研究仮説

- (1) 自分の体験したことを他者に伝える実用文を書く活動を行うことで、自分の考えや思いを筋道立てて適切な言葉で表現でき、思いのこもった文章を書く力がつくだろう。
- (2) テーマや話題に合わせて学習形態を工夫し、多くの視点で推敲をしていくことで、読み手の立場を意識した論理的な文章を書くことができるだろう。

4 研究内容

- (1) 生徒の体験を基にした実用的な文章を課題として設定する。

新たに中学校生活をスタートする後輩たちにバトンを渡す役割を担う中学3年生にとって、自分たちが書いた学校紹介文を、これから入学してくる新入生とその保護者に、新入生説明会という場で読んでもらうことは大変意義のあることである。また、このような経験が中学校生活も終盤を迎える生徒らにとって、母校での3年間を振り返り、思い出を整理することのできる機会となる。加えて、高校入試の面接や小論文で話したり、書いたりする材料となりうることで、今回の活動に対する動機付けがなされ、生徒たちの書く意欲は高まると考え、本課題を設定した。

- (2) 読み手意識を高めるために互いに文章を推敲し合う場を設定する。

学習活動を「個人→グループ→全員」という流れで進めた。6つのテーマを選定し、生徒を6班に分けグループ活動を行うが、各班のPR文完成後、それぞれの班の文章を他班も一緒に推敲する活動を行ったため、全ての紹介文を全員で推敲した。このように、グループの垣根を越えた交流の中で、より多くの目で推敲を重ねていくことで、新たな価値観や文章表現などとの出会い、自らの文章に生かせるようになると期待した。

また、多様な読み手の視点に気づき、改善すべき点が明確になっていくことで、読み手に伝わりやすい文章を作り上げていくことができるだろうと考えた。

- (3) 情報収集能力や処理能力を向上させるためにICTを活用する場を設定する。

本単元ではMicrosoft Wordを使用する。生徒たちが生きる未来において、デジタルデバイスは欠かせないものとなる。そのため、彼らが大人として社会に出たときに、スムーズに順応できるような素地を中学生のうちから身につけさせたいと考えた。そこで、本単元ではタブレットを活用した作品や意見の共有や、Wordを用いた文章作成を通し、生徒たちのICTスキルの向上を目指した。特に現代では長文を手書きで書く機会は減少しており、タイピングでの文章作成の重要性は高まっている。このように、ICTスキルは今後生徒たちが高校生、社会人となってからも必要性の高いものであるから、将来の生活に生きる能力を習得しているという目的意識をもたせとりくませたいと考えた。

5 生徒の実際の様子

第1時 PR文テーマ設定

学校PR文を作成するためのテーマを1人6つ考えて書き、挙がったテーマの中から書きたいものを1つずつ班で話し合っただけで決めた。

【採用テーマ】

- ・学習 ・部活動 ・委員会 ・学校行事
- ・小学校との違い ・先生と生徒

【不採用テーマ】

- ・通学 ・感染症対策 ・体育祭 ・給食
- ・教科の違い ・授業 ・校舎 ・あいさつ

生徒の振り返りでは「双葉中に入学してからの心情の変化について初めて考えた」というコメントもあり、テーマを考える過程で、自分たちの中学校入学時の気持ちに気づくことができ、書く動機付けがなされた。また、事前アンケートで文章を書くことが「好きではない」と答えた生徒2名が、ほぼ最後の行まで書ききることができたことから、生徒たちが「書こう」「書きたい」と思える内容だったことが考えられる。

第2時 PR文のキャッチコピー決め／より良い

PR文を作るための工夫（KJ法）

KJ法を用い、ホワイトボードに意見を書いた付箋を貼り付けながらディスカッションし、PR文のキャッチコピーを考えた。KJ法を用いたことで、キャッチコピーの案が多く挙がったり、発言しやすくなったりした。また、よりよいPR文にするためのポイントなどについてタブレットを用いてインターネットで調べ、それをもとに、自分が書く際に工夫したいポイントを絞った。インターネットで調べることで「具体的な数値を出す」や「エピソードを交える」などの具体的な工夫の仕方が見付き、生徒たちが主体的に新たな方策を得ることができた。



【KJ法で意見を出し合っている生徒の様子】

第3時 アンケートの作成

アンケート項目を班で3つ程度決めさせ、全ての班のアンケートを集約した後に、教員がGoogleformで項目を作成し、全校生徒に回答を依頼、回収した。その後、アンケートの結果やグラフのデータを生徒たちのタブレットに保存し、PR文作成に使用させた。

生徒たちは、どのようなアンケートなら回答者が回答しやすいか、また、どうすれば自分たちの書きたい文章に必要なデータが得られるか考え、話し合いながら内容を検討した。行事のアンケートを取ったある班は、経験していない行事がある1年生向けに、注意書きを加えるなど、アンケートの回答者にも配慮しており、他者意識の高まりを感じた。

第4・5時 PR文作成

PR文作成にあたって、各班で役割を分担して活動を行った（Word打ち込み、アンケート結果の仕分け、必要なデータの抽出および取捨選択等）。多くの班で「テキストボックス」を活用し、情報を整理するなどしていたが、一部の生徒は自ら考え、「図形」の挿入

や「ワードアート」等の機能を活用していた。

Wordの操作には不慣れな生徒も一定数いたため、教員が適宜、操作の支援を行った。



【アンケート結果を共有している様子】

第6・7時 推敲

新入生に双葉中の良さが伝わるような文章に上げるために、新入生の立場で原稿を読み、改善点を見出す活動を行った。簡単な修正は原稿に赤ペンで書き込み、また、それ以外の良い部分や改善点を見つけて、感想カードに記入した。

友達の見や感想をもとに、班の原稿を再度推敲したが、推敲の作業の中で構成、調査結果集約、修正、パソコン入力等の役割を生徒たちで考え、分担していた。PR文作成時と同様、自分たちで必要性を感じて役割を分担し、それが機能していた。

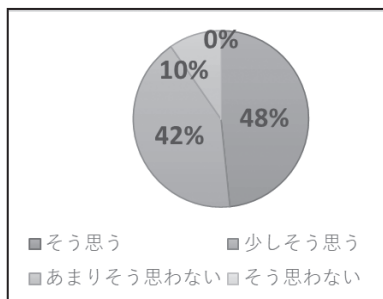
友達からの意見に「うれしい」などの反応が見られ、活動を通して友達とつながりを持てたことに喜びを感じている生徒もいた。また、改善点の指摘についてもほとんどの生徒が真摯に受け止め、真剣に推敲していた。複数人から同じ指摘があった部分などは、自信をもって修正作業を行っていた。また、他者からの指摘で初めて気づいたこともあり、元の文章を見直して、さらなる改善点を見つけるなど、自分たちの文章を見直すきっかけとなっていた。

【感想カード】

6 考察

(1) 活動終了後アンケート

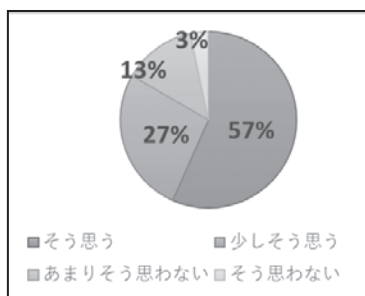
- ①グループ活動をすることで新たな気づきがあったり、考えが深まったりしましたか。



【①のアンケートに関する自由記述】

- ・自分では考えもしないアイデアが班員から出てきて面白かった。
- ・自分たちがすごく良いと思った文でも、必ず改善点や欠点はあるということに気づくことができた。
- ・皆で協力して考えるとより良いものができあがったこと、そして出来上がった時間も早かったことで、みんなで1つのものを作り上げることの良さに気づいた。
- ・自分の考えていたことと意見が違ったりしていろいろな角度からその物事をとらえることができた。
- ・自分では気づけなかったことも班の人が気づいたりすることもあるので、いろいろな人の視点から見ることは大切だと思った。

- ②今回の活動で、「読み手を意識して書くこと」ができましたか。

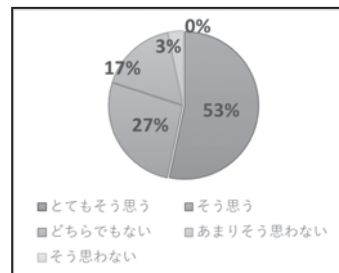


【②のアンケートに関する自由記述】

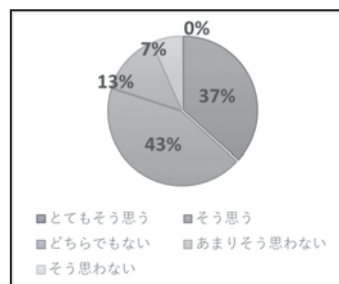
- ・読み手に語り掛けるように書くことや、図などをどう見やすく、読み手の目につきやすくできるか考えました。また、書いた文章が読んでわかりやすいか、読み手の気分になって一度読んでみました。
- ・口調を統一したりして、自分だけでなく誰でも理解できる文を書くことを意識した。他にも、間違えているところや訂正部分がないか見直し、班の人に見てもらって文がおかしくないか聞いたりした。

(2) 新入生へのアンケート

- ①伝えたいことの意図がわかる文章となっていましたか。



- ②学校PR文で双葉中学校の様子や雰囲気を感じることができましたか。



【①②のアンケートに関する自由記述】

- ・どんな先生や先輩がいるのか少し不安だったのでこのPR文を見て少し不安がなくなりました。
- ・すごく分かりやすく説明してくださっていて双葉中学校のことが、よく分かりました。学校PR文を読んでもみると、中学校への不安が少しなくなりました。
- ・1枚1枚がすごく読みやすいし、図などが途中に入っていてよかったと思う。ただ、もっと双葉中を知りたいと思った。

(3) アンケート結果から

学校PR文を作る活動をグループで行ったことにより生徒たちは自分にはない考えを発見し、吸収することができた。それらを文章に落とし込むことで、学校PR文の完成度も上がり、学びが深まったと言える。

また、自らが体験してきた学校生活をたどることで、読み手を意識して書くことができた。新入生へのアンケートからも、「不安が少なくなった」というコメントがあり、生徒たちの「安心して双葉中学校に入学してほしい」という思いが読み手にしっかりと伝わり、新入生が抱える不安を解消する一助となったことがうかがえる。

アンケートの結果を生徒たちに報告した際、新入生のコメントを受け、学校紹介文を作成した3年生は、「やってよかった」と、今回の活動に対してやりがいや達成感を覚えている様子があった。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- 学校説明会で新入生に読んでもらうという目標があったことにより、生徒たちは後輩に伝えたいことを話し合いの中で吟味し、工夫しながら、主体的にPR文作成に取り組むことができた。
- ICTの活用により、書くことに抵抗感のある生徒も意欲的に文章作成に取り組んだ。また、アンケートの集約や、推敲後の書き直し作業の時間を大幅に短縮することができた。
- 他者からの意見を聞き、推敲を重ねることで客観的な視点を得られ、どのようにすれば読み手に意図が伝わるかなど、読み手の立場を意識して書くことができるようになった。【6(3)アンケート結果より】
- わかりやすい文章を書くためには、読み手意識が必要だということに生徒が気づくことができた。

【以下 生徒作品①より】

学校PR文を作る活動を通して、誰が見ても分かりやすいように書くためにどうすればいいかを工夫する過程で、どうやって文を構成するかを自分の心が分かった。また、分かりやすく書くためには、主観的な判断だけでなく客観的な判断も大切だと感じた。さらに、賛否両論があるのに対して、どのように向き合っていくべきかをしっかりと考えることができた。

作成した学校PR文を新入生に、双葉中の部活の良いところや、文章を通して、双葉中の楽しさなどを感じてもらい、ほか中学校に比べてほしいところや、双葉中に対して、悪い印象をもたない人母とも、少しはあらず、いいと思うところ、そういう人たちに、双葉中の良いところ、このPR文の通に伝わってほしい。その他にも、文章中の語り手の口調など、PR文中の工夫の点や、グラフについて読み取ったことなどを、書かれた文中に、自分の気持ちや読み手の人に伝わってほしいと思う。

【生徒作品①】

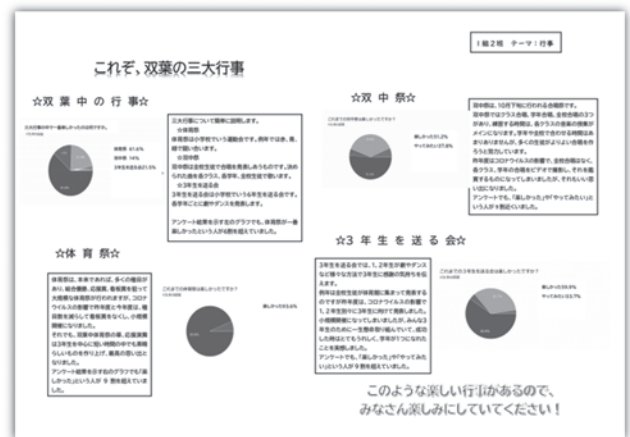
- グループで作成したことによって「思いはあるがうまく書けない」生徒の思いも汲んだPR文を作成することができた。 【以下 生徒作品②より】

私は言葉が出てきても文章にすると変になってしまうところは何度かありました。それを直してくれたのは班長の。私の言った言葉も入れつつ文を作ってくれたのです。うれしかったです。この活動を通して、仲間の言葉を理解してそこから文を作っていくのがベストなんだと思いました。

【生徒作品②】

(2) 課題

- パソコン操作の支援に時間を取られ、取り組みが意欲的ではない生徒に対する支援が足りなかった。パソコンの操作手順のマニュアル等を用意し、生徒が利用できるようにしておけば、授業内でより多くの支援が可能になったのではないかと考える。
- ワープロソフトや学習用タブレットを使った学習活動の中で、タイピング等の習熟度によって作業時間に差が生じてしまった。活動をより発展的なものにしていくためには、国語以外の時間でもICTを積極的に活用し、生徒たちに触れさせる機会を増やすことが課題であると感じた。
- 図表を入れたPR文で交流を行ったために、文章だけでなくレイアウト等に注目してしまい、推敲の観点が決まらない部分があった。段階的に推敲の視点に広がりをもたせるなどの工夫をすれば、より交流に深まりが見られたと思う。【以下生徒作品③より】



【生徒作品③】

10 参考・引用文献

- 1) 卯月啓子・首藤久義 (1999) 「ことばがひろがる1 楽しい国語生活に生きる国語」 東洋館出版社
- 2) 「実践国語研究 2020年12・1月号」 (2019) —No. 358 どの子も書けるようになる! 「書くこと」の指導ネタ&アイデア— 明治図書
- 3) 文化審議会国語分科会 (2018) 「分かり合うための言語コミュニケーション (報告)」 文化庁 https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1401904.html

優 良 賞

学校の課題を児童の心に残る体験活動に変えるチーム学校の取組

～大規模改造工事による壁の塗り替えを活用した「学校を美術館に」の実践を通して～

千葉市立幕張南小学校

校長 久保田 美和

1 問題の所在

(1) 学校の課題を児童の心に残る体験活動に変える

急激な社会変化に対応し、自分で判断し意思決定でき、他者とともに協働し、新たな価値や知識を生み出すような資質・能力を有する子供たちを育てていくことが求められている。学校においてもコロナ禍の対応、ICTの活用等、教員が様々な課題に対応し、判断し、協働して新たな授業スタイルをつくるが必要となってきている。どの学校にも課題はある。課題を嘆くのではなく、心に残る体験活動に変えることができるように教員が協働し、実践できれば、これからを生きる子供たちに、新たな価値を生み出す喜びを提示することにつながると考える。

(2) 本校の課題「3年間にわたる大規模改造工事」

令和3年度より幕張南小学校は、3年間にわたり、大規模改造工事を行っている（令和3年度、4年度は校舎、令和5年度は体育館）。工事内容は、LEDライトへの変換、壁の塗り替え、床の張替、トイレ改修、給食室改修等、多岐にわたる。この工事は、児童の生活と共に進み、児童にとって、特別教室が使えない、校庭の一部が使用できない、騒音、トイレや水道の使用が一部できない、プレハブ校舎への引っ越し、給食室の工事に伴った8か月間給食停止等、不便な面が多い。この大規模改造工事の期間に在籍する児童、職員が感じるであろう「運が悪かった」「学校がきれいになるまでの我慢」という思いを、「大規模改造工事があるからこそ特別な体験ができた」という思いに少しでも変換したいと考えた。

(3) チーム学校の取組

学校において教員以外に、養護教諭、事務主事、栄養士、技能員、スクールカウンセラー、図書館指導員、スクールサポートスタッフ等、多様な専門性や背景を持った職員がチーム学校を構成している。

大規模改造工事において、工事に伴う様々な課題は、教員以外の職員のアイデアや専門性によって解決されることも多い。体験活動を構想する場合においても、予算、資料活用、準備や後片付け等、教員だけの考え

では先に進まないことがほとんどである。チーム学校として多種多様な専門性のある職員の力を引き出すことが、体験活動をより良いものとし、チーム学校の力となると考える。

(4) 保護者、地域に学校を公開する場をつくる

各行事で、子供たちを見つめる地域の眼差しは優しい。しかし、コロナ禍において、保護者、地域が来校する機会は制限された。密でない空間を設定し、学校の状況を見る機会をつくることで、保護者、地域に学校の取組を知ってもらう機会を作りたい。

2 研究の目標

- (1) 学校の課題を基に、児童の心に残る体験活動の構想を立て、実践する。
- (2) 全職員が、チーム学校として体験活動に関わる。
- (3) 体験活動を全校児童、保護者、地域等に公開する。

3 研究の内容

(1) 「学校を美術館に」プロジェクトの構想

大規模改造工事で壁を塗り替えると聞き、まず考えたのは、「この広い壁に思いっきり絵が描ける。」ということだった。日常生活の中で、身体全体を使って絵を描く、壁に絵を描く機会は少ない。その為、心に深く残る体験活動になるのではないかと考えた。

体験活動を行う際に必要なのは、職員自身の経験である。身体全体を使って壁に絵を描く経験をしたことがある職員は、校長以外にいない。そこで、まず、職員自身が壁に絵を描くという研修を行い、その作品を鑑賞後、児童が作品を描くという2段階の活動、鑑賞の場づくりを行うことにした。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> ① 職員が、階段の壁に絵を描く研修（放課後） ② 全校児童が、職員の描いた階段の壁の絵を鑑賞 ③ 6年生児童が、廊下の壁に絵を描く体験活動 ④ 全校児童が、6年生が描いた廊下の壁の絵を鑑賞 ⑤ 保護者・地域へ公開 |
|--|

表1 「学校を美術館に」プロジェクト

この体験活動を「学校を美術館に」プロジェクト(表1)とし、登校した児童が、職員の描いた階段の壁の絵を見る日、6年生が廊下の壁に絵を描く日、全校児童が6年生の描いた廊下の絵を鑑賞する日、保護者や地域の方に公開する日を設けようと考えた。

(2) プロジェクト実現に向けてのチーム学校の取組

①全職員が参加できる取組内容の作成

構想を立て実践することは一人ではできない。体験活動の実践に向け、職員の専門性を活かし協力することが必要である。全職員が参加できる取組にする為に、週報会議、職員会議等で提案し、目的、内容を理解してもらい役割分担を明確にした(表2)。

	担当	取組内容
1	校長	構想を立て、週報会議、職員会議にて提案
2	学校施設課・工事担当者・校長・教頭	工事定例会にて、構想を提案場所、着彩方法の確認
3	事務主事・6年主任	予算確認、絵の具の必要数確認、発注
4	教務主任	日程調整
5	全職員	職員が壁に絵を描く研修
6	6年教員・図書館指導員	体験活動の構想、準備、資料の提案、資料貸し出し、実践
7	6年教員・図工主任	用具確認、準備
8	技能員・スクールサポートスタッフ	制作前の準備、後片付けの指示
9	教頭	保護者、地域への連絡
10	6年教員・カメラマン	卒業アルバム掲載の連絡、調整
11	学級担任	作品鑑賞

表2 プロジェクト達成に向けてのチーム学校の取組

今回のように年度当初の計画になかった活動は、予算の捻出が必要となってくる。予算に関しては、事務主事がカタログや使用数の見積もりを基に、予算を計算し、実践が可能になるよう道筋を立てた。

体験活動の構想に関しては、6年教員が、児童の実態に応じた内容、提示方法を考えた。最終的に卒業アルバムに掲載したいという案まで浮かんだ。

②全職員が階段の壁に絵を描く職員研修(放課後)

ア 研修の対象(勤務体制上、参加可能職員)

教員、養護教諭、事務主事、栄養士、技能員、図書館指導員の19名で実施。

イ 研修場所

児童が使用する1階から4階までの階段

ウ 研修内容

職員の研修も児童が体験活動で行う内容と同様のものとした。1階から4階までの階段を「海・陸・空」と分け、希望の場所で、ローラーで下地を塗り、その後、絵を描いた。

エ アンケート結果から

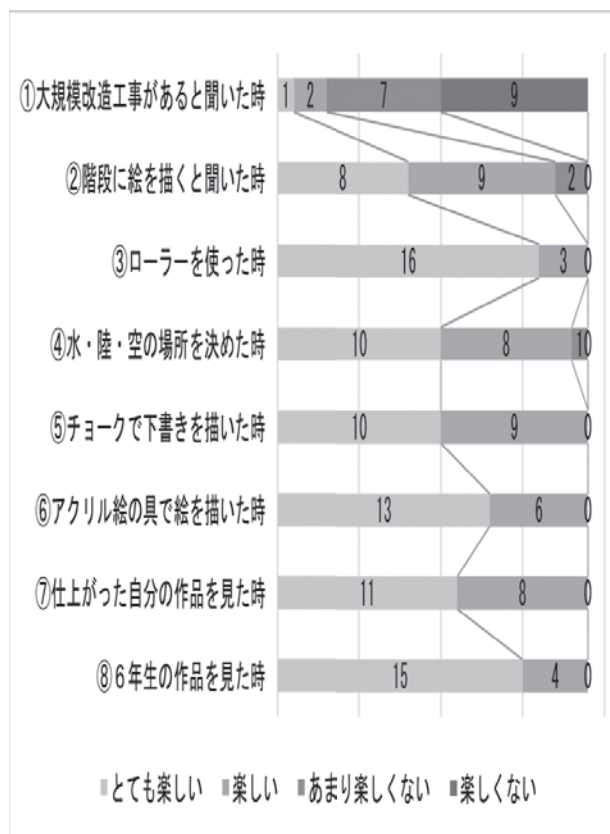


表3 職員アンケート結果 (19名)

終了後に行ったアンケート結果から、職員の本音の変化を確認する。

大規模改造工事があると聞いた時(表3 ①)

「楽しくない9人」と答えた理由は、「準備や調整の手間3人、給食が止まる3人、生活が不便になる2人、充実した授業ができなくなるのではないかという不安1人」である。教師にとって大規模改造工事は、負担が多いことがわかる。

階段に絵を描くと聞いた時(表3 ②)

「とても楽しい8人」と答えた理由は、「なかなかできない、これまでなかった経験4人、自分達で学校をデザインできる1人」等である。経験したことがない体験に興味を持っていることがわかる。

ローラーを使った時(表3 ③)

「とても楽しい16人」が全ての活動の中で最も多かった。理由は、「初めは本当に描いていいのかドキドキした3人、自由にできることが楽しい3人、無心で



写真1 ローラーを使った時に、楽しさや喜びを感じた職員が多かった。

きた。ワクワクした2人」等がある。壁に描くという日常では行わない活動やローラーを使う活動(写真1)

に、楽しさや喜びを感じた職員が多かった。

「仕上げた自分の作品を見た時」(表3 ⑥)



写真2 アクリル絵の具で描く等である。自分の作品が仕上がる喜びと、周囲の作品から受ける感動があったことがわかる。

「とても楽しい13人」の理由は、「壁に絵を描くという事が楽しかった2人、きれいな色で塗れて楽しかった。周りの人の作品に感動1人、どんどん美術館のようになっていくのに胸が高鳴った1人」

「壁面に描くのなら、大きな木を描こうと決めていた(写真2)」というように、日常できない機会を活かしたいと考える教員もいた。サーフィンが好きな教員は海を選び、魚を描き、図書館指導員は「絵本のスイミーの世界を表現したい」と赤い魚を描いた。技能員は「絵を描くことが好きです。」と話し、下描きをしないで描いていった。この研修を通じて、各自の趣味や特技を改めて知ることができた。

6年担任は、「発色がいいから喜びそう。」と児童に行う体験活動について考えていた。事務主事は、描きながら「アクリル絵の具は結構使いますね。6年生の時は、もう少し予算が必要かな。」と話す等、研修と仕事を結び付けていた。

「仕上げた自分の作品を見た時」(表3 ⑦)

「とても楽しい11人」の理由は、「二度とできない経験3人、大きく描けて満足3人、自分のイメージが



写真3 職員の描いた作品

表現できた3人、児童の反応が楽しみ2人」であった。「自分の学級の子供たちの近く場所に描きたかった。子供たちが元気に飛ばたいほしい気

持ちを表現した(写真3)。」というように一人一人の絵には、思いが込められていることがわかった。

(3) 6年生児童による体験活動

①活動名

廊下を通る人たちが幸せな気持ちになる〇〇通り

②活動のねらい(5時間扱い)

- 〇 廊下を通る全校児童、保護者、地域の人たちが幸せな気持ちになる通りの名称、意味を学級で考えることができる。
- 〇 テーマから考えた思いを、全身を使い表現することができる。
- 〇 絵を描く活動を通して、学級の友人や鑑賞者と関わり合うことができる。

③対象学年 6年生

対象学年は、コロナ禍の為、5年生の時は宿泊学習の機会がなくなっている。また、コロナ感染症予防の観点から全校での活動を行っておらず、最高学年としての活躍の機会が少ない。全校のリーダーとしての活躍の場を作りたいと考えた。

④場所 1階～3階の廊下を各クラスに割り当て

⑤アンケート結果から

終了後に行ったアンケート結果から、児童の心情の変化を確認する。

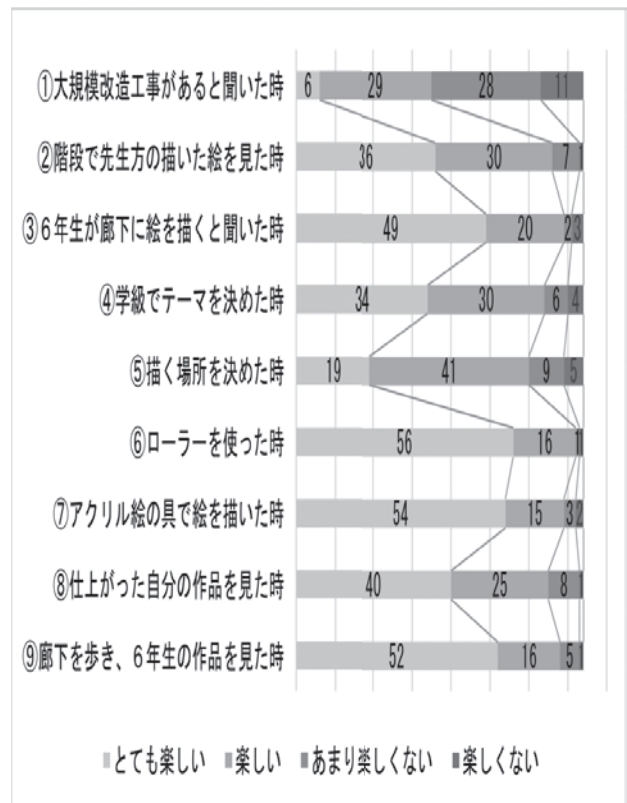


表4 活動終了後のアンケート (6学年74人に実施)

大規模改造工事があると聞いた時 (表4 ①)

「楽しくない11人」と答えた理由は、「特別教室がつかえなくなる7人、工事がある2人」等である。読書好きの児童が多く、図書室が使用できなくなることへの不満があった。「とても楽しい6人」と答えた理由は、「学校がきれいになる6人」があった。

階段で先生方の描いた絵を見た時 (表4 ②)



写真4 教師の描いた作品を見る児童

本活動は、児童にとって、ある朝、登校すると階段に絵が描かれている所からスタートする。階段を上っていくと広がる世界に児童は、驚き、「クジラだ。」「飛行機だ。」「誰が描いたの？先生？」と歓声をあげた(写真4)。

アンケートでは、先生たちが描いた絵を見て「とても楽しい36人」の理由は、「きれいだから12人、色々なものがあり楽しい11人」等と答えている。「楽しくない1人」と回答した児童は、「自分が描いていないから1人」と理由に書いている。

6年生が廊下に絵を描くと聞いた時 (表4 ③)

階段の絵を見た数日後、担任が6年生に「廊下に学校の代表として絵を描いてみない？」と問いかけた。「とても楽しい49人」と答えた理由は、「先生と同じようなものが描きたいと思った15人、うれしい・楽しみ10人、なかなか体験できないから6人、絵を描くのが好き5人」等と答えている。職員が研修で描いた絵が児童に意欲を持たせていることがわかる。

学級でテーマを決めた時 (表4 ④)

学級	テーマ	設定理由
6-1	ファンタジー通り	空想の世界を、見て、楽しんでほしい。
6-2	春夏秋冬通り	自然が少ないから四季の美しさを感じてほしい。
6-3	宇宙通り	自分たち一人一人の思いを表現しやすい。

表5 学級テーマと設定理由

担任から、「廊下を通る人たちが幸せな気持ちになる〇〇通り」の構想を聞き、学級テーマを決める話し合いを行った(表5)。各学級、様々な意見が出た。「とても楽しい34人」と答えた理由は、「自分の希望通り

になった13人、様々な意見が出た8人」等がある。

「楽しくない4人」と回答した理由は、「自分の出したテーマにならない2人、決定したテーマだと発想が浮かばない1人」等であった。

描く場所を決めた時 (表4 ⑤)

「とても楽しい19人、楽しい41人」は、希望の場所になった事が理由である。

ローラーを使った時 (表4 ⑥)



写真5 ローラーで下塗り(児童)

ローラーを使った時が、「とても楽しい56人」は、最も多い。理由としては、「思い切り描けたから20人、ローラーが楽しい

13人、ローラーで工夫し色々な線を引けた5人、皆と一緒に描けた4人、前からやってみたかった4人」等があった。写真5にあるように、長い廊下を大胆に使えたことが楽しさにつながったと考えられる。

アクリル絵の具で絵を描いた時 (表4 ⑦)



写真6 アクリル絵の具で色を塗る

「とても楽しい54人」の理由は、「初めて壁にアクリル絵の具で描いた27人、思い通りにできた7人、友人と描けた3人」である。

写真6は、桜の花びらが舞う様子を描き始めた一人に、「かっこいい。手伝うよ。もっと花びらを描こう。」等と話しながら描いている様子である。描いている中で、アクリル絵の具の発色の良さ、壁に描く感覚、近くの友人と描く協働の喜びを児童が感じていたことがわかる。

仕上がった自分の作品を見た時 (表4 ⑧)



写真7 児童作品

「とても楽しい40人」の理由は、「上手くいった31人、達成感3人、皆に見てもらえる1人」等である。ファンタジー通りでフラミンゴを描いた児童は、「大好きな図書室の前を、優しいフラミンゴが守る気持ちを表した(写真7)。」

と話している。一人一人が思いを持って描いたことがわかる。

廊下を歩き、6年生の作品を見た時 (表4 ⑨)

「とても楽しい52人」と答えた理由は、「いろいろな作品があった29人、すごい18人、みんなに自分の作品を見てもらえた1人」等である。



仕上がった自分の作品を1年生に紹介する等、作品を通して交流する場面もあった(写真8)。

他学年は、学級ごとに6年生の作品を鑑賞し、テーマを想像する、感想を書く等の活動を行った。

写真8 1年生に自分の作品の紹介をする6年生

(4) 体験活動を保護者、地域へ公開

保護者、地域に、放課後2日間を使い作品を公開した(写真9)。平日ではあったが、23人の保護者の参観があった。帰宅した児童が描いた作品について話したのだろう。カメラを持ち、作品を撮影する保護者も



写真9 完成した宇宙通り

いた。

地域には、育成委員会のパトロール終了後に12人の育成委員に作品を紹介した。「子供の楽しい気持ちが伝わってくる。」「面白い取り組み。毎年やって欲しい。」

「せっかく描いたのだから、ずっと残しておけばいいのに。」「久しぶりの学校。子どもの絵から力をもらった。」等という声があった。

4 成果

(1)大規模改造工事という課題から、「学校を美術館に」プロジェクトを構想し、児童の心に残る体験活動を実践できた。

活動終了後の6年生の児童アンケート(表4)を見ると、階段に描かれた職員の絵を見てから、「とても楽しい36人」気持ちが生まれ、自分達が絵を描くと聞いた時に、さらに「とても楽しい49人」気持ちが高まっている。「とても楽しい」と回答した児童が特に多かつ

たローラーの体験(56人)や、壁に絵を描く活動(54人)は、「通る人を幸せな気持ちにする」というテーマの中で、個人で考え、友人と描きながら関わり合う経験であり、楽しい活動であったことがわかる。

12月末に、全校児童を対象に「児童が選んだ幕張南小10大ニュース」のアンケートを行った。本校出身のメダリストの来校やコロナ禍のために昨年度できなかった行事に次いで、「学校を美術館に」プロジェクトが4位に入っている。6年生だけでなく、全校の児童の心に残る体験であったことがわかる。

1位	東京オリンピックメダリスト萱選手が教室に	177人
2位	校外学習、宿泊学習へ行けた。	36人
3位	工事のため昇降口、特別教室等の使用禁止	27人
4位	登校したら階段や廊下に絵。学校を美術館に	24人

表6 児童が選んだ幕張南小10大ニュース(抜粋)332人実施

(2)卒業アルバムに「学校を美術館に」プロジェクトの様子を掲載し、体験活動の経験を残すことができた。

(3)全職員の役割を明確にすることで、それぞれが専門性を活かした意見を出し合い、プロジェクトに向けて、チーム学校の力を高めることができた。

(4)全職員が職員研修で、壁に絵を描く体験活動を行ったことで、職員同士が互いの良さを改めて知り、6年生の体験活動の発想の糸口となった。

終了後に行ったアンケート(表3)では、6年生の完成した作品を見た時に「とても楽しい15人」と感じた理由を「発想が豊か、個性的で楽しかった1人、子供たちの楽しさが前面にあふれていた1人、子供たち、保護者、地域、皆、笑顔だった1人、一人一人の思いがある作品に仕上がった1人」等がある。職員研修で各自が描いた絵を、全校児童が歓声をあげて鑑賞し、6年生の体験活動につながったことに喜びを感じていることがわかる。

(5)体験活動を全校児童、保護者、地域に公開ができた。

5 課題

(1)令和3年度は、学校の代表という形で、6学年のみ体験活動を実践した。発達段階も考慮しながら、他学年への取組を今後、考えていきたい。

(2)全職員が職員研修を行うことで、課題を共有し、専門性を生かした意見を出し合うことができた。今後、職員研修をどのように計画し、活用していくかを考えていく必要があるだろう。

児童の資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメント

～全国学力・学習状況調査等の結果の分析を通して～

野田市立清水台小学校

校長 下川 泰弘

I 学校の概要と研究のねらい

本校は野田市の西側に位置し、敷地は田んぼであった所を造成して作られ、今でも自然豊かな環境である。本年度で49年目を迎え、「よさや可能性を生かし、豊かな心や力を育む」を学校教育目標に掲げ、1～6年生各4学級(4年生は3学級)、特別支援6学級、全校743名の児童が切磋琢磨しながら活動している。一方で、学力面の課題が多いことも事実である。そこで本研究のねらいは、全国学力・学習状況調査等の結果の分析を通じ、児童の学力面についての底上げを、カリキュラム・マネジメントを通して育成することとする。

II 問題と目的

千葉県教育委員会では、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業改善に力を入れている。令和3年3月、各学校に配付されたリーフレットによると、全国学力・学習状況調査の結果を活用し、自校の実態に応じた授業改善をすることが児童生徒の資質・能力を育成するとしている。さらに、「学力が向上した取組4つの共通点」をチーム学校として取り組むことで大きな効果を見込めるとしている。

そこで本校ではこの知見を参考に、全国学力・学習状況調査等の結果を分析し、その内容を踏まえた授業改善を、カリキュラム・マネジメントの視点で実践していくこととした。

細かな課題は後述するが、全体を総じて本校の学力についての課題は、下位層の割合が高いこと、思考力、判断力、表現力等の問題が千葉県の平均と比較すると低いことである。一例として令和3年度全国学力・学習状況調査の算数科の結果を図1に示す。点数等の詳細は割愛するが、下位層の割合が全体の約25%を占めている。この傾向はどの教科どの学年でも共通していることが各種の調査から明らかになっている。

これらの手立てとして、①対話的な活動を授業に取り入れる②学習規律を整える、の二つをカリキュラム・マネジメントの視点で実践することで、児童の資質・

能力を育成できるのではないかと考え本主題を設定した。

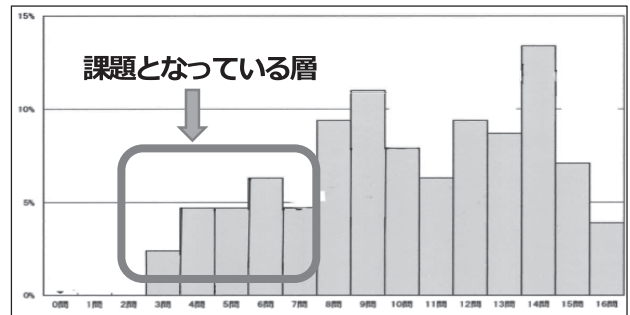


図1 R3 全国学力・学習状況調査の結果 (算数科)

III 研究の目的

全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業改善をカリキュラム・マネジメントの視点で実践することで児童の資質・能力を育成できることを、実践を通して明らかにする。

IV 研究の方法

1 調査対象

令和4年度野田市立清水台小学校、第1学年～第6学年の児童、計743名。

2 調査期間

令和4年4月～令和5年3月

3 調査方法

児童の資質・能力を育成するため、具体的な手立てとして次の2点をカリキュラム・マネジメントの視点で実践し、その有効性を、(1)学力調査等の結果 (2) 質問紙調査の結果 (3) ふり返りの記述内容により分析し、検証する(表1)。

表1

手立て1	対話的な活動を授業に取り入れる
手立て2	学習規律を整える

V カリキュラム・マネジメントの考え方

学習指導要領総則(2017)ではカリキュラム・マネジメントについて、以下のように定義している。本研究におけるカリキュラム・マネジメントは、学習指導要

領で述べられていることと同義であることから、このことを定義とし研究を進めることとする。(図2)

各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的または物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的にかつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図って行くこと(以下、「カリキュラム・マネジメント」という。)に努めるものとする。

図2 カリキュラム・マネジメントの定義

さらに、カリキュラム・マネジメントを充実させるために、①内容の組織的配列、②PDCA サイクル、③内外の資源の活用、の3つの側面が教育活動の質の向上を図ることができる、としている。

これらのことを踏まえ、研究構想図を作成した。(図3)具体的には、資質・能力を育成するために、教科横断的な視点に立って取り組めるようにした。さらに教科等だけではなく学校行事などの教育課程におけるすべての活動で手立てを講じる。また、教育の内容の質を高めるために、PDCA サイクルを適宜取り入れる。具体的には、長期休み期間に学年会を設け、アンケートなどを分析し、指導等の改善を図っていく。

カリキュラム・マネジメントは、「管理職だけが行うイメージが強いがそうではなく、学校全体・全職員で取り組むことが、教育の質を高め、児童の資質・能力を育成する」ということである。

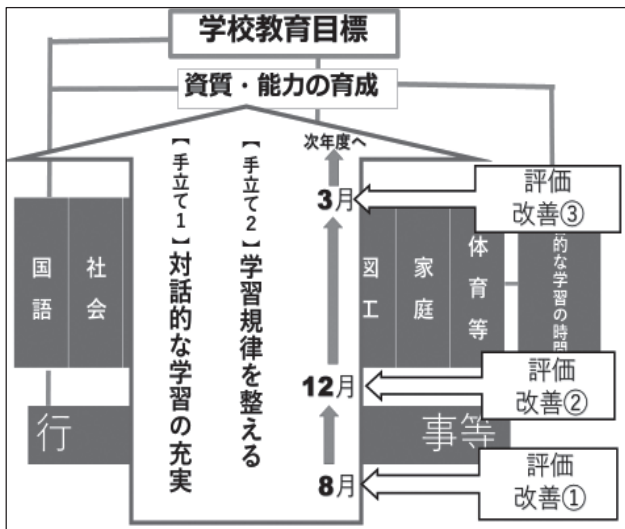


図3 研究構想図

VI 全国学力・学習状況調査等の分析の分析から見出した本校の課題

全国学力・学習状況調査の結果は校内研修等で全職員に周知し、結果を自分事として捉えるようにした。

詳細な分析は、主に管理職、教務主任、研究主任で行った。千葉県総合教育センター発行の分析ツールを活用したり、誤答を分析したり質問紙調査における児童や教師の課題を洗い出した。さらにそれを基に学年会で、自分の学年の学力調査の結果や普段の授業の様子、質問紙の調査結果などから自分の学年の課題を把握し、まとめた。

その結果、全国学力・学習状況調査等の分析からわかった本校の課題は以下の4点である。

- ① 下位層の割合が高いこと
- ② 思考力、判断力、表現力等の問題の正答率が全国や千葉県の平均と比較すると低いこと
- ③ 基礎的な問題につまずきが見られること
- ④ 教師側の視点として、表現する活動が十分でないこと

VII 手立てについて

VIで述べた課題を解決するために手立てを策定した。

千葉県教育委員会発行(2022)の「学力が上がる授業改善の処方箋」によると、「学力が向上した取組 4つの共通点」として、①学力向上部会を組織として位置付ける、②全学年・全教科同一歩調の共通理解、③学力が伸びる教育課程の工夫、④家庭・地域との連携、をチーム学校として取り組むことで大きな効果を見込めるとしている。

そこでこの知見を参考に、二つの手立てをカリキュラム・マネジメントの視点で実践していくこととした。この手立ては、学年主任等が集まる学校の中核組織である「学力向上部会」で決定した。そして、全学年・全教科同一歩調の共通理解が図れるよう、年度はじめ、教頭を講師とした校内研修会を開催し、全学年・全教科の方針等の共通理解を図った。(図4)



図4 全職員で課題等を共有している研修の様子

1 対話的な活動を学習に取り入れる【手立て①】

コロナ禍の影響で、授業は一斉指導が中心となる期間が長くあった。学級には、理解するのが速い児童とそうでない児童がいる。そのため教師は、おおよそ中間層に合わせて授業を進めることとなる。この一斉指導中心の学習が下位層の児童の割合を増やしたり、思考力、判断力、表現力等の課題につながったりしていると分析した。さらに、質問紙調査から、本校の教師は他校に比べると児童にアウトプットさせる機会が少ないことがわかっている。これらを改善するための手立てとして、毎時間、対話的な学習を取り入れることとした。対話的な学習の有効性については周知の事実であるため割愛するが、本校では特に対話を入れた協働的に行う学習、特に教材を工夫すること、学習課題を精選して提示することが対話を促し、上述した課題の有効な手立てとなると考えた。

2 学習規律を整える【手立て②】

このことを手立てとした理由は二つある。

一つ目は、各学級での指導のばらつきに起因する。近年、若年層教員及び講師の増加に伴い、教師によって、学習規律にばらつきがある。児童は教師や学年が変わるに伴い戸惑いがでている様子が窺えた。また、学校評価の保護者のアンケートにも同様のことが書かれていた。また、若年層の教員は経験が浅いため、自分の指導が本当に正しいのかどうか不安を感じていることが研修や日常の会話を通して分かった。

二つ目は、教師の資質・能力の向上のためである。学習規律は、学級集団の中で勝手に確立されていくものではなく、教師の意図的・計画的な指導によって子どもたちに身につけていくものである。学習規律と聞くと、子どもたちに決まりを守らせるということを連想するがそうではない。本校が考える学習規律とは、児童の資質・能力を育成するためのものである。そのために教師が自らの指導を改善する。

具体的には付けたい力を明確にし、どの学年でも必要であろう6つを設定した。(表2)

表2

1 整えるチカラ(準備・片付)	4 はなすチカラ(話し方)
2 余裕をもつチカラ(時間を守る)	5 かくチカラ(書き方)
3 きくチカラ(聞き方)	6 学びに向かうチカラ(姿勢)

VIII 研究実践の内容

1 対話的な活動を入れた授業の実践【手立て1】

毎時間、全学級において対話的な学習を取り入れている。ここでは一例を紹介する。

① 第1学年「国語科・おんどくげきをしよう おおきなかぶ」動作化等を取り入れた対話的な学習の例

入学直後からペア学習に取り組んできた。自分の考えを相手に話すことができる児童が少しずつ増えてきた。しかし、恥ずかしさやマスク着用の弊害で相手に伝わるように話すことができる児童は限られていた。そこで本単元では、対話を促す手立てとして、立体的な大きなかぶを用意し、抜けないときや抜けたときの登場人物の様子をイメージしやすくした。

授業では、単元導入時に学習の終わりには、音読劇をするという単元の見通しをもち、読むことに対する意欲を高めた。そして場面ごとに登場人物の様子や言葉を想像させた。挿し絵や登場人物のお面、大きなかぶやマス目と挿し絵のあるワークシートを準備し、ペアの友だちに考えを伝えられるようにした。単元の終末には、グループを作り場面を割り当てて劇を発表した。毎時間想像した登場人物の言葉が書かれたワークシートを見返しながらオリジナルの台本を作り、劇を発表し互いに良いところを伝え合うことができた。(図5)



図5 児童同士が対話しているときの様子

② 第6学年「体育科・バスケットボール」ICTを活用した対話的な学習の例

対話を促す手立てとして ICT 機器を取り入れた。動画撮影することで、児童が全体を俯瞰し作戦を立てるだけでなく、自分の動きを客観

自主学習で個別に課題を出したりしていく。

2 質問紙調査の結果と考察

年度はじめの4月と7月中旬に、全国学力・学習状況調査の質問紙調査を参考に、本校の課題に即した質問を作成し、調査を行った。その結果の一例を図11に示す。質問に対して、4あてはまる、3どちらかといえばあてはまる、2どちらかといえばあてはまらない、1あてはまらない、の4件法で調査し、4あてはまる、3どちらかといえばあてはまる、を肯定的回答としてグラフに示した。

どの項目においても数値の上昇が見られた。しかしこのことは、一過性であることが考えられる。この結果に一喜一憂することなく、継続して行く必要がある。また、質問1の表現力に関する質問では、否定的な児童が約20%存在する。これらの児童については、認知的な側面でも同様に低いことがわかっている。今後は、これらの児童に対する手立てを検討していく必要がある。

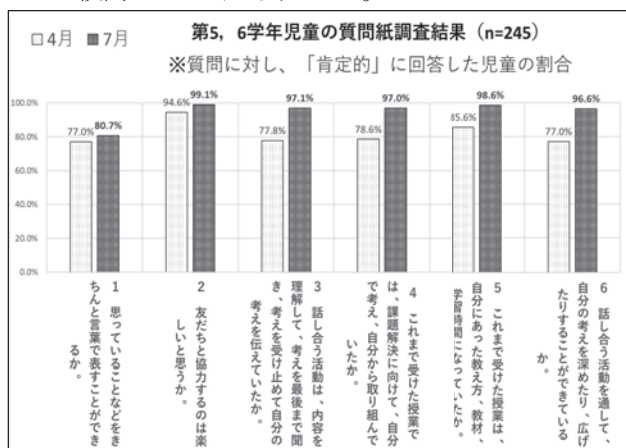


図11 思考力、判断力、表現力等における質問紙調査の結果
(4月と7月の比較)

3 ふり返りの分析

授業後の児童のふり返りには、思考力、判断力、表現力等の伸長、さらには、学習で学んだことを自分の生活に生かしているなどのコメントが多くあり、対話的な学習が児童の資質・能力を育成できたことが判断できた。(図12)

学習規律についてこれまでの実践を学級担任にふり返ってもらった。その内容を図13に示す。指導の改善の重要性など、指導のあり方が児童の資質・能力を伸ばすなどのコメントが多くあった。これらのことから児童の資質・能力の育成を図る上で学習規律を整えることは有効だったと言えよう。

- ・この学習では、チームのコミュニケーション能力の向上や自分たちでどう考えればよいのかなどを考えられたので、自分のためにもクラスのためにもなった。
- ・もっと、チーム内で声をかけあわなくてはならないと考えた。これからは友だち関係で声をかけあい、楽しく生活や助け合っていきたい。
- ・私はバスケットボールをほとんどしたことがなかったのですが、チームメイトからのアドバイスのおかげで、シュートにからむことが出来たり、得点をいれることができ、バスケの楽しさを知った。
- ・あきらめずちょうせんをし続けたら、いろいろなことができる。 など

図12 児童のふり返り

- ・指導すべきことが明確になったので、自信をもって指導できる。
- ・全校、学年で共通理解、実践することが児童の力を伸ばすことができると知った。
- ・学年で学習規律を話し合ったことにより、先生方の考え方を深く知ることが出来た機会となった。
- ・子ども達に守らせるのではなく、教師自身が指導のあり方を見直すことの大切さを知った。

図13 教師のふり返り

X まとめと今後の課題

本研究の目的は、全国学力・学習状況調査等の結果を踏まえた授業改善を、カリキュラム・マネジメントの視点で実践することで、児童の資質・能力を育成することであった。実践では、全国学力・学習状況調査の結果を分析して策定した2つの手立てを、教科横断的に組織的に行い、さらにPDCAサイクルを確立させ、指導の改善を図ってきた。

その結果、4月と7月に実施した質問紙調査の項目で数値が上昇した。授業後の児童の振り返りには、学びに向かう意欲の高まりが窺える記述が多くあった。

これらのことから、全国学力・学習状況調査等の結果を踏まえた授業改善を、カリキュラム・マネジメントの視点で実践することは、児童の資質・能力を育成するのに有効だったと言えよう。

一方で課題もある。それは意欲や学力が低い児童への対応である。調査等の結果から、十数パーセント存在することがわかっている。学習が得意であったりやりがいを見出したりした児童は、正のスパイラルが生じ、やればやるほど伸びていく。一方で学習が極端に苦手であったり、大きな劣等感をもったりしている児童の意欲や学力を高めることはできていない。現在、このような児童に対する手立てを検討し、実践しているところである。

研究はスタートしたばかりである。児童の資質・能力の向上に向け今後もチーム学校で尽力していきたい。

【主な参考文献】

- ・千葉県教育委員会(2022)「学力が上がる授業改善の処方箋」
- ・文部科学省(2017) 学習指導要領総則

主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業のあり方

～「実践モデルプログラム」を活用した授業の実践を通して～

旭市立共和小学校

校長 石毛 佐和子

I はじめに

本校は、創立147年の歴史ある学校である。学区は、旭駅の北西部に位置し、新町・鎌数・琴田の三地区からなる。緑豊かな地域で、水田や畑が多く、保護者の農業従事者の割合は比較的多いが、近年は兼業農家が増えている。また、新町地区南部を中心に住宅の造成が進み、他市等からの転入が増加し、家庭数の半数を超えている。

保護者の学校教育に関する関心は高い。本地区の先人達が大切にした「共同和合」の精神を受け継ぎ、PTA活動は執行部を中心に協力的な活動がなされている。

II 研究の概要

1 主題設定の理由

本校の学校教育目標は「自ら学び、心豊かに、たくましく生きる児童の育成 ～みんなにこにこ共和小～」である。この学校教育目標を受け、「児童の主体的・対話的で深い学びの実現」を具体的な方策として掲げ、進んで学ぶ児童の育成を目指している。

県標準学力検査の結果から、児童は、基礎的な知識・技能の定着が不十分であることが分かる。また、情意調査の結果から、学習意欲が低く、難しさを感じている児童が多いことが分かった。さらに、「問題の解き方がよく分からない」「どう考えたらよいか分からない」という意見も多く見られた。

授業では、指示された課題にはまじめに取り組むことができる児童が多い。しかし、解決のために見通しをもって自力解決したり、自分の考えをまとめ表現して伝えたりする活動を苦手とする児童が多く見られ、主体的・対話的で深い学びの実現にはいたっていない。

そこで、児童の主体的な学びを大切にしながら、確かな学力を身につけることができるよう、千葉県教育委員会が「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて作成した『「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム』（以下、「実践モデルプログラム」）に基づいた授業作りに取り組む。

本研究では、「実践モデルプログラム」の4つの過程（①「見いだす」②「自分で取り組む」③「広げ深める」④「まとめあげる」）のうち、「見いだす」「自分で取り組む」過程に重点を置き、（1）「課題意識をもつことができる児童の育成」（2）「見通しをもち、自ら問題解決に取り組むことができる児童の育成」を目指した。児童の学習意欲の向上を図り、知的に楽しみを感じられるような授業の展開を目指していく。

2 研究の目標

- 「見出す」「自分で取り組む」の場面を工夫し、児童が主体的に学習活動に取り組める授業のあり方を明らかにする。

3 目指す児童像

上記の（1）（2）についての具体的な目指す児童像は、以下の通りである。

- （1）「見いだす」場面において、素材を分析することができる児童

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・「分かっていること」と「聞いていること」を捉えている。 ・解決すべきことを理解し、進んで取り組もうとしている。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習内容との共通点や相違点を捉えている。 ・前時との違い等から学習問題を設定しようとしている。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習内容との共通点や相違点から学習問題を立てる。 ・複数の既習事項を関連付けて問題解決に取り組もうとしている。

- （2）「自分で取り組む」場面において、解決の見通しをもち自分で考え粘り強く課題に取り組む児童
<全学年共通>

- ・自分の考えを具体物、絵、図、言葉、数、式等で表現している。

・時系列を用いて考えを表現している。

低学年	・結果の見当がついていて、解決の方法をしている。
中学年	・解決の結果や方法の見通しをもっている。 ・共通性からきまりを見つけている。
高学年	・解決の結果や方法の見通しをもち、既習の解決方法を選択している。

4 研究の視点

目指す児童像に迫るため、以下の視点に基づいて授業を行い、講じた手立てや工夫が有効であったかを検討する事例集積型の研究を行うこととした。

視点1 「課題意識をもたせるための工夫」

「見いだす」場面で、児童の興味関心が高まるような素材提示や発問を工夫すれば、主体的に取り組む意欲をもち、既習事項と関連付けて解決しようとする態度を身に付けることができると考える。

視点2 「主体的に自分で取り組むための工夫」

「自分で取り組む」場面で、解決や説明の仕方を自分で選択できるようにしたり、意見交流を行ったことで、自分の考えを分かりやすくまとめ、表現する力が身に付くと考える。

III 実践

1 【第2学年 算数 単元名「かけ算(2)」】

(1) 内容

本単元では、前単元で学習した乗法の意味及び2～5の段の九九の理解の上に、6～9の段、1の段の九九について理解し、九九表を完成させることを目標とした。乗法に関して成り立つ性質やきまりを活用しながら、6～9の段、1の段の九九の構成の仕方を考える力や、乗法について成り立つ性質やきまりを用いることよき気づき、生活や学習に活用しようとする態度を育てることを目指した。また、数量の関係に着目し、児童自らが九九の構成の仕方を考えていくことを重視した。

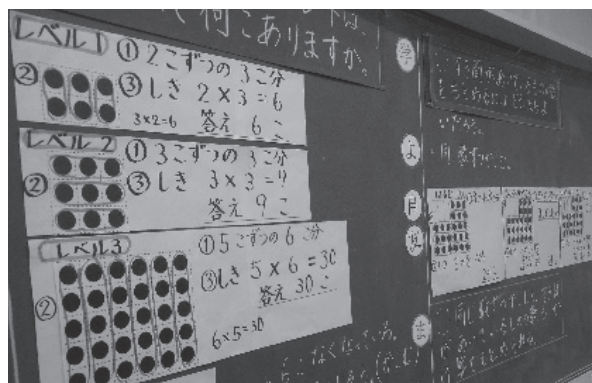
「見いだす」場面や「自分で取り組む」場面では、児童の数学的活動が単なる数字のみの操作にならないように、具体物、図、数、式など相互の関連を図るこ

とで、算数を学ぶことの楽しさや意義を感じさせたり、基礎的・基本的な知識や技能を身に付けさせたり、思考力・判断力・表現力等を高めたりすることにつなげられるように指導した。

(2) 視点について

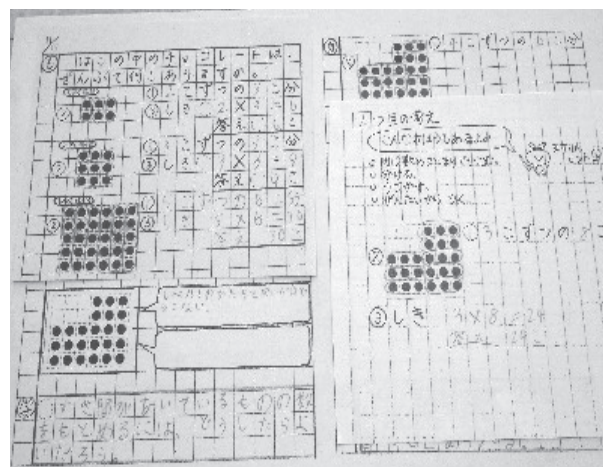
<視点1>

- ・既習事項を平易なものから順を追って提示したので、「〇こずつ囲み、その△個分という乗法で解けそう」と見通しをもつことができていた。
- ・レベル1、レベル2のようにゲームを想起させる言葉が児童の実態に合っており、関心を高めることができた。
- ・提示する素材の難易度を徐々に上げていくことで、子どもたちの意欲も高まった。



<視点2>

- ・手順を示したワークシートを使用することで、思考の流れが明確になり、筋道立てた表現の仕方を身に付けることができた。
- ・予想される解決方法を示したワークシートを別に用意することで、他の方法でも考えてみようとする主体的に取り組むことができた。



- ・解決の見通しを複数もつことにより、数学的な思考を高めることができた。

2 【第6学年 算数 単元名「比例と反比例」】

(1) 内容

本単元では、比例の意味や性質を知るとともに、日常生活において、伴って変わる2つの数量を見だし、目的に応じて表やグラフを活用し、問題を解決する力を伸ばしていきたい。

実態調査の結果から、既習事項を含む比例の学習の定着や、発表への抵抗感を減らす手立てが必要であった。学習の定着を図るために、変化のきまりや式の表現などの既習事項を掲示物で提示し、いつでも学習を振り返ることができる環境を整えた。また、問題解決の見通しをもてない児童が多くいることが分かったため、学習の導入や見通しをもつ場を丁寧に行った。

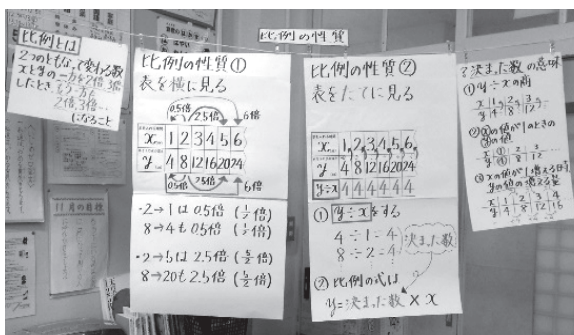
導入場面では、日常生活で起こりうる素材を提示することで、解決の必要性をもたせ、自分の考えを自由に吹き出しに書けるようにした。さらに、友達の予想を聞いたり掲示物で既習事項を振り返ったりして、解決方法の見通しをもつ場を設定するなどの工夫をした。自分が取り組む方法を選び、挙手させることで見通しをもって自力解決に取り組めるようにした。

自力解決の場面では、全員が自分の考えをもてるように、ヒントカードをICT機器等で用意した。ICT機器を使用することにより、自席で瞬時にヒントを選び、自力解決に取り組むことができた。また、実態調査から、表があれば問題解決できる児童が多いことが分かったため、単元を通して表を手がかりに決まった数を見つけたら、式やグラフに表したりして解決できるように配慮した。さらに、難易度の高い問題等については、他の児童の考えを聞き、主体的に課題解決に取り組める時間を設定した。

(2) 視点について

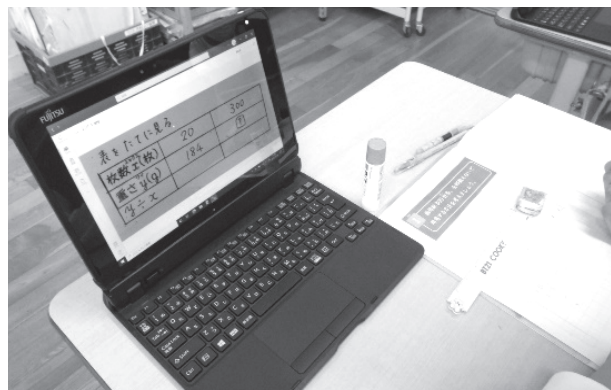
<視点1>

- ・比例の決まりや性質等の既習事項を掲示した。掲示物を用いて学習の振り返りを行い、解決方法の見通しをもつことができた。



<視点2>

- ・自力解決の場面で、ICT機器を使用したヒントカードを活用した。3段階のヒントを用意することで、支援が必要な児童も自分にあったヒントを選び取り、自力解決に取り組むことができた。



3 【第4学年 道徳 教材名「本当の宝物」】

(1) ねらい

主人公の言動を中心に考え、正しいと判断したことは、自信をもって行おうとする態度を育てる。

(2) 視点について

<視点1>

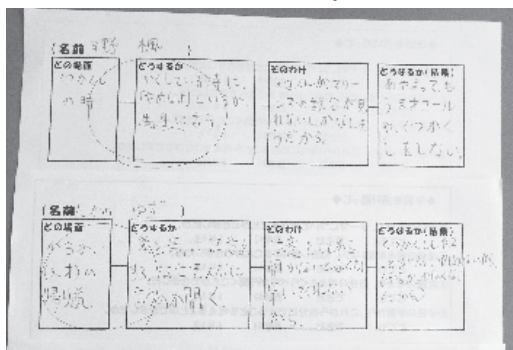
児童が興味をもてるように映像教材を使用した。導入で、登場人物の4人は「仲良し4人組」と確認して視聴を始めた。内容も児童にとって分かりやすかったため、話の内容を理解して問題点を見つけることができた。また、「道徳的に問題点はないか見て」と示したことで、課題意識をもって視聴することができた。

視聴後、子どもたちが発見した問題場面とその時の4人の気持ちを話し合った。「悪いことをしている」「注意したいけど、次は自分がやられてしまうから注意できない」など、子どもたちが本音を話すことができ、後半へとつなげることができた。



<視点2>

自分が主人公だったら、どの場面でどうすればよかったかを考えさせた。問題点をどうしたら解決できるのか個々に考えさせるワークシートを利用したことで、一人一人が主体的に取り組み、自分なりの解決方法を考えることができた。主人公が長靴を倒して、せめて見つけやすくておいたことに触れて考えさせることでさらに共感できたと思う。



4 【自閉症・情緒障害特別支援学級 国語

単元名「オリジナル漢字ブックを作ろう」】

(1) 内容

学習した漢字を用いて、オリジナルの「漢字ブック」を作る。ワークシートの工夫により、漢字を読み、書き、短文を作りながら、学習を積み重ねることで定着を図り、生活の中でも使えるようにする。

(2) 視点について

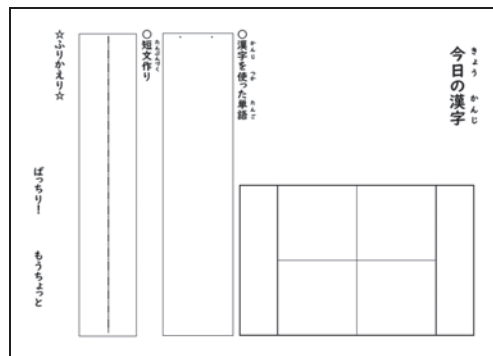
<視点1>

視覚的に分かりやすい絵カードを用意したことで、漢字と意味のイメージが結びつき、読みを覚える手がかかりになった。漢字カードのマッチングでは、①絵と漢字と読み方②漢字と絵③漢字と読み方と、段階的に行ったことで、漢字の意味や読みを視覚的に捉え、イメージを強化することができた。

<視点2>

ワークシートは、漢字の意味や読み方や使い方が一目で分かるようにし、読み方、単語、文を書くスペースを用意した。

また、マスが大きかったことで、初めのうちは上半分に小さく書いてしまうことが多かったが、練習していくうちにマスのどこに画が通るのかを意識して大きく書くことができた。ワークシートを本児のオリジナル漢字ブックとして積み重ねていくうちに、「こんなに勉強したんだね」と、達成感を感じ、「下学年の子にも見せたい」と学習への意欲を高めることができた。



5 【知的障害特別支援学級 自立活動

単元名「オリジナルの絵本を作って、読み聞かせをしよう」】

(1) 内容

日本語の動物の名前や色の言い方、質問の仕方を理解し、オリジナルの絵本を作る。作成した絵本を使って、自分から進んで日本語で読み聞かせをする。

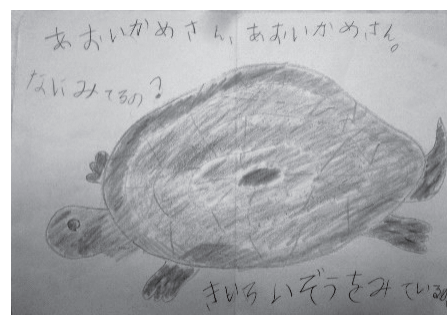
(2) 視点について

<視点1>

絵本の読み聞かせの後に、オリジナルの絵本を作り、学級の友達や上級生に読み聞かせるというゴールを設定した。日本語で表現する必然性をもたせることで、日本語での言い方を自分から知ろうとし、定型文をもとにして文を考え、書いたり、読んだりできた。絵本の読み聞かせをするために、相手に伝わるような話し方を意識することができ、絵本作りに最後まで意欲的に取り組むこともできた。読み聞かせでは、積極的に相手と関わろうとしながら行い、日本語でやりとりする喜びを味わっていた。

<視点2>

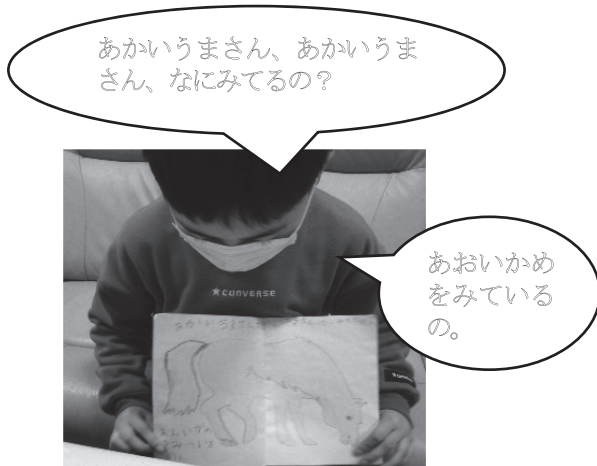
児童にとって第二言語でもある英語（第一言語はバイシア語）での読み聞かせの後に、日本語での読み聞かせを聞き、モデルとなる絵本を確かめることで、活動の内容や手順を理解し、進んで取り組むことができた。出来上がったページを確かめることで、振り返りと見直しをもち、より楽しい絵本になるように色や登場する動物を考えながら、日本語で書いたり読んだりしていた。



(3) 全体を通して

事前調査で、不明であった言葉「ひつじ、あひる、きんぎょ」「むらさき」や平仮名の「さ」と「ち」の良い間違いについては、活動終了後、1か月後の調査において、すべて習得していたことが分かった。また、自分の家族や好きなことについて、進んで話す様子も多く見られるようになってきている。

本活動を通して味わった日本語で伝える楽しさや喜びを他の活動でも経験できるようにし、学校生活において、積極的に日本語で話せるようにしていきたい。



IV 成果 (○) と課題 (●)

<視点1>

「課題意識をもたせるための工夫」について

- 掲示物、ノートなどの既習事項の活用により、児童が前時と本時の相違点に注目することができ、本時の学習に対し課題意識をもつことができた。
- 全職員で、吹き出し等の思考ツールの活用の仕方を共通理解したことで、全学年の児童が自分の考えや思いを表現することができるようになった。
- 素材に対しての児童のつぶやきや、ノートに書いた吹き出しを板書に集約したり、発言への問い返しを工夫したりすることで、本時の学習の焦点化ができ、学習問題の設定につなげることができた。
- より知的探究心をもって取り組めるように、素材提示の仕方をさらに工夫するべきである。
- 児童一人一人が課題を見いだすことに重点を置き時間をかけすぎてしまったことで、「広げ深める」場面で、児童が多様な考えに触れたり、話し合ったりするための時間の確保が不十分であった。

<視点2>

「主体的に自分で取り組むための工夫」について

○算数科においては、児童が自ら、思考ツールのどれを使って自力解決するのかが選択することで、解決に対して見通しをもつことができ、主体的に取り組むことができた。

○既習事項と結びつけて考えられるようにするために掲示物を用意することで、主体的に自力解決に取り組むことができた。

○ノート指導が定着したことで、児童が活動の流れを把握することができ、見通しをもって学習することができるようになった。

○高学年においては、ICT 機器を活用により、ヒントカードを自ら選択して学習することができた。

●児童の実態に大きな差があることが明確になった。早めに自力解決できた児童や、つまづいている児童に対する次の手立てを事前に準備しておく必要がある。児童の実態をしっかりと把握し、個々への支援をより充実させていく。

V おわりに

本研究を通して、各授業における視点を定め、事例を集積したことで、「見いだす」「自分で取り組む」のそれぞれの場面で、どのような学習活動をすれば良いかを明確にすることができた。

「見いだす」場面での、素材の提示方法の工夫や既習事項の活用、板書やノート指導の工夫により、児童は、素材から本時の学習を焦点化し、課題意識をもてるようになってきた。

「自分で取り組む」場面では、ワークシートの工夫や思考ツールやの活用により、見通しをもって学習に取り組むことができるようになった。自分の考えを分かりやすくまとめ、表現しようとする児童が多く見られるようになった。

今後は、「実践モデルプログラム」の「広げ深める」場面や「まとめあげる」場面での指導の工夫により、協働学習を通しての対話的な学びを実現し、さらに主体的に学習に取り組む児童の育成を目指していきたい。

【主な参考文献】

- 1) 千葉県教育委員会. (2019). 『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』
- 2) 東野裕子・高島英幸. (2007). 『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』 高陵社書店.

主体的で、対話的な、深い学びの実現に向けて

～一枚の写真を読み解く学習を通して～

市川市立第三中学校

教諭 五十嵐 ふみ代

1 問題の所在

グローバル化した社会の中で、私たちは日々世界のニュースの情報を、例えば、ロシアのウクライナ侵攻のニュースをリアルに手に入れることが容易になり、そのニュースは世界を震撼させている。この実践は、その事態の前、令和3年9月に実践したものである。

そのようなニュースが流される中、なかなか流されない情報もある。その一つが世界の子供たちの実態である。その実態は、児童労働、内紛、難民、少年兵士、飢餓、男女格差、教育問題等々が絡み合い、複雑な課題を抱えている。そして、その状況は長く続き、解決の糸口が見いだせないことが多い。

そんな中、近年世界の子供たちを対象にした優れた写真集が出版されている。その一枚一枚の写真は多くのことを私たちに語りかけてくる。映像も教材として十分機能する。長年構想してきた単元である。

中学生も3年生になると、いろいろなことに関心を持ち、考える力もついてくる。しかし、世界が抱える問題に真剣に目を向けているかという心もとない。勉強や部活に追われ、受験に不安を抱え生活している生徒達は、なかなか世界の子供たちの実像を知る機会もないだろう。しかも、ゲームに浸り時間を過ごしている生徒も多いように思う。

そこで、生徒の実態を知りたいと思い、7月に生徒にアンケートを採ってみた。「世界の子供たちの実情を知っていますか。」という問いに「とても知っている」生徒が10%、「多少知っている。」生徒が90%いた。「全然知らない。」生徒は0%だった。意外な結果だったが、具体的にどんなことを知っているのか尋ねたところ、表面的な漠然とした知識に終わっている生徒がほとんどだった。

また、2年次で単元「近代作家調べ」でリーフレットを作成した時、百科事典や関連する図書やインターネットで調べることはかなりできているという感触を持った。しかし、見つけた情報を自分の言葉でまとめる力や情報を取捨選択したりする力が十分育っていな

い生徒が少なからず見られ、支援が必要な生徒が目立った。

そこで、「自分の考えがわかりやすく伝わる文章を書けるか」というアンケートを実施した。その結果、多くの生徒が課題を抱えていることがわかった。「書く」学習と、さらに書いたものを発表することを苦手とする生徒が多くいた。2年次の単元「読書紹介」や単元「孔子の言葉に学ぶ」でも作文を書かせ、学級で発表し交流する場を持った。書かれた文章は、簡潔に書けず、文意がうまく伝わらなかつたり、主語・述語がねじれていたり、文末表現も統一されていなかったりしていた。この1年間の取り組みでかなり改善されてきているが、主体的に生徒が「書く」学習に取り組み、お互いの考えを共有し、学び合う機会を持ち、それが深い学びにつながると考え、この単元を構想した。

2 研究の目的と方法

本研究は、世界の子供たちの写真をたくさんそろえ、その本の中から心に突き刺さった写真を一枚選び、世界の子供たちの実態を推測し、収集した情報から考えを深め、その子の日常に肉薄し、他人事ではなく、「自分ごと」としてその状況を考えさせるために、写真の中の子供になりきって、「なりきり作文」を書かせることにある。生徒は自分が選んだ一枚ということを書くことへの強いモチベーションになると考えた。そこから、主体的に学習に深く入り込み、自分の言葉で表現する力の育成を図りたいと考えた。

さらに、「なりきり作文」を報告し合い、共有することで、様々な世界の実態を知り、深く考えさせることをもう一つの目的にした。

写真の中の子供たちは、どの子も苦難の中を生活している。それを知るだけでも生徒には、十分な学びになる。だが、そこから、一歩進めて一枚の写真の背景を探らせる。写真には、国名と、往々にして写真家の短いコメントが書かれているだけである。生徒は、それだけを手掛かりに想像力を駆使する。そ

して、調べ学習を展開していく。図書とインターネットを使って、その子の置かれた状況をつかみ、その子の心情を理解しようとする。その子の立場になって、その子に迫り、なりきって「なりきり作文」を書く。そうすることで情報は、すべて生徒の生の言葉に書き換えられ、写真の中の子供の生の声になる。報告会では、それぞれの生徒の異なる1枚の写真をテレビで見せながら、級友の前でスピーチをし、世界が抱える子供の問題をお互いに共有してあげたらよいと思った。

3 研究内容

(1) 事前準備

写真を読み解くにあたり、関連の図書を市川市の図書貸借ネットワーク便で集めた。依頼した図書は、3種類ある。まず、ここ20年くらいに出された写真集、次に世界の子供たちの現状を記載している図書(絵本を含む)、最後に『世界国勢図絵』に代表される世界のデータが記載されている図書である。実際に集まった図書は150冊程度。これらの図書やインターネットを駆使させた。

また、ユニセフに連絡して、世界の子供たちの実情がまとめられた資料、DVDを頂いた。その中で生徒の心に響きそうな内容を選び、学習の最初にDVDを視聴し、関心を掻き立てられるようにした。

(2) 授業実践(全10時間)

①教師が選んだ一枚の写真と教師が作成した「なりきり作文」のモデル文を聴き、学習のイメージをつかませた。「なりきり作文」は今後の作文作成の手掛かりになると考え、プリントして配った。

教師作成の「なりきり作文」



僕はメキシコに住んでいるトニー。妹と一緒に路上生活を送っている。他の人たちは僕たちのことを「ストリートチルドレン」と呼ぶんだ。君たちは、その言

葉を知っているかい。「ストリートチルドレン」というのは、いろんな事情から親元を離れ、路上や駅のホームなど、生活するにはとても悪い環境の中で暮らさざるを得なくなった子供たちのことなんだ。日本には、そんな子どもはいないだろう。

僕の住んでいるメキシコはアメリカ合衆国の南にある国だよ。メキシコの首都メキシコシティは、最もストリートチルドレンが多い都市の一つと言われている。ユニセフの調査によると、メキシコシティのストリートチルドレンだけで二万人を超えると言われている。ソーシャルワーカーのおねえさんに教えてもらったんだ。ソーシャルワーカーのおねえさんは、ぼくたちのような子供の世話をしてくれる人だ。

現在、メキシコの人口は一億三十四万人で、乳児の死亡率は100人中23人、読み書きができる人は92パーセントいるときいたよ。年収は1947ドル、日本円にしたら、だいたい194,700円だから低所得なんだ。みんなわずかなお金で暮らしているんだ。日本はお金持ちの国と聞いたよ。

なぜ、こんな境遇に陥ったのか聞きたいかい。母さんは亡くなった。父さんに育てられた。でも、ぼくと妹は、父さんからの暴力から逃げてきたんだ。父さんは毎日のように酔っては、ぼくたちのことを殴った。怖かったし、悲しかった。頼れる親戚もいなかったから家を出るしかなかったんだ。もともと家は貧しくて、食べることに、困っていたんだよ。

ぼくの仲間の中には、シンナーやドラッグに手を染める子もいるよ。シンナーやドラッグをしていると、空腹や辛い現実を忘れられるって友達はいうんだ。でも、ぼくは怖いし、妹がいるからぼくがしっかりしないといけないと思うんだ。一日働いてどれくらい儲かるかって、その日によってちがうけれど、だいたい50円くらいだね。それでも、一日なんとか食べていける。一日一食の日もあるし、雨の日は、演奏ができないから収入がない日もあるよ。ぼくにはアコーディオンがあるからまだいい方だよ。ほかの子どもは、ゴミの山をあさったり、靴磨きをする子もいるよ。物乞いをしたり、スリをする子もいる。もっとひどい子は、「トラフィッカー」と呼ばれる人身売買をする人に売りに出されちゃうんだ。君たち日本人にとっては、「トラフィッカー」は極悪非道な犯罪者にしかみえないだろうけれど、ここでは「こどもをお金に換えてくれる人」と頼られたりもしているんだ。夜もここで寝泊まりす

るんだ。怖くないかって、大丈夫だよ。もう、慣れたからね。

ぼくの夢はここから抜け出して、学校に通うことだ。学校に通えれば字だって習うことができる。計算することもできるようになる。そうしたら、もっといい仕事に就けるかもしれないだろう。君たち日本の子どもたちは、学校へほとんどの子が通っていると聞いた。ほんとかな。なんだか信じられない話だよ。その夢はまだまだ遠いけれど、この間、話しかけてくれたソーシャルワーカーのお姉さんが、この暮らしから抜け出す方法を考えてくれるといっていた。うまくいくといいけど、あまり期待はしていないよ。

② 学習の予定を示すプリントを配付し、主体的に学習が進められるようにした。

事前に「図表（識字率、乳児死亡率、等）を読めるか」と尋ねたところ、「なんとかできる」と肯定的な答えが多かったが、具体的な調べる書名は出てこなかった。そのため、事前に今回の調べ学習では、識字率や乳児死亡率、就学率、国民総所得（GNI）等を図表から読み取り、国情を知る必要があるので、『世界国勢図絵』の活用の仕方を教えておいた。

③ 多くの写真集から一枚の写真を選ぶ。写真から想像できることをワークシートに書き出す。写真に写っている子供の願いや思いを汲み取る。

④ 写真を見つめる中で、生まれてきた問いを、各自の課題として調べていった。「なりきり作文」を書くのに必要なことを図書やインターネットで調べる。スピーチをするときは、書画カメラを使ってテレビに画像を映し、国の位置・地勢はスマホのアプリ「グーグルアース」を使い、テレビ画面に映しだすことにした。

⑤ 生徒は図書館とパソコン室を行ったり来たりしながら、各自が黙々と主体的に学習に取り組んでいた。わからないことがあると質問に来るが、お互いに教えあったりして、どんどん情報を蓄積していた。それらをもとに、さらに写真を読み解いていく。生徒はなりきる人物の心情を想像しながら、情報を取捨選択して文章を書いていく。

中には情報収集が苦手な生徒もいるので、個別に教師と学校司書が支援をしながら学習を進めていった。どうしたら写真の子供の気持ちをうまく表現できるのか、試行錯誤の生徒が目についた。

生徒には「聞き手は写真だけが頼りだから、耳で聞いてわからない表現はやめよう。難しい語句や言い回しもやめよう。同音意義語には注意しよう。」ということも伝えた。2年次の学習の失敗、主語・述語のねじれ、文末表現の統一、文章は簡潔にすることも注意させた。聴く人の立場になって表現しようとも伝えた。難しい情報をいかに簡単にしていくか生徒が苦労したところだろう。

⑥ 報告会を行った。プログラムには、各生徒がどの国のどんなタイトルかわかるようにしておいた。また、内容のキーワードも載せた。スピーチなので原稿を見ないで話せるように指導した。どの生徒のスピーチにも説得力があり、心を動かされる内容だった。聞き手である生徒は熱心に耳を傾け、発表後、発表者へのコメントを書いてもらい、本人に返した。

【なりきり作文例1】

「僕の壮絶な人生を、少し聞いてみないかい？」

僕は、エル・サドバドルに住んでいるカルロス。エル・サドバドルは北アメリカにあって、メキシコの近くって言ったらわかりやすいかな。医療は全く進んでいなくて、給料は日本の12分の1だって写真を撮ってくれたお兄さんが教えてくれた。貧しい国なんだ。まあ、すごく小さな国だから君たちはあまり知らないと思うけど、歳は君たちと同じくらいさ。え？家はどこにあるのかってそんな悪意のあるようなこと聞かなくてくれよ。ぼくは「みなしご」、つまり家族がいなくて家もない。僕はこのビリヤード場に住んでいるんだ。夜になると、ドアのそばの木箱の中に背中を丸めて眠るのさ。学校にも行けないし、お金も友達もいない。毎日このタンクトップ一枚で生活しているんだ。ところでなんで僕がビリヤード場に住んでいるかっていうと、ここが僕の職場だからだよ。ここで賭けに勝ってお金を稼ぐんだ。その写真を撮ったのは、大人と麻雀カードをやっている時だね。大人の人はこの写真を見て、笑ったよ。僕らしくないって周りの大人はいうんだよ。ビリヤードをやっている時の僕の目は鬼のような眼をしているっていわれたよ。それはそうだろう。僕はここでの稼ぎがすべてさ。大人は強いかって？そりゃ、強いよ。経験の差があるからね。一気に貧しくなる時だってあるよ。でも、こうしてやっていかないと僕は生きていけない。この写真を撮ったころのエル・サルバドルは政府とゲリラ軍の争いが激しくなっ

ていて、テロがよく起こるんだ。この前のテロで合わせて7万人の人が死んだって聞いた。それでも悲しんでいられないよ。こんな環境はもう慣れたしね。

もう一度写真を見てくれないか？どこか満足したような顔をしているだろう。僕は紛争下で死に近づいている子供に比べれば、まだ幸せなのかもしれないね。僕は、よくビリヤード場の大人に「血の気が多い」とか「暴力的」とか言われるけど、そりゃ、そうなるさ。だって、かけ事で僕の人生はきまってしまう。そんなの本気でやるしかないだろう？

なんで、こんな人生になっちゃったんだろうってつくづく思うよ。

もし、僕に親がいたら、家があったら、お金があったら、学校にいけたら、エル・サルバドルに生まれていなかったら…。忘れないでほしい。僕の話を知っておいてほしい。僕のような子供がいると。

写真『ともだち Dear Friend P.12』長倉洋海



【なりきり作文例2】

僕の名前はアリー。アフガニスタンにある避難民施設で暮らしているんだ。避難民施設っていうのは、空爆から逃れてきた人々をかくまってくれている施設だ。環境があまりよくないんだ。地べたに座るからとっても冷たくて体が冷えこむ。でも、なによりも、僕が願っているのは、お母さんと会うことなんだ。

僕が住んでいるアフガニスタンはちょうどアジア大陸の真ん中ぐらいの海に面していない場所にある。世界で2番目に避難民が多い国なんだって。昔から争いがありにも多いから、勉強する機会がなくて、大人でも読み書きできる人は100人のうち38人くらいしかないみたいだ。日本では読み書きできる人が100%と聞いた。驚きだな。乳幼児死亡率は100人中7人。君の国に比べたらかなり高いだろう。全て避難民施設であったおばさんに教えてもらった。この紛争が

終わったら、僕も字を勉強できるようになるといいな。

おばさんには僕の話もしたよ。僕のお父さんは紛争に巻き込まれて亡くなった。ここへはお母さんと来たよ。避難民施設に来たばかりの時にお母さんは「ここで待っていてね。すぐ戻るから。」とって少しのお金を僕にくれた。でも、お母さんは次の日になってもまた、次の日になっても、戻ってこなかった。施設で会ったおばさんに「あとどのくらいでお母さんは戻ってこれるのかな。」と聞いたら、おばあさんはどうしてか悲しそうな顔をした。

この紛争はいつまでも続くのかな。お母さんにも会いたい。止まない空爆によって命を落とした人もきっとたくさんいる。僕はどうしてアフガニスタンが攻撃されているのかわからないけれど、話し合っても解決できない問題なのかな。きっと僕よりも賢い大人たちが決めたことだけれど、こんなにも多くの人の命を奪う必要はなかったはずだ。僕は、戦争を起こす前に少し立ち止まって話し合っ譲り合えば、解決したと思う。

お腹もすいた。お家に帰りたい。悲しみがこみあげて頬に涙が流れていくよ。

【生徒の作文タイトルと対象国 例】

- ・15歳兵士、敵を殺すことはためらいはない。(アフガニスタン)
- ・銃弾で埋め尽くされた街(リベリア)
- ・悪魔の兵器地雷(カンボジア)
- ・がれきの中からの夢(パレスチナ自治政府、ガザ)
- ・悲しい過去を乗り越える(アンゴラ)
- ・僕が明日生きていますように(イエメン)
- ・差別と闘う子供たち(ペルー)

3 まとめ

① 生徒の変容

集めた情報をより効果的に表現するにはどうしたらよいかを模索しながらの学習になった。書いては何度も書き直し、教師にアドバイスを求める生徒が多かった。教師と話し合うと、自ら進んで全文を書き直す生徒が多かった。

一枚の写真に生徒たちは触発されて、その子のことを知ろうと情報収集に奮闘し、その子の立場になって生かせる情報を取捨選択し、意欲的に思考し、表現していった。その結果、どの生徒のスピーチも写真を撮

った人の思いを汲んであり、子供の思いをよく表現してあった。中学3年生になると国語の力にも大差があるが、それを感じさせない取り組みを見せた。作文を書くことやスピーチをすることは、生徒たちの苦手にするところであるが、どの生徒も主体的・意欲的であった。スピーチは原則聞き手の方を見て、暗記して行うのだが、中には原稿用紙3枚分を暗記し、写真の子が本当に語っているように心を込めてスピーチさせた生徒もいた。聴いている生徒の顔はいつにもまして緊張感に溢れ、世界の子供たちの置かれている現状に耳を傾けていた。

① 成果

生徒の調べた内容は多岐に渡り、様々な国の子供の実態が浮き彫りにされた。生徒のスピーチはまるでそこにその子がいるような心に沁みるスピーチだった。生徒のアンケートによると、「主体的に学習に取り組むことができたか？」の問いに「とてもできた」「できた」が97%になった。「情報を集め、納得のいく「なりきり作文」を書くことができましたか？」という問いには、91%の生徒が「はい」と答えた。また、「世界の子供たちの現状を以前より深く知ることができましたか？」という問いには100%の生徒が「はい」と答えていた。

どのようにして生徒は苦手な作文を克服したか。そのポイントは、一番心に残った写真を選んだところから始まっていたように思う。同じ写真を選ぶ生徒はおらず、生徒の心のありように沿った自分の心を表出するのに適切な写真を選んだところにあったのではないかと考える。主体的に始められたことで、写真から深く想像し、調べたことを的確に表現したと言える。

さらに、教師のモデル文も生徒の参考になったと考えている。苦手な作文を克服し、さらに不得手なスピーチを乗り越えた生徒たちは自信をつけたと思う。お互いのスピーチに、遙か彼方の国で起こっている事実を想起しながら、深く学び合う姿がそこにあった。記憶に残る深い学習ができたと考えている。主体的で、対話的な、深い学びを実現できた。それぞれの生徒の、いつもより長い「学習の振り返り」を読むと、多くの生徒が、この学習を通して考えが深まり、社会への視野が広がり、現在の自分の在り方やこれからの生き方に考えが及ぶようになっていた。

【生徒Aの振り返り】

今まで世界の子供たちに関して、貧しい生活をしているというぼんやりとした枠組みでしか知りませんでしたが、今回写真の中の子供になりきるためにその国の様々なことを調べているうちに、明日死んでしまうかもしれないという子供がたくさんいることを学びました。しかし、自分からこの分野について学ぼうとしなければ、世界の子供たちがこんなにも深刻な状況にいることさえ知らないままだったと思います。私は今回の学習を通して、私たちが勉強することは本当に大切だと感じました。なぜなら、勉強するまで知らない世界が広がっていることさえ知らないからです。

過酷な暮らしを強いられている子供たちがたくさんいる中で私たちは何一つ不自由のない暮らしを送ることができています。学校に通えること、命が脅かされる戦争が自国で起こっていないこと、食べることに困っていないことなど、私たちは日々の暮らしに感謝しなければいけないと思いました。しかし「恵まれている」というのは少し語弊があるように感じます。確かに世界の子供達に比べれば私たちは恵まれています、私たちの生活が世界の子供たちにとっても日常であってほしいと思うからです。

最後に、私は、貧しい家庭に生まれても貧しい国に生まれても、どちらの性別で生まれても、平等に教育が受けることができ、自分で幸せがつかみとれる世界を実現できたならどれだけ素晴らしいだろうと思いました。

② 課題

このようなレベルの高い調べ学習を個別で進めるには、個々の調べる力や表現力がある程度育っている必要がある。一人一人が、毎回の課題をしっかり捉え、主体的に学びに向かっていく必要がある。そのためには1,2年生で調べ学習を積み上げていく必要がある。1回きりの調べ学習では、実践できない単元である。そういう意味で3年間を見通した学習計画が必要とされる。また、個々で学習を進めるので、教師からの手引きが明確・適切で、生徒が一人でも進めやすくしておく必要がある。今回、多くの手引きを用意した。十分工夫して、手引きやワークシートを用意したつもりであったが、それでも、学級には一人では動けない生徒が1,2名いた。マンツーマンの指導で乗り切ったが、その生徒にかかりきりになると、他の生徒への支援が手薄になるので、そこが課題として残った。

学んだことを実生活に生かそうとする子供の育成を目指して

～2年間の理科の実践を通して～

船橋市立船橋小学校

教諭 棚橋 寛子

1 研究主題設定の理由

本校では、船橋市教育委員会中期研究指定を受け、平成29年度より理科を中心に研究を進めてきた。指定を受けてからの3年間は、見通しをもって観察、実験などを行い、その結果を基に考察し、妥当な考えを導き出すためには、どのような授業改善を行えばよいかを研究してきた。実験器具等の環境の整備、学習の見通しをもたせたり、考える時間を確保したりするなどの取り組みにより、科学的な思考力も育ってきた。しかし、平成30年度の全国学力・学習状況調査質問紙調査「理科の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」「理科の授業で学習したことは、生活に役立っている」の両項目においては全国平均を下回り、理科を学ぶことの意義や有用性の実感が低いことが明らかとなった。また、小学校学習指導要領解説（理科編）においても、理科改訂の要点において「今回の改訂は、小学校理科で育成を目指す資質・能力を育む観点から、自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、その結果を基に考察し、結論を導き出すなどの問題解決の活動を充実した。また、理科を学ぶことの意義や有用性の実感及び理科への関心を高める観点から、日常生活や社会との関連を重視する方向で検討した。」とあり、日常生活との関連の重視、理科を学ぶことの有用性が明記されている。以上の児童の実態、学習指導要領より令和2年度から主題を「学んだことを実生活に生かそうとする子供の育成」に改め、研究に取り組むこととした。

2 主題についての基本的な考え方

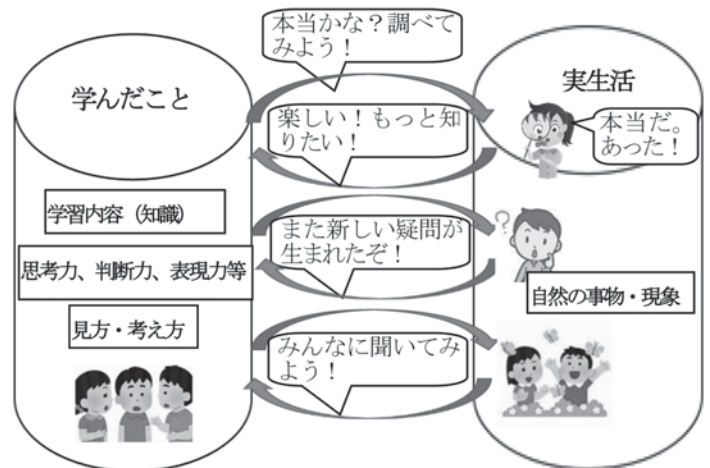
(1) 「学んだこと」とは

理科の見方・考え方を働かせ

- ①自然現象に対する基本的な概念や性質、規則性の理解、および、観察・実験等の基本的な技能
- ②各学年ごとの思考力、判断力、表現力等
- ③学んだことを自然の事物・現象や日常生活に当てはめてみようとする態度をさす。

(2) 「実生活に生かそうとする」とは

学習で学んで得た知識などを、日常生活に当てはめて考えようとすることと捉える。そうすることで、個別の知識として終わることなく深い理解につながると考える。また、自然の事物・現象をどのような視点で捉えるかという見方、比較、関係付け、条件制御、多面的に考えることなどといった考え方を働かせることで、新たな問題を見出すことができ、深い学びへとつながると考える。



例えば、A君は学校の授業でモンシロチョウを観察して、足が6本ということが分かり、そのような仲間が昆虫であることを知る。(学習で得た知識)

学校帰りに、その辺の虫を探して、「これ、見たこともない虫だけど、足が6本だから昆虫だ!」と思う。(日常生活に当てはめようとする姿)

他の虫もどうなのかな。共通しているのかなという「共通性・多様性」という見方を働かせて、もつと虫を探すとカマキリに出会う。しかし、カマキリには足が4本しかないので見える。「カマキリは昆虫か?この鎌は足と言っていいのか?」という問いが生まれる。(新たな問い)

そこで、次の授業で新たな問い「カマキリは昆虫か?鎌は足と言っていいのか?」をクラスで提起し、皆で鎌は足なのか否かを考える。(新たな問いの問題解決)

学習を実生活に生かし、実生活を学習に生かす、このような往還ができれば、「学ぶって楽しい」と学習の楽しさを知り、児童は笑顔で主体的に学習に取り組むのではないかと考え、本主題を設定した。

3 研究仮説とその手立て

仮説

既習の内容や日常生活での経験を関係付けて考える場を設定すれば、学んだことを実生活に生かそうとする子供が育成されるだろう。

既習の学習内容に立ち返ったり、日常生活と関係付けたりして根拠を明確に予想し、自然の事物・現象をどのような視点で捉えるかという見方、比較、関係付け、条件制御、多面的に考えることなどといった考え方を働かせ、問題解決に臨む。また、学んだことを知識・技能の習得で終わることなく、日常生活と関係付けることで、深い学びにつながると思われる。

〔具体的手立て〕

- ・既習の学習内容の掲示など、既習の学習内容に立ち返る場の設定、また既習の内容や日常生活と関係付けて考えたことを評価する。
- ・身近な物を用いた実験や実生活との関連を想起できるような実験の場を用意する。(図1)



図1 物の温まり方(段ボールを家に見立てて実験)

- ・予想・実験・考察の流れで日常生活との関連を考える場を設ける。(図2)

1. 学習問題 今日学習することを つかもう。	2. 予想 今までに学習したことや 経験から考えよう。 ※「～だろう、可能性～だから。」	3. 実験 実験の方法を考えて、 安全に気をつけながら 正しく実験しよう。	3. 観察 何に注目するかを 決めて、よく見よう。
4. 結果 わかりやすく、正確に 記録しよう。 ※言葉・図・表・グラフ	5. 考察 結果からわかること を考えよう。考えを 友達と共有しよう。	6. まとめ 学習問題にかえて、 まとめよう。	7. 感想 めどうき、新たな生活に 生かせることを 書こう。

図2 「学習の進め方」の掲示物(3～6年生共通)

※船橋市立高根東小学校の先行研究を参照し作成

- ・掲示板やロイロノートを利用し、学び合いの場を設ける。(図3)

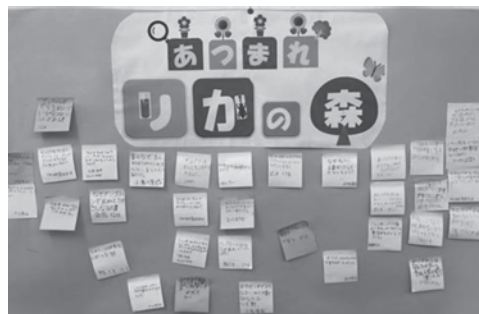


図3 学年掲示板

- ・学んだことを日常生活と関係付けることで生まれた新たな問いや発見を授業内だけでなく、学校掲示板などを用い、共有する。(図4・5)



図4 学校生き物コーナー



図5 生き物をかえす様子

4 実践

(1) 第3学年「音を出して調べよう」

事前の実態調査では、たいこで大きな音を出したいとき、「たいこを強くたたく」と答えた児童が70%を超えた。これは、以前学習した風やゴムのはたらきにおいて習得した量的・関係的見方が生きていると考えられる。一方、止めたいときはどうすればよいかという問いに対しては、「たたかない」とした児童が65%を超え最も多かった。音という身近な題材であるが、多くの児童は、音はたたくと出て、たたかなければ出ないと考え、音が出る現象を音が出ている物に着目していないことが分かった。そこで、本単元では、体感することで音についての理解を深めることができるようにする。音と物の震え方との関係を捉える道具は、児童が扱いやすい打楽器や、振動が観察しやすい手作り楽器などを用意した。音の伝わり方を捉える活動では、鉄棒や糸電話などを使った。このように児童に身

近で親しみやすい物を使うことで主体的に問題解決しようとする態度を育成することができると考えた。

① 既習事項や日常生活と関係付けながら問題解決をする場

・日常生活を想起させる場

学んでいることと、日常生活が関係付いていることを常に意識していけるように、児童の日常生活にある音を提示していく。体育館の手すりなど、児童に身近な物を通し、問題提示した。

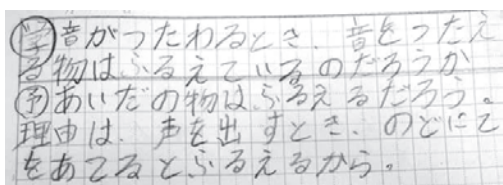


図6 音が伝わる時、音を伝える物はふるえているかを、日常生活と関連付けて、自分の声とのどのふるえで予想を立てている児童のノート

・既習事項の掲示

本単元では、既習の「風やゴムで動かそう」で学んだ「量的・関係的」な見方を働かせ、比較しながら問題を見だし、予想できることを目指している。そこで、「風やゴムで動かそう」で学んだ掲示などを、いつでも見られるようにしておいた。

② 学んだことを日常生活と関係付ける場

・まとめの後に、「おどろき、新たな疑問、生活に生かせること」を書く。(図2「学習の進め方」の掲示物参考)

このような活動を通し、虫の音が大きいときは、羽が大きく動いている、などの日常生活と関連付けた気づきが生まれた。また、学ぶ前は、「机を強くたたくと、大きな音が出る。」という体験を語っていた児童が、「机を強くたたくと、震え方が大きくなるから、音が大きくなるんだ。」という、学んだことと日常生活を関係付けた気づきの声も上がった。

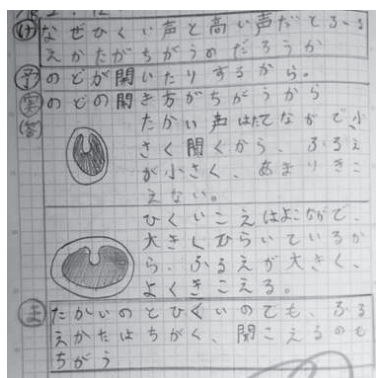


図7 授業後、低い音と高い音の震え方が違うことに着目し、新たな疑問として、自主学習で実験に取り組んだ児童の自主学習ノート

(2) 第4学年「物のあたたまり方」

実態調査では、お湯を沸かしたり、フライパンを火で温めたりした経験がある児童は6割、電気ストーブで部屋を温めたことがある児童は4割と日常においての体験が乏しいことがわかった。また、経験のある児童でも、近年では技術が進歩し、家庭ではボタン一つですぐにお湯が沸いたり、部屋全体が温かくなったりするような仕組みが出来上がったりしているため、児童が基本的な物の温まり方を体験する機会が減ってきている。生活経験が少なく、基本的な知識がないため、水、空気、金属の温まり方の事前正答率は順に12%、36%、7%と大変低かった。そこで、本単元では、経験の乏しい児童のために予想を考える上でのヒントとなる導入実験を行う。目の前で起こる現象を見て、問題を解決したいという児童の主体的に学ぶ意欲の喚起につながると考える。

① 既習事項や日常生活と関係付けながら問題解決をする場

・掲示物の活用

生活経験を基に根拠を考えられるように、本単元の導入時に話し合う日常生活の中で物を温めたり、温かい物に触れたりした経験をまとめた掲示物を単元を通して活用した。第二次の空気の温まり方を調べる実験では、第一次で学んだ金属の温まり方についての掲示物を活用し、既習事項を基に根拠を明確にして予想を立てられるようにした。

・導入実験を行う

第一次ではお湯でスプーンを温める実験を行い、どのようにスプーンが温まっていったのか話し合う中でヒントを与えた。第二次では手の温かさで空気を温め、風車が回る実験を行い、手と風車の間の空気はどのような気流が起きているのか想像させた。



図8 第2次導入実験の様子

第三次では無色透明の水を温める実験を行い、温度差によって現れるシュリーレン現象を観察させ、水の温まり方を想像する一つのきっかけにした。

② 学んだことを日常生活と関係付ける場

・応用実験を行う

問題解決後には学んだことを生かして予想を立て

実験する応用実験を行った。金属の温まり方を学んだ第1次では、学びを生かしてコの字型の金属の板を温めたときの結果について考え、実験を行った。空気の温まり方を学んだ第2次では、温められた空気を水で冷やしたらどうなるかの応用実験、水の温まり方を学んだ第3次では、上から熱したときと下から温めたときの水の温まり方の応用実験を行った。応用実験の結果を予想する場面では、児童は既習の内容と関係付けて考えることができていた。応用実験は、既習内容を関係付けて考えるため、学習内容のより深い定着や、学習内容がしっかりと定着していない児童に対しても有効的であった。

・ICTの活用

学んだ内容に関わる実生活での事物・現象を写真に撮ってきて、ロイロノートで共有した。風呂の給湯口は浴槽の下についている画像や、床暖房、エアコンなどの画像から、なぜそのような場所についているのか、またどのように活用したら効率が良いのかを話し合った。このような活動を通し、児童は学びを日常生活に生かすことができた。

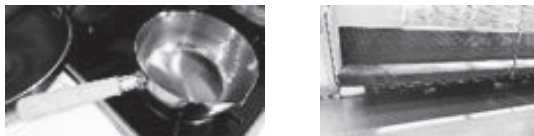


図9 児童が家で撮った画像



図10 撮ってきた画像を共有している様子

(2) 第6学年「てこのはたらき」

実態調査では、約3分の1の児童が「てこ」という言葉を知っているものの、実際にどのようなものか、文章や絵で表現することは難しいと感じる児童が多かった。また、同じ重さの物を棒にのせたときは、支点からの距離を等しくすればつり合うと理解できるが、重さが異なると、支点に近付ければよいのか、遠ざけたらよいのかが分からなくなる児童が多いことが分かった。日常生活において、天秤のように、つり合いを意識したことがあまりないことが伺えた。そこで本単元では、実物を動かして重さや動かしやすさを体感しながら考えたり、疑問をもったりする時間を大切にしていきたいと考えた。

① 既習事項や日常生活と関係付けながら問題解決をする場

・実物で疑問をなげかける

大人でも持ち上げられない実物のおもりを用意し、これを持ち上げるためにはどうしたらよいかという問題提起で授業を始めた。体感することで、主体的に取り組む児童の様子が見られた。また、持ち上げるために必要な道具を子供に考えさせたり、棒を持つ位置や支える位置を変えると手応えが違ってくることを全員に体感させたりすることで、てこについての興味や関心を強くもつことができ、学習意欲が高まった。



図11 問題解決に臨む児童たち

・ICTの活用

実験結果の共有にはタブレット端末を用いた。一番小さな力でおもりを持ち上げられたときの様子を写真に撮り、その写真を用いて発表させることで、「端っこの方」「長め」など、人によって感覚の違う曖昧な部分を比較しやすくなった。そうすることで、傾向や共通性を捉え、多面的に考えながら議論することができた。

② 学んだことを日常生活と関係付ける場

・体験コーナーの設置

道具箱の「はさみ」、家庭科室の「糸切りばさみ」「裁ちばさみ」「トング」「箸」「缶切り」、図工室の「くぎ抜き」「ペンチ」、保健室の「ピンセット」、事務室の「穴あけパンチ」「ホッチキス」、体育倉庫の「スコップ」などを用意した。実際に道具が目の前にあることで、道具を使いながら支点、力点、作用点がどこにあるのかを話し合ったり、作用する力の大きさを変えられると体感したりすることができた。そうすることで、学びを日常生活と関係付けて考えることができた。

・道具の「解説書」を作る

学びを生かし、身の回りのてこの原理を利用した道具の解説書を作成した。発表ではタブレット端末を使用し、「解説書」を共有することで、自分たちのグループでは取り上げなかった道具の効果と、てこの仕組みを関連付けて考えることができた。



図12 道具の「解説書」

全てのグループの発表が終わったら、位置関係が同じ道具に分類することで、てこは用途によって支点、力点、作用点の配置が異なっていることに気付くことができた。また、「解説書作り」を通して、身の回りにはてこの仕組みが利用されているものが多いとあり、そのおかげで生活が便利になっていることに気付き、理科を学ぶ意義や有用性を実感することができた。

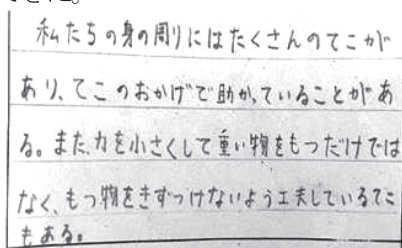


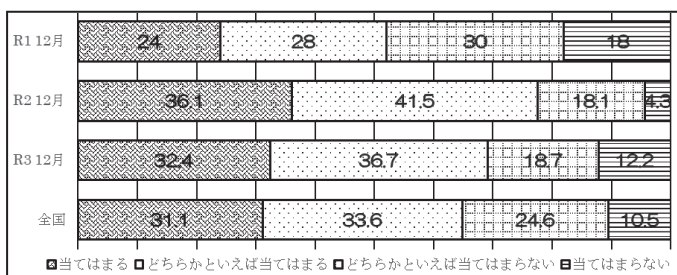
図13 児童の記述

5 成果と課題

(1) 意識調査より

質問紙を基に成果と課題を分析する。なお、各項目は「全国学力・学習状況調査 質問紙調査」と同じ内容のため、平成30年度の調査結果を併せて表記する。

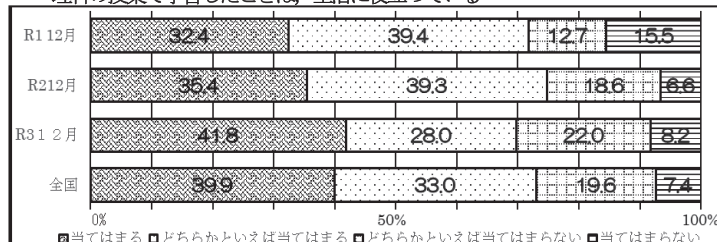
理科の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える



本主題の設定に至った令和元年の調査に比べると、児童が主題に即し学んだことを日常生活と関係付けて考えようとしている姿が見られる。特に主題を変え取り組んだ令和2年の伸びは飛躍的である。令和3年の

意識調査での減少は、問題解決後に生活との関係を考える場を設けることにより、かえって児童に生活に生かすことを考えるのは難しいという印象を与えてしまったのではないかと考える。生活との関係を考える場を単元後だけにするなど、実態に合わせた取り組みの検討が今後の課題である。

理科の授業で学習したことは、生活に役立っている



本主題を設定し、取り組んでから「当てはまる」の数値が伸びていることが分かる。これは、児童が授業を通し、理科の有用感を実感していることの現れと捉える。一方、特に高学年において「どちらかといえば当てはまらない」に転じた児童が多く見られた。学んだことがいったいどのように生かされているのかと真剣に考える機会が多いほど、必ずしも生活と直結しているとは言いがたいのではないかと、という思考が児童に起こったと考えられる。また、高学年の単元ほど生活との関わりと離れていくものが多く、生活と関係付けて考えられなかった児童が増えてしまったのではないだろうか。今後の課題として取り組んでいきたい。

(2) 千葉県標準学力検査より

平成30年度の学力調査では、全学年理科の平均点は全国平均を4点あまり下回っていたが、令和3年度は平均を下回る学年はなくなった。また、前年令和2年度からは、10点近く伸びをみせる学年もあり、本主題が知識定着においても有効に働いていることの現れと捉える。また、理学力調査では、理科だけの伸びに留まらず、国語では、平成30年度全国平均よりマイナス2.2点だった平均点が令和3年度にはプラス13.8点に、算数では、プラス6.6点だった平均点がプラス20.6点までとなった。このことから、理科の学習における有用感が他教科への意欲にも繋がっており、結果として出ていると捉える。

【参考文献】

鳴川哲也(2020).『理科の授業を形づくるもの』株式会社東洋館出版社
文部科学省(2018).『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 理科編』開隆堂

ICTを活用した勤務時間の縮減

～作業の自動化とデータの有効活用を通して～

成田市立三里塚小学校

校長 村田 正志

I はじめに

教員の多忙化解消のため、働き方改革が叫ばれるようになって久しい。学校現場には、行事の精選、勤務時間の縮減等が求められ、それぞれの学校が実現に向けて努力している。

本校においては、感染防止という思わぬ方向からの影響で、行事の更なる見直しが進んだ。しかし、勤務時間の縮減についてはなかなか思うようには達成できていないのが現状である。

指導要領の改訂や、時代や地域のニーズに沿った新たな対応など、学校が取り組まなければならない業務は年々増加する一方である。「学校における働き方改革推進プラン」では、スクラップ&ビルドの大切さが示されているが、学校が独自にスクラップできる内容には限りがあり、総業務量を大きく削減するには至っておらず、一朝一夕に勤務時間を縮減することは不可能であると感じている。

千葉県が毎年実施している「教職員の働き方改革に係る意識調査」の結果からは、教員は「部活動」「分掌等事務」「採点・成績処理」「会議等」を、管理職は「調査・報告対応」「校務整理」「地域・保護者対応」を負担に感じていることが読み取れる。(平成30年度以降の調査結果より) ここからは、事務処理に関する業務は、異なる立場においても大きな負担となっていることがわかる。

「学校における働き方改革推進プラン」取組11では、「校務の効率化のため、ICTの積極的な活用を推進する。」とあり、市教育委員会も新たな機器やソフトウェアを積極的に導入している。中でも、校務支援ソフトに関しては、導入当初こそ、ICTを苦手と感じている職員を中心に負担感が増加したものの、日々の操作を繰り返すうちに、成績処理や在籍・出欠席管理において処理時間が短縮され、業務に対する負担感が大幅に減少した。

しかし、行政から求められる、毎月の出欠席や体力診断結果の統計など、決まった様式の報告物には対応

できず、校務支援ソフトのデータを見ながら報告物を作成するという状況が発生することとなった。すでに一度入力したデータを報告物作成のために再度入力するといった二度手間を省くことができれば、事務処理に係る負担感を減少させることができるのではないかと、その処理が複数回に及ぶのであれば勤務時間の縮減にもつながるのではないかと考えるに至った。

同時に、コンピュータがもつ利便性のうち、既存データの活用や作業の自動化という特性を事務処理に積極的に取り入れていく方法とその効果について検証を進めるため本主題を設定した。

II 研究の内容

1 各種報告物の精査

まず初めに、校内・校外を問わず、提出が求められる報告物のうち、処理に時間を要するものや毎年・毎月同じような処理を繰り返し行うものを洗い出した。

「処理に時間がかかる」「繰り返し行う」報告物	
教員	・成績処理 ・学級会計 ・就学援助会計 ・出欠席統計 ・督励簿処理 ・長欠報告 ・運動能力調査 ・健康調査 ・アレルギー調査 ・コンクール等出品名簿作成 等
管理職	・出退勤統計 ・年度始め提出書類 ・人事評価 ・人事異動関係書類 ・所有免許調査 ・長期休業動態とりまとめ 等

現在、これら報告物のほとんどはコンピュータを用いて処理しており、過去データの書式を活用するなど、一定程度の効率化が図られている。

教員に関する業務のうち、成績処理や出欠席の記録、運動能力統計などは、導入されている校務支援システムによって処理が可能となり、導入前と比べ格段に時間短縮が図られている。

更に、この校務支援システムには児童名簿機能が含まれており、学級名簿や緊急連絡先一覧の作成が可能

である。統一された書式で校内一斉に作成できることも大きなメリットとなっている。

管理職の業務では、毎月の出退勤統計に時間がかかるという意見を多く聞く。職員一人一人の出退勤時間は、タイムレコーダーを用いることで日々の打刻を正確に記録することができている。使用しているタイムレコーダーの機種にもよるが、打刻をコンピュータ用に出力することも可能であり、表計算ソフトを用いることで、統計処理が行いやすくなっている。

このように、コンピュータを活用することで、以前より格段に作業効率が上がっているはずなのだが、負担感は減少していない。

報告物の精査を通して、以下の理由が考えられた。

- ・報告様式が決まっており、校務支援システムやタイムレコーダー等のデータをそのまま利用することができない。(出欠席統計、長欠調査、運動能力統計、出品名簿、出退勤統計 等)
- ・年度ごとの報告で、一人一人の年齢や経験年数等、毎年変化するデータの更新が必要になる。(年度始め提出書類、人事異動関係書類 等)
- ・一人一人の個票を回収し、一つのデータに集約しなければならぬ。(人事評価、人事異動関係書類、所有免許調査、長期休業動態一覧 等)
- ・一つのデータから、一人一人の個票を作成しなければならない。(学級会計、就学援助会計 等)
- ・分掌担当者が作成した既存データを流用するなどの共有化が図れていない。

上記の通り、コンピュータを用いてデータを取得することができても、完成形に至る過程で時間のかかる手動の操作が必要になるため、負担感は減少しない。この操作を自動化し、ボタン一つで処理が完成するようになれば、負担感を一挙に減少させることができるだろうとの考えに至り、既存データと報告書の橋渡しをする仕組みやソフトウェアを作成することとした。

2 既存データの内容精査

ソフトウェア作成にあたり、既存データに含まれる

項目と、報告物が必要とする項目との共通性を精査した。

校務支援システム

- ・児童氏名、生年月日、学年、学級、性別、住所、保護者氏名、連絡先 等の基本となるデータ、成績、出欠席の記録、運動能力調査記録(出欠席統計、督促簿、長欠調査、運動能力調査 等に流用可能)

タイムレコーダー

- ・年月日、その日の出勤時刻と退勤時刻(出退勤統計)

それぞれのシステムが提供するデータには、報告物が要求する項目が含まれているため、橋渡しさえできれば、流用することが十分可能であることがわかる。

反面、学級会計や就学援助会計、年度始め提出書類、人事評価、人事異動関係書類、長期休業動態一覧等に対応する既存データは存在しない。そのため、これらの報告物を自動化するためには、今まで行ってきた方法を見直し、「集約しやすい個票」「個票にしやすい一覧データ」を設計するところから作成する必要がある。

3 ソフトウェアの作成

(1) 出欠席統計・督促簿・長欠調査

改善前

- ・月末に処理し、その月の欠席日数と年度内の累計を記録(電卓・手書き)。
- ・連続して3日間の欠席した児童は、家庭との連絡内容を督促簿として提出(ワープロソフトを使用)。
- ・累計が15日を超えると準長欠扱いとし、担当が入力。(表計算ソフトを使用)
- ・担当者が提出様式にまとめ、教育委員会へ報告(表計算ソフトを使用)。

改善点

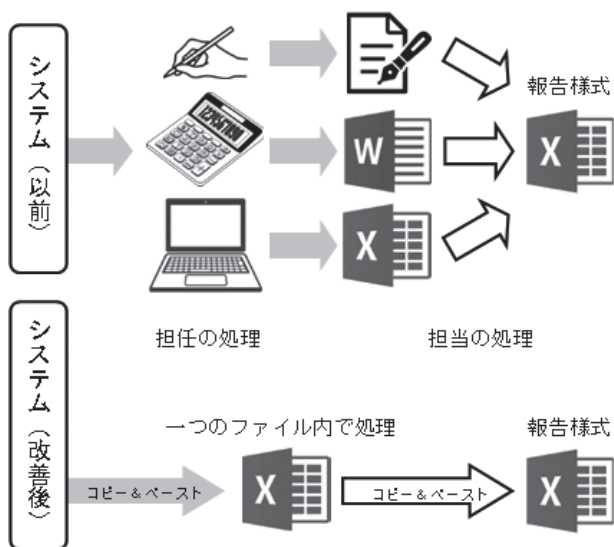
- ・扱うデータは出欠席日数で同じものなのに、別々の処理を行う必要がある。
- ・手書きでは転記ミスや計算ミスが頻繁に発生し、担当者がすべてのデータを見直す必要がある。

工夫

- ・3つの報告書類を表計算ソフトウェアの一つのファイル内で処理を完結させる。
- ・基本となる出欠席データは、校務支援システムのデータをそのまま貼り付けることで出欠席統計が自動

的に完成させる。

- ・出欠統計の中から自動的に長欠報告対象者が抽出させる。
- ・担任は対象者の詳細な記録を別シートに入力する。
- ・督促簿も別シートに配置されており、年間を通してこのシートに記録を積み重ねる。



効果

- ・校務支援システム内のデータ（出席簿と同じもの）をそのまま活用しているため、見直しの必要がなくなった。
- ・長欠報告は、担任が入力したデータを担当者が報告様式に張り付けるだけで完成させることができるようになった。
- ・毎月作成し、その都度数が増えていた報告ファイルが、年間を通して一つのファイルで済むようになった。

課題

- ・コピー&ペーストの作業も自動化できると、より一層の時間短縮につなげることができる。

(2) 千葉県体力・運動能力調査

改善前

- ・担任が校務支援システムに記録を入力すれば、集計が完了。
- ・県への報告書は、担当が校務支援システムのデータを参照し、該当者を抽出、様式に沿って報告書を作成。
- ・本市では全児童に記録証を発行しており、ワープロソフトの差し込み印刷機能を活用するなど、各校独

自に対応。

改善点

- ・校務支援システムのデータ様式をそのまま県への報告書には流用できず、手作業を必要とする。
- ・差し込み印刷は操作が複雑になりがちで、誰もが簡単に操作できるものではない。

工夫

- ・ボタン操作で校務支援システムから得られるデータを流用し、県への報告様式に沿ったデータに変換させる。
- ・表計算ソフトを活用し、ボタン操作のみで差し込み印刷と同等の処理を実行させる。

効果

- ・学級数が増えても、運動能力章対象者の抽出は短時間で済むようになった。
- ・報告様式に沿った並べ替え等も自動的に行えるためミスがなくなると同時に時間短縮につながった。
- ・操作がわかりやすくなり、誰もが自力で記録証を発行できるようになった。

(3) 出退勤統計

改善前

- ・職員一人一人が、タイムレコーダーを用いて出勤時刻と退勤時刻を記録（打刻）。
- ・タイムレコーダーはコンピュータで扱うことのできる形式のデータを出力。
- ・出力データを用いて統計処理を行い、報告様式を作成。

改善点

- ・レコーダーから得られるCSV形式のデータは、「カード番号」「年月日」「時刻」のみであり、そのままでは、誰のデータなのか、出勤時のものか退勤時のものかもわからない。
- ・個人や全体の統計（出勤時刻、退勤時刻、在校時間など）をとるためには表計算ソフトを用いて手動での計算が必要になる。

工夫

- ・統計ソフトウェアは、休憩時間を考慮する、管理職と教諭等を区別する、平日と休日を区別する、年休取得日の処理など、様々な状況に対応させる。
- ・タイムレコーダーは機種によって異なるデータ形式を出力するため、データ変換ソフトウェアと統計ソフトウェアを独立して作成し、汎用性を高める。

Idm	day	time	タイムレコーダーから出力される様々な形式			
110265EC28569560	2022/5/1	7:10				
110265EC28569561	2022/5/1	6:50				
110265EC28569560	2022/5/1	17:25	CardNo	day	start	end
			1	5/1	7:10	17:25
110265EC28569561	2022/5/1	18:01	2	5/1	6:50	18:01
Idm	day	start	end	様々な形式のデータを統計ソフト用に変換する。		
110265EC28569560	2022/5/1	7:10	17:25			
110265EC28569561	2022/5/1	6:50	18:01			

職員氏名	年月日	出勤時刻	退勤時刻
大竹 誠一	2022/5/1	2022/5/1 7:10	2022/5/1 17:25
安西 和男	2022/5/1	2022/5/1 6:50	2022/5/1 18:01

効果

- ・数時間かかっていた統計作業が数分で完了することとなり、大幅な時間短縮につなげることができた。
- ・データ変換ソフトに変更を加えることで様々なタイムレコーダーに対応できるため、市内の学校でも活用されている。

課題

- ・機能を求めたため、職員とタイムカードの紐付けを行ったり、休日を指定したりと設定が難しくなってしまった。
- ・特定のタイムレコーダーに対応させ、データの取り込みから集計までを自動化させること。

(4) 年度始め提出書類等

改善前

- ・4月当初、短期間のうちに様々な提出物を用意し報告しなければならない。

改善点

- ・短時間での処理となるため、ミスが発生しやすい。
- ・昨年度の職員一覧データを基に、転出入職員を処理するが、年齢や勤務年数、親族の所属など年度更新が必要となる項目を中心にミスが多くなりがちである。

工夫

- ・職員一覧の項目は、目標申告、人事評価、所有免許調査、人事異動などの処理に活用できるデータであり、積極的に活用する。
- ・職員一人一人の基本となるデータは、個票として職員個人が作成する。

- ・個票には、家族や所有免許、現校務分掌、過去の勤務校など、詳細なデータを入力する。
- ・年齢や経験年数などは自動計算とし、入力の手間を省くと同時にミスを減らす工夫を施す。
- ・管理職は、入力済みの個票を回収し、ワンクリックで一覧表へ集約を行う。
- ・個票には人事異動希望調査項目も設定されており、人事異動期には個票を個人に返送し、必要事項を入力する。
- ・その際、すでに入力済みの個人データはそのまま残り、異動希望先を選択するだけの作業とする。
- ・管理職は、再度個票を回収し、ワンクリックで異動補助簿等の必要書類を作成可能となる。

効果

- ・前述の作業をワンサイクルとし、毎年繰り返すことで、職員の作業時間も入力のミスも減らすことができた。
- ・特に、住所や氏名、生年月日等、毎回同じ内容の入力を求められることがなくなるため、職員からは好評を得ている。
- ・4月当初に、完璧な職員名簿一覧を作成しておくことで、その後の調査・報告のたびに職員から聞き取りを行う必要がなくなった。

(5) 児童データベース

改善前

- ・学級名簿や成績処理用の名簿などは、校務支援システムから出力可能。
- ・住所や保護者氏名など基本的な情報は全て校務支援システムに保存されている。

改善点

- ・校務支援システムに予め設定されている項目以外、例えば地区名やスクールバスコースなど学校独自の項目を簡単に追加することができない。
- ・校務支援システムでは、学級単位の操作が基本となり、全校児童の名簿を一度に処理することができない。

工夫

- ・校務支援システムから出力されるデータを用いて、児童データベースを作成する。
- ・成績に関するデータは校務支援システム、詳細な個人データはデータベースというように、活用目的を切り分けた。

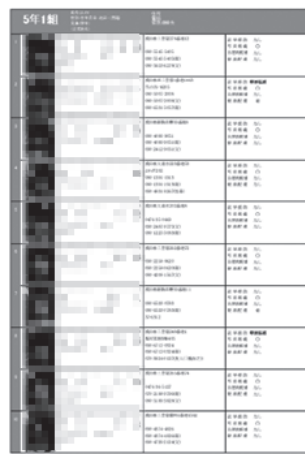
- ・写真データと個人データを紐づけし、顔写真入りの名簿や個票が作成できるようにする。
- ・データ項目を精査し、今まで担当が別々に保存していた項目を統合し、汎用性を高める。
- ・校内サーバに保存し、職員が同時に閲覧、編集ができるようにする。
- ・必要項目によって抽出したデータをワンクリックで表計算ソフト用の形式に出力できるようにする。



データベース画面



在籍者一覧



写真入り学級名簿

効果

- ・今まで、一人一人の顔写真を表計算ソフトに貼り付けて作成していた名簿が、ワンクリックで作成可能になった。
- ・名簿に顔写真が入ることで、生徒指導会議や個別支援会議等で職員間の情報共有がしやすくなった。
- ・地区児童会や委員会活動、クラブ活動といった全児童を対象とした名簿を簡単に作成できるようになった。
- ・今まで担任や担当ごとに作成し、別々に保存していた生徒指導や健康面等のデータを一元管理することで、データが蓄積され引継ぎ作業が確実にできるようになった。

課題

- ・住所や姓などの変更、年度更新など、細かなメンテナンスが必要となる。

- ・データベースに不具合が生じた際、ある程度専門的なスキルがないと対処できない。

Ⅲ まとめ

校務のICT化を進める中で、次の2点は常に課題となる。

- ①パスワード設定や、コピー禁止などのセキュリティ面の強化。
- ②第二水準漢字や外字の使用、外国籍児童の長い名前への対応。

対応としては、職員のセキュリティに対する意識の向上と、機器の進化、時にはある程度の妥協が必要になると考える。

校内で行われている事務処理の内容を精査し、共有できるデータを用いて効率化を図る取り組みは、時間短縮に向けて一定の成果を上げることができた。一つ一つの事務処理で短縮される時間は微々たるものであるが、時間以上に職員の負担感の減少という効果が大きかったと感じている。

今後、ソフトウェアやデータベースをWEB上で扱える形式に対応させ、職員が貸与されているタブレット端末で操作できるようになると、更なる利便性の向上が期待できる。

Ⅳ おわりに

ICTを用いて仕事の効率化を図る取り組みが始まって久しい。確かに様々な機器やソフトウェアが導入され、一見ICT化が進んだように見える。しかし、コンピュータが本来もつ、繰り返し処理の自動化、データの共有化など機能は活用できておらず、「ICTを用いた働き方改革」には至っていない。

コンピュータがもつ利便性を活用するためには、高度なスキルが要求されるのも事実であり、全ての職員がこのスキルを身に付けるのは不可能に近い。

今後、更なるICTを用いた働き方改革を推し進めるのであれば、行政側が報告を求める際に、様式だけを示すのではなく報告書作成を自動化するための手順やツールを同時に示して活用させるなどの取り組みが必要だと考える。

また、校内においては、「同じ内容の入力作業はしない」を合言葉に、データ共有化と再利用を心掛けることが事務処理時間の短縮につながっていくものと考えられる。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を実現させる授業の在り方

～算数科における従来型指導方法とICT活用型指導方法の一体化～

袖ヶ浦市立平岡小学校

教諭 高橋 朋彦

I 主題設定の理由

社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となつてきている。文部科学省は、そのような時代を生きる児童生徒の資質・能力の育成に向けて、ICTを最大限活用し、これまで以上に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を提言した。GIGA スクール構想の進展が加勢したことにより、ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を実現させる可能性は大きく高まった。

児童はこれまで、協働的な学びは経験しているものの、「自分に合った」「自分が必要とする」学びを選択して取り組む個別最適な学びの経験はほとんどない。また、教師が個別最適な学びについて学ぼうとしても、紹介されている実践の多くは、児童の実態に応じてAIが選出した問題を解くデジタルドリルに任せたものばかりで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた「主体的・対話的で深い学び」を実現させる実践の事例はまだ少ない。

そこで本研究では、これまでの算数科の指導で培われてきたこれまでの指導方法とICTを活用した指導方法を一体化させることで、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を実現させる指導法を開発・実践してその在り方に迫っていく。

II. 研究の目的と方法

1 研究の目的

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を実現させる算数の授業を開発・実践し、その有効性を検証する。

2 研究の方法

- ①個別最適化と協働的な学びの一体的な充実に関する基礎的理論研究
- ②児童の実態調査
- ③算数授業における個別最適化と協働的な学びの一体的な充実を図る授業展開の開発と実践
- ④実践の分析・考察

III. 研究の内容

1 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する基礎的理論研究

(1) 個別最適な学び

文部科学省(2021)は、令和3年度の答申で「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理している。本研究では、従来型の算数の指導方法にICTを取り入れて活用し、児童が主体的に学習に取り組めるよう、一人ひとりの特性や興味・関心に応じた多様な方法で個別最適な学びの実現を目指す。

○指導の個別化

指導の個別化は、単元を通した目標や1単位時間の目標を学級全体で共有する。全ての児童が目標を達成することを目指し、個々の児童の特性に応じて異なる学習方法等で学習を進めていく。学習方法として、一斉指導、少人数指導、個別支援、友達同士の学び、教科書を使った学び、タブレットを使った学び等が考えられる。多様な方法で学習に取り組みせ、自分に合った方法を見つけさせながら学習を進める。

○学習の個性化

学習の個性化は、児童の学習の理解度や特性、興味・関心等に応じて異なる目標を設定させ、学習を進める。単元の前半は、学習をじっくりと定着しながら進めたい子や先に進んで学びたい子など、個人の能力や希望を尊重させて学力の定着を目標に学習を進める。単元の後半は、児童の興味・関心にもとづき、児童ごとに異なる目標を設定させて学習のまとめをさせ、学びを発展させることを目標として学習を進める。

(2) 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

協働的な学びは、従来の話し合い活動やICTを活用した話し合いを学習内容によって使い分けたり、一体化させたりすることで成果の上がる方法で取り組む。協働的な学びの内容として、個別最適な学びの成果を協働的な学びで共有し、さらにその成果を個別最適な学びへ還元し発展させていく。単元を通して、個別最適な学びと協働的な学びを繰り返すことで、一体的な充実を図り、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。

2 算数科における個別最適な学びと協働的な学びにおける授業開発

(1) 単元を通じた学習の進め方

ア 単元を通して身につける力を共有する

単元を通して身につける力を明確にし、学級全体で共有することで、個別最適な学びを通して確実に学力を形成させる。

イ 児童に応じた方法で学習を進めさせる

学習形態を工夫し、一斉指導、少人数指導、個別支援、友達同士の学び、教科書を使った学び、タブレットを使った学びなど、児童一人ひとりの特性や学習進度、学習到達度に応じ、学習を柔軟に進める。

ウ 児童の興味・関心に応じて異なる目標を持たせる

学力定着を確実にできるようにする子、日常とのつながりを見つける子、今後の学習とのつながりを調べる子など、子どもの興味・関心に応じて自ら適切に学習課題を設定し、取り組んでいけるようにする。

エ 家庭学習と連携を図る

児童の興味・関心・意欲に応じて、教科書やドリル、家庭のデジタル機器等の活用を通して学校から家庭へ学びの場を広げる。

オ それぞれの学びを共有する

個別最適な学びを通してそれぞれ学んだことについて、ICT を活用した協働的な学びを通して学習の共通理解をし、考えを広げたり深めたりする。

(2) 1 単位時間の授業の基本的な進め方

本研究で取り組む個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るため、図1に示した1 単位時間の授業を基本的な進め方とする。

従来の算数の授業の、自力解決を「指導の個別化」(②自分で取り組む)、練習問題を「学習の個性化」(⑤自分の学びをする)として位置づけた。

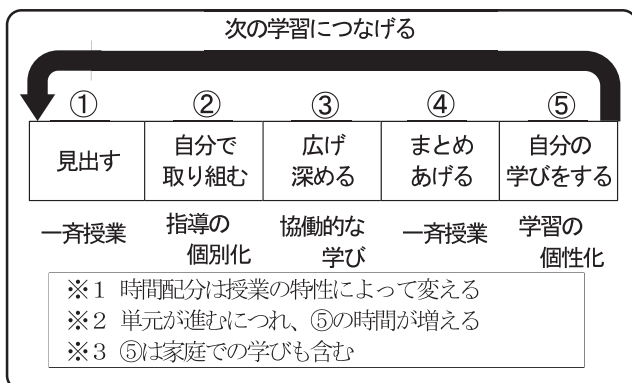


図1 1 単位時間の基本的な流れ

①見出す…一斉授業

児童の興味・関心をひきつけ、深い学びにつながる数学的な見方・考え方を既習事項として振り返り、本時の授業のめあてを共有する。

②自分で取り組む…指導の個別化

教師による一斉指導や個別支援、教科書やタブレットを使った個人学習、友達に解決方法を教えてもらうなど、児童の特性に合った学習方法で取り組ませる。

③広げ深める…協働的な学び

指導内容の特性に合わせて小黒板や ICT 機器などを使いわけ、本時のめあてに対する学びについて友達と伝え合い、考えを広げたり深めたりする。

④まとめあげる…一斉授業

本時のめあてに対する学びについて、学級全体で共通でまとめ、思考の過程を振り返る。

⑤自分の学びをする…学習の個性化

自分の興味関心にもとづき、学力の定着を図ったり、先に進んで学んだり、考えをまとめたり、学習内容の外側に学びを広げたりする。

学習内容に合わせて一斉授業で進めたり、児童の特性や興味関心にもとづいて個別最適な学びで進めたりするなど、柔軟に学習を進めていく。

IV. 実践対象

実施校：千葉県袖ヶ浦市立平岡小学校

学年：第5学年 31人 (男23人 女8人)

学習単元：算数「整数」

実施時期：2022年7月

V. 研究の実際

1 単元の導入

○ゴールの確認

指導の個別化で学力の定着を図るために、単元終了後に身につける力を、教科書

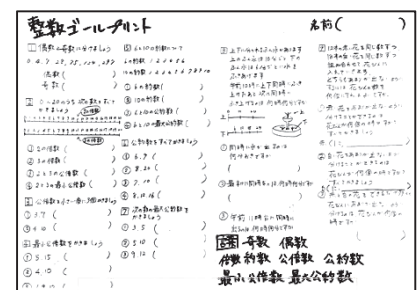


図2 ゴールプリント

やドリルを参考にして問題をつくり、ゴールプリントと名づけて配付した。このプリントをもとに、タブレットや教科書を使って予習する児童や、繰り返し練習して学習内容を確実に定着させようとする児童など、児童の特性に応じた進度で学習を進めることができた。

○探求活動の推奨（算数レポートづくり）

学習の個性化を図るために、自分の興味・関心にもとづいたレポートづくりを通してまとめ学習をさせる。算数科においてまとめ学習の経験が少ない児童がほとんどなので、次のような活動を紹介した。

- ・自分の学びのまとめ
- ・日常と整数との関連
- ・これから先の学習とのつながり など

レポートづくりを学習のゴールとすることで、単元の後半は学習で理解できたことや日常とのつながりなど、自分の興味・関心に応じてまとめ学習をすることができた。授業の時間だけでなく、家庭学習の時間もレポートづくりに取り組むことができた。

2 1 時間における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

(1) 指導の個別化

「見出す」の場面で、掲示物や板書の画像の記録を使って復習した後、本時の目標や解決の見通しを共通理解する。共通理解したことをもとに、「自分で取り組む」の時間で本時の目標を達成するために、自分で解決方法を選択し、学習に取り組む。

ア 自分で問題に取り組む

・見通しを参考に問題に取り組む

見通しの段階で学習の理解ができた児童は、従来の授業と同じように、自分の力で問題に取り組んだ。

・タブレットを使った個別学習

見通しの段階で、解決方法があいまいな児童は、教科書のQRコードを読み取り、動画による解説を見ながら学習を進める。動画の解説が見通しと結びついた児童は、解決方法を理解し、問題に取り組むことができた。

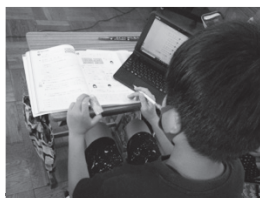


図3 タブレットを使った個別学習

・教科書を使った個別学習

教科書を使い、解説を見ながら学習を進める。手元であり、すぐに読むことができるので素早く学習したい子は教科書を活用していた。

・プリント・ドリルを使った個別学習

学習が早く終わってしまった子は、単元の最初に配ったプリントやドリルの問題に取り組んでいた。答え

の解説を見ながら繰り返し解くことで、学習の定着をさせながら取り組むことができた。

イ T1による少人数指導

見通しの段階で理解できなかった児童を対象に希望をとり、黒板の周りに集まり少人数で学習に取り組む。少人数であるので、子どもの理解に合わせて学習を進めることができた。

ウ T2の支援による個別支援

学習のつまずきやタブレット操作など、子どもの困り感にすぐに寄り添えるよう、T2が個別最適な学びの支援をしながら支援をする。

エ 友達による支援

自力解決の時間でじっくり考える時間を最初に確保した上で、自分の力だけで本時の学習に取り組むことが困難な児童においては、本時の課題を解決した友達から教えてもらうことができた。

(2) 協働的な学び

ア 従来型の話し合い活動

比較検討は、前面黒板や小黒板を使い、従来の方法で課題の解決方法を話し合った。どの方法が課題を解決するために適した方法か、自分に合った方法なのかを考えながら学習に参加できた。

イ ICTを使った協働学習

比較検討を聞いて考えたことやわかったことなどをチャット欄に上げて交流した。チャットに上がった考えをもとに、比較検討でわかりづらかったことをもう一度取り上げたり、わかったことを深掘りして話し合ったり、スピーディーに考えを交流することができた。



図4 チャットによる考えの交流

(3) 学習の個性化

学習の個性化は、主に「自分の学びをする」の時間で取り組む。単元の前半、児童の興味・関心は学力定着のための反復練習や、次の学習へのつながりを意識した予習へと寄せられた。学習の理解が進んだ後半に進むにつれて、発展的な学びへと変わっていった。

ア 学習の定着

紙ドリルやデジタルドリルを使って学習の定着を図

る。最初は紙ドリルを使い、紙ドリルの問題が終わった児童からデジタルドリルに取り組む。紙ドリルでは、授業で学習した内容を確認しながら取り組む。デジタルドリルは、スピーディーに多くの問題を出題してくれる。すぐに採点してくれるので、多くの問題を反復練習することができた。

イ 予習

紙ドリルを使った学習の後、先の学習に興味のある児童は教科書の解説動画を使って予習に取り組んでいた。学習内容をノートにまとめたり、未習の問題を解いたり、さまざまな形で学習に取り組むことができた。

ウ 興味・関心にもとづく学習のまとめ

単元の後半に進むにつれ、学力の定着から算数レポートに取り組む児童が増えた。算数レポートでは、自分の興味・関心に応じて次のものを参考にまとめていた。

- ・教科書
- ・ノート
- ・板書の画像
- ・教科書解説動画
- ・インターネット

どれか1つからだけを参考にするのではなく、組み合わせ合わせてレポートのまとめに取り組んでいる子がほとんどであった。特に、板書の記録画像と教科書やノートを合わせてまとめている子が多かった。自分の興味・関心や特性にもとづき、1枚のレポートにじっくりとまとめる児童がいたり、何枚ものレポートにまとめる児童がいたり、まとめ方はさまざまであった。

3 単元のまとめ

ア 算数レポート

児童は、A4の白紙を使いレポートづくりをする。文字や式、図やイラストを使い、次のようにまとめることができた。

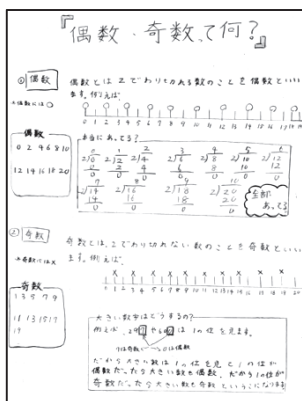


図5 考えのまとめ

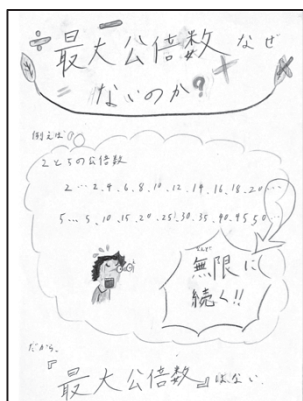


図6 最大公倍数がない理由

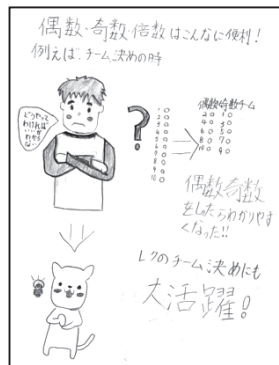


図7 日常での活用

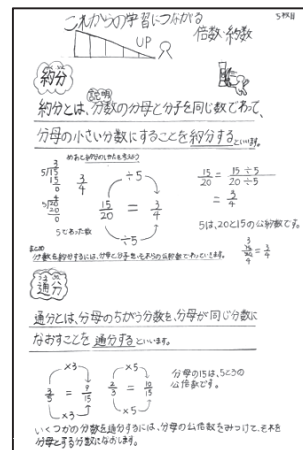


図8 これからの学習とのつながり

図5の児童は、偶数・奇数についてまとめている。特にレポートの1番下にある「1の位だけ見れば奇数・偶数を判断できる」というまとめは、授業中に友達の発表を聞いて関心が高まり、まとめていた。図6の児童は、最大公倍数という言葉が使われない理由について疑問を持ち、自分の興味にもとづいて調べることができた。図7の児童は、チーム分けをする際、偶数・奇数を使えばすぐに分けられることに気づき、考えをまとめることができた。図8の児童は、教科書を読み進める中で、整数の学習が分数の学習につながることに気づき、まとめることができた。

イ ICTを使った学びの共有

児童は、算数レポートづくりを通して、さまざまなまとめをすることができた。さまざまな考えについて共有するために、Benesse ミライシード「オクリンク」を使った。

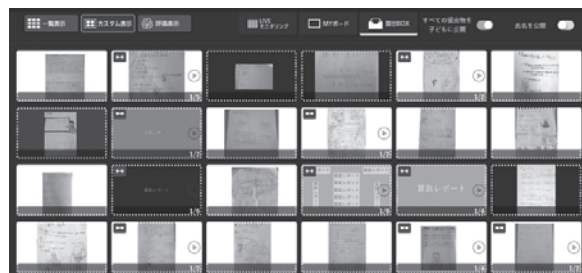


図9 「オクリンク」によるレポートの交流

31人中25人の児童が図5のような学習のまとめで、図6～8のような発展的な学びは少人数であった。オクリンクを使うことによって、発展的な学びを全ての児童に共有することができ、児童の考えを広げたり深めたりすることができた。

VI. 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 指導の個別化について

○どの学習が自分と合っていたか（単一回答）

- ・教師の一斉指導 … 12人
- ・教師の少人数指導 … 4人
- ・教師の個別支援 … 4人
- ・友達に教えてもらう … 3人
- ・教科書を読む … 3人
- ・教科書の動画解説 … 2人
- ・プリント、紙ドリル学習 … 1人
- ・デジタルドリル … 1人

指導の個別化を図ることで、児童は多様な学習の中から、その時に応じて自分にあった学習方法を選ぶことができた。学力別に数値を分析すると、学級の中で多くの人数を占める中位層は、教師の一斉指導が合っていると答え、次に人数の多い学力下位層は教師の少人数指導・個別支援が合っていると答えた。一番人数の少ない学力上位層は、デジタルドリルや動画の解説が合っていると答えた。

指導の個別化は、デジタルドリルに頼り切るのではなく、従来から大切にされている指導と合わせ、子どもの特性や学習内容に合わせて選択させていくことが大切だと考えられる。

(2) 学習の個性化について

○何を使ってレポートづくりをしたか（複数回答）

- ・黒板の記録画像 … 14人
- ・教科書 … 13人
- ・インターネットサイト … 5人
- ・デジタル教科書 … 2人
- ・自分のノート … 1人

学力の低・中位層は黒板の記録画像や教科書を使ってレポートづくりをした。黒板の画像は第1時の授業より記録し、クラウド上に保存しておくことで、いつでも振り返られるようにした。児童はこれまで、教科書を使って自主的に学ぶ機会が少なかったが、レポートづくりを通して教科書を使うよさを実感する児童が多かった。学力の上位層は、インターネットを利用して、奇数・偶数の活用や公約数の簡単な求め方など、教科書外の学びをしていた。活動は授業内だけでなく、休み時間や家庭学習の時間にも意欲的に取り組んでいた。他のアンケートより、レポートづくりが学習の理解につながったと感じている児童は23人であった。自分の興味・関心に応じた学習を充実させられたことができた。

(3) 協働的な学びについて

○友達のレポートを読んでできた学び（複数回答）

- ・自分にはない考えを知れた … 18人
- ・勉強内容をより理解できた … 15人

全ての児童が学びを広げたり深めたりできたと感じ、どちらかの答えを選択することができた。ICTを使った協働的な学びでは、授業外の学びをまとめたレポートに関心が寄せられ、考えを広げたり深めたりできた児童が多かった。ICTを活用し、個別最適な学びと協働的な学びを一体化させることで、個の学びを集団の学びとして広げ、充実させることができたからだと考える。

(4) 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

○児童の変容

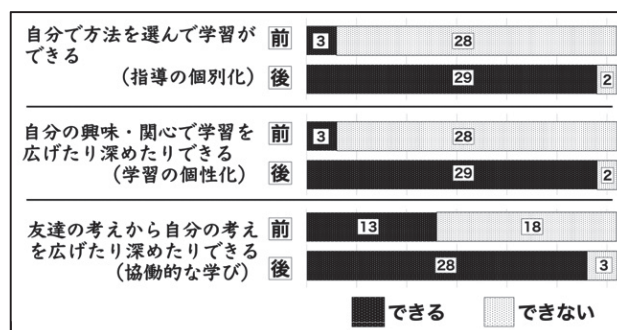


図10 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の意識

多くの児童が、「自分に合った」「自分が必要とする」学びができ、「友達の考えから自分の考えを広げたり深めたりできるようになった」と実感している。

個別最適な学びを通して、多様な学びから自分に合った方法で学習を進めさせることができた。また、ICTを活用した協働的な学びにより、それぞれの学びを共有し、考えを広げたり深めたりすることができた。ICTを活用することで、これまでの培われてきた従来型の指導方法をより発展させることができたと感じる。

2 今後の課題

これからのICTの進化により、さらなる活動の充実が考えられる。時代の進歩に合わせ、実践も進歩させていく必要がある。また、ICTを使った個別最適な学びと協働的な学びの評価方法も確立させる必要がある。

【参考文献】

- 文部科学省(2021)『個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料』
- 千葉県教育委員会(2021)『「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム』
- 加固希支男(2022)『個別最適な学びを実現する算数授業のつくり方』明治図書

獎 勵 賞

自立活動の視点を踏まえた指導・支援の在り方を探る

～さまざまな教育課程における実態把握とアセスメントの充実を目指した取組を通して～

千葉県立仁戸名特別支援学校

校長 相川 利江子

1 はじめに

本校は、「病気の治療」と「学校教育」を両立することができる、全県を対象とした病弱教育の特別支援学校である。小学部・中学部・高等部があり、それぞれの学部に、普通学級、重複学級、訪問学級がある。

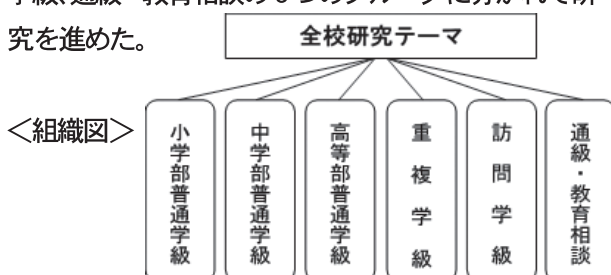
普通学級に在籍するのは、主に腎臓疾患・その他の疾患で千葉東病院に入院している児童生徒及び、自宅通学が許可されている児童生徒であり、重複学級には、脳性まひ等の重複障害で、やはり、千葉東病院に入院している児童生徒が在籍している。また、訪問学級には、千葉東病院以外の千葉市内の病院等に入院している児童生徒が在籍している。

その他に、病気の子供たちに対し、居住地の小中学校に在籍したまま、本校で指導を行う通級による指導があり、自立活動を中心に、障害の状態に応じて各教科の内容も取り扱って支援している。

本校の学校教育目標は、めざす児童生徒像として校訓「健康」「明朗」「協力」を掲げ、それを基に学校教育重点目標を病気や障害のある児童生徒の未来につながる「一人一人のニーズに応じた指導・支援の徹底」「基礎学力の定着」「ICT利活用による病弱教育の充実」「安心安全な学校づくりの推進」とした。そのうえで病弱教育特別支援学校としての専門性を高め、指導力の向上に努めるため本研究に取り組んだ。

2 研究組織

本校は、多様な教育課程を展開していることから図に示すように、全校研究テーマを基に小学部普通学級、中学部普通学級、高等部普通学級、重複学級、訪問学級、通級・教育相談の6つのグループに分かれて研究を進めた。



3 研究の経過

＜1年目＞

基盤作りの1年として、めざす児童生徒像を実現するために必要な見方や関わり方の基本となるべく各研究グループの実態に応じた実態把握及びアセスメントの充実をめざした取組に焦点を当てた。各研究グループにおける自立活動の指標や実態把握及びアセスメントの方策について整理し、次年度以降の取組に汎化できる形式を整えた。

＜2年目＞

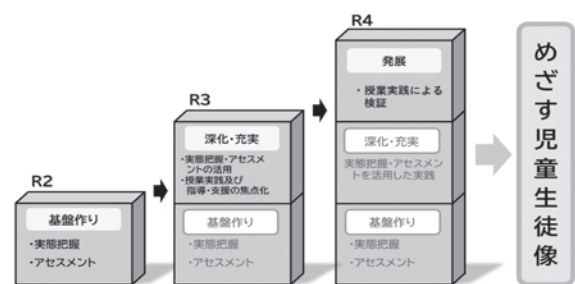
1年目の取組で培った実態把握及びアセスメントの方策を活用しながら、自立活動の視点を踏まえた授業実践及び指導・支援に焦点を当てた取組を進めた。実態把握及びアセスメントの方策については改良や修正を重ね、各研究グループの実態に応じた方策を確立することができた。また、自立活動の視点を踏まえた活動内容や教材・教具を工夫した授業実践、継続した取組を通して、指導・支援の充実が図られると同時に児童生徒の変容へとつながった。

＜3年目＞

計画最終年となる3年目は、本研究の更なる発展として、1年目で培った実態把握及びアセスメントの方策、2年目で実践検証した成果や課題を基に、授業実践を通して、各研究グループがめざす児童生徒像の実現に向けて、自立活動の視点を踏まえた指導・支援の在り方について明らかにする。

そして、本研究を通して今後の病弱教育の指導・支援に汎化できるよう取組の充実を図っていく。

3年間の研究の取組



4 研究の主な取組

それぞれの研究グループに分かれて、以下のように研究を進めた。

小学部普通学級	1年目	<ul style="list-style-type: none"> 腎臓疾患をもつ児童における自立活動での指導内容の整理 「自立活動の指導内容表」、「自立活動の指導内容及び児童の目標」の作成
	2年目	<ul style="list-style-type: none"> 「自立活動の指導内容表」を基に、指導目標を明らかにするためのチェックリストの作成、的確な実態把握の実施 実態把握に基づく指導内容や教材を工夫した自立活動の時間の授業づくり
	3年目	<ul style="list-style-type: none"> 「自立活動の指導内容表」の活用 自立活動の教材教具の作成、活用 自立活動の時間の授業実践及び自立活動の視点を踏まえた各教科 領域等の授業実践
中学部普通学級	1年目	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解や生徒理解を深めるためのコミュニケーションチェックシートの作成と交流集会等での活用
	2年目	<ul style="list-style-type: none"> アセスメントシートによる自己理解と傾向(実態)の把握を基にしたSSTとアサーショントレーニングの要素を取り入れたロールプレイングの実践
	3年目	<ul style="list-style-type: none"> 実態把握の共通理解の概念を確認 各教科等における自立活動の視点を踏まえた授業実践 授業時の行動観察と教員間の分析・相互評価
高等部普通学級	1年目	<ul style="list-style-type: none"> 多様な側面からの実態把握及びアセスメントや支援方法の構築
	2年目	<ul style="list-style-type: none"> 実態把握及びアセスメントや支援方法の汎化的活用をめざした取組 自立活動(全体活動)や支援大作戦等の4観点の焦点化
	3年目	<ul style="list-style-type: none"> 自立に必要な力アンケートの汎用的活用とフィードバックの検証 自立活動(全体活動)の授業実践 チーム支援体制の連携強化、年間テーマを設定しての支援大作戦の実施
重複学級	1年目	<ul style="list-style-type: none"> 個別の指導計画や個別の教育支援計画との関連性を踏まえた「目標達成シート」の作成及び改良
	2年目	<ul style="list-style-type: none"> 「目標達成シート」を活用した実態把握及びアセスメントを基に、教材教具の検討・作成 「目標達成シート」を活用した授業づくり、授業実践
	3年目	<ul style="list-style-type: none"> 「目標達成シート」を活用してのケース会議、検討会の実施 「目標達成シート」を活用し、支援方法を検討した授業実践
訪問学級	1年目	<ul style="list-style-type: none"> 訪問学級の児童生徒に必要な項目を整理し、自立活動の6区分を取り入れたアセスメント表の作成
	2年目	<ul style="list-style-type: none"> 学習指導案の作成や授業実践に活用できるようなアセスメント表への改良 必要な項目の選定や相互の関連付けによる、自立活動の視点が明確化した授業実践
	3年目	<ul style="list-style-type: none"> アセスメント表を活用した実態把握、目標設定や具体的な手立ての検討 自立活動の視点を踏まえた教科 領域等の授業づくり、授業実践
通級	1年目	<ul style="list-style-type: none"> フローシートを活用した実態把握を基に、自立活動のねらいを焦点化した個別の指導計画の作成及び活用

2年目	<ul style="list-style-type: none"> 新たな事例児童に対するフローシートを活用した実態把握を基に、自立活動のねらいを焦点化した個別の指導計画の作成及び授業実践と検証
3年目	<ul style="list-style-type: none"> 自立活動のねらいを焦点化したフローシートを活用しての実態把握、目標設定 フローシート、個別の指導計画を活用しての関係機関との連携

5 具体的な取組

〈実践例1〉小学部普通学級

① 指導内容表の作成

小学部普通学級では、年間を通して腎臓疾患の児童への指導が大半を占めることから、入院から、退院までの間でのどのようなタイミングでどのような指導を行ったらいいかを分かりやすく把握するために、研究1年目に腎臓疾患の児童における「健康の保持」と「心理的安定」に着目した自立活動の指導内容を時系列に沿って整理し、自立活動の指導内容表としてまとめた。

入院から退院までの指導内容を整理した上で、さらに、生活場面や項目ごとに指導内容を振り分け、内容ごとの児童の行動目標を整理した。「病棟のきまり」や「病気・腎臓疾患」の他に、「安静・運動」「服薬」「感染予防」「食事とおやつ」「衛生・清潔」等、生活場面や項目ごとに具体的な目標を整理したことで、児童の実態把握や指導計画の作成に役立てることができた。

② チェックリストを活用した実態把握

実態把握のためのチェックリストを担当や保護者等が記載し、複数の視点から児童の実態を捉え、自立活動の指導内容や目標を作成した。合わせて保護者には、願いについても記載をしていただくことで、本人の実態と合わせて、より個のニーズにも対応していけるようにした。また、保護者と実態やニーズ、めざす目標を共有することで、学校生活だけでなく、病棟生活においても行える一貫した指導へと繋がっていくと考える。

③ 指導内容の検討

個別の指導計画作成後、実際の指導場面や内容の検討を行う。病気とそれに関連する内容については、自立活動の指導内容表に基づいて入院後おおまかな指導目標の時期を設定している。実際には本人の実態や体調に合わせ、どの時期での実施が望ましいか、より具体的で実生活との結びつきを意識できるような展開はどのような方法か、また児童の発達段階と

③ 「教材カード」を活用した教材 教具の作成

実態把握の内容、引き出したい姿や願う姿、指導場面や支援方法、具体的な教材のイメージ等、ステップを踏んで教材・教具の作成が進められる「教材カード」の書式を作成した。この「教材カード」は、教材・教具の作成とともに授業実践を通しての改善にも繋がっていくように、PDCA サイクル、教材のイメージをもつところまでが計画の「P」、実際に作成、使用する「D」、授業で使用してみた結果や評価の「C」、そして、改善点や今後の課題、修正 改良について検討していく「A」というように、一連の流れに沿って教材を作成・活用、見直すことができる書式にした。そうすることで、より児童生徒が目標に向けて自分自身の力を発揮できる教材・教具作成ができるようになった。

教材・教具を作成する視点として、個々の保有する感覚を大切にしつつ、「外界への気づき・受容や表出につながるもの」「意思伝達手段につながるもの」を取り入れる。そして、「人間関係の形成」や「コミュニケーション」に関する個々の目標を反映させた教材・教具を使い、授業実践を行う。

④ 授業実践

授業づくりにおいては、「目標達成シート」を活用したケース会議等による実態把握及びアセスメントを行った上で、児童生徒の学習の大きな手がかりである教材・教具に着目し、「教材カード」を活用して、「人・物からの刺激の受け止め方」「人・物への関わり方」「自己の表出方法」について探ることができた。

授業づくりや授業実践を通して、教師(人)や教材・教具(物)との関わりから、「人や物からの刺激の受け止め方」「人や物への関わり方」「自己の表出方法」について、授業実践で引き出すことができた。その理由として、① 日々継続した指導・支援の中で、丁寧に育まれてきた教師と生徒の人間関係の構築とともに②教師側の事例生徒に対する実態を捉えた反応や表出の丁寧な読み取り、③ 事例生徒の実態や興味・関心に合わせた「教材・教具」を用いた関わり方の工夫が、適切な支援につながっていたからではないかと考える。

〈実践例3〉訪問学級

① アセスメント表の作成

実態把握・アセスメントとして、「アセスメント表」を作成し、自立活動の6区分を取り入れた実態把握から指導すべき課題の明確化、目標設定、目標達成に必要な項目の選定、指導場面と手立てに基づく各教科での具体的な取組の検討を経て、授業実践や学習指導案の作成につなげられるようにした。

② アセスメント表を用いた実態把握

アセスメント表を用いた実態把握を受け、指導すべき課題から、目標を設定し、そこから目標を達成するために必要な項目を選定し、さまざまな指導場面における手立てを検討する。目標達成に向けては、一つの授業や教科等での達成ではなく、複数の指導場面を関連付けながら指導にあたっていく。

③ 教材・教具、補助具の作成

体調を確認するためのボードや体調に応じた学習への取組を補助するような教材を、年齢や発達段階、児童生徒の実態に合わせ、必要に応じて作成した。授業の開始時等に体調確認として、このボードを用いて自分の体調や状態を見つめる時間を設けるようにしている。自分のことについて表現したり、伝えたりすることに課題があった生徒も、これをきっかけに少しずつ自分から体調、学習時の姿勢や学習方法を伝えられるようになればと考え活用した。

④ 授業実践

教科学習の学習指導案の指導上の留意点に、自立活動の視点を踏まえた手立てを盛り込み、区分と項目も記載するようにした。自立活動の視点を踏まえた手立てを記載することで、教科学習の中で漠然となりがちな自立活動の視点を明確にして授業に取り組むことができた。また、普段行っている取組や手立ての中にも、自立活動の視点として捉えることができるものが多くあることに気付くことができた。

学習指導案、
教材・教具、補助具の作成

小学部 6年 国語

国語	自立活動
・言葉遣いや言葉の伝わり方の違いを学習し、適切に使用する。 ・新出漢字を正確に覚えらるるよう、自主学習に取り組む。	・自分の体調を伝え、体調に応じた学習活動を相談して決める。 ・一人で学習を進めるために必要な支援について考え、実践する。

時配	学習内容及び児童の活動	指導上の留意点	教材等
7分	1 始めの挨拶をする。 ・体調に応じて、挨拶の方法を自分で選択する。 ・心と身体の健康状態を、言葉で伝える。	・体調に応じた挨拶や発表の方法を自己判断できるように、ポスターを提示する。心-(1) ・言葉で伝えることが難しいときは、体調伝言ボードを活用し、伝えやすい環境を整える。 心-(1)コ-(5)	体調と発表方法ポスター 体調伝言ボード
	2 漢字の学習に取り組む。 ・宿題を確認し、誤って覚えていた漢字はないか確認する。 ・前時の新出漢字4問のミニテストに取り組む。	・宿題は即時評価し、よくできているものは称賛し、誤りはすぐに直すようにする。心-(3) ・消り止め付の下敷きを準備し、軽く押さえるだけでプリントが動かないようにする。身-(5) ・既習漢字で悩んでいるときには「無限の面を使います」等の、他の顔面をヒントとして伝える。	印刷済み消り止め付下敷き

発表方法選択シート

目 に出 て 発表 (あいさつ) できます。

その場に出 発表 (あいさつ) できます。

席 下 へ 発表 (あいさつ) できます。

発表、代わりにお願いします。

体調伝言ボード

5
4
3
2
1

←

訪問学級では、入院中の病室や病院内にある教室での1対1の個別指導による学習が大半であるが、行事や学習内容等に応じて、異なる病棟や病院をオンラインで繋ぎ、集団での学習にも取り組んでいる。集団での授業後にアンケートを実施すると、次の授業への希望や要望が記載されることもあり、次時への主体的な姿が現われていると思われる。

〈実践例4〉 中学部普通学級

中学部普通学級では、より細やかな実態把握や生徒自身が自己評価できるような「コミュニケーションチェックシート」を作成し、課題や目標、自立活動の視点が明確となるような取組を実践している。特に自立活動の「コミュニケーション」の視点に焦点化した取組を、全体での交流集会を中心に進めた。

〈実践例5〉 高等部普通学級

実態把握やアセスメントをもとに、日々の教科や学習活動の場面のみならず、学校生活全般をとおした指導・支援ができるような取組を進めている。教科担任制等であることから、さまざまな視点や指導場面を通して、目標に沿った共通の支援テーマを設定し、指導・支援にあたっている。

〈実践例6〉 通級による指導

指導・支援の更なる充実をめざし、千葉県総合教育センターのフローシートを活用して、事例児童の自立活動のねらいを焦点化した個別の指導計画を立案し、授業実践、検証を行った。

フローシート上に個別の指導計画の目標も記入し、実態から単元までを一本化して目に見える形で表したことで指導・支援のあり方が明確となった。通級による指導の場合、指導内容や時間等に限りがあるため、フローシートで情報を分かりやすくひとまとめにし、迅速で適切な指導・支援を意識しながら取り組むことが有効であった。

5 成果

全校研究テーマを基に、各研究グループの実態を踏まえてグループ研究テーマ、年度ごとのサブテーマを設定し、取組の重点を明確化して実践を進めてきた。

1年目で培った実態把握及びアセスメントの方策、2年目で自立活動の視点を踏まえた教材作りや授業実

践で検証した成果や課題を基に、3年目は各研究グループがめざす児童生徒像の実現に向けたより効果的な指導・支援の発展をめざして実践を進め、各研究グループのめざす児童生徒像にせまっていけるよう取組の深化・充実に努めた。

この3年間の研究を通して以下のような成果が得られた。

- ① 各研究グループともに、1年目に培った実態把握及びアセスメントの方策について、必要な内容や項目の追加、修正、新書式の作成等の検討を繰り返し実施し、より充実した実態把握及びアセスメントが可能となった。
- ② 各学級に在籍する児童生徒の病状等に応じた実態把握やアセスメントの方策を活用することによって、課題や目標が明確になり、児童生徒の実態に応じた自立活動の視点を踏まえた指導内容や活動内容、教材・教具等を工夫した授業実践が可能となった。
- ③ 継続した取組や授業実践による検証を通して、より実態に応じた具体的な手立てに改良され、指導・支援の充実が図られると同時に児童生徒の変容へつながっていった。
- ④ 講師からの専門的な助言により、教師側の指導・支援の知識や専門性が広がり、共通理解が深まったことで、より効果的な実践に取り組むことができた。

6 まとめ

本校に在籍する児童生徒の病気や障害は多種多様であり、入院生活や治療による様々な制限内での学習指導、医療との連携、個々の入院期間に応じた見通しをもった指導など、多様なニーズに応じた指導・支援が求められている。このような環境下において、一人一人が抱える課題の改善・克服にあたっては、病弱教育における高度な専門性を身に付けることや児童生徒の実態やニーズに応じた様々な指導方法や支援方法を講じることが重要である。また同時に、新学習指導要領に示された育成すべき資質・能力の3つの柱に基づき、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善にも努めていくことが必要である。

この研究を通して、自立活動の視点を踏まえた指導・支援の在り方について明らかにし、今後の病弱教育の指導・支援に汎化していくことができるようさらに取組の充実を図っていきたい。

自分を大切にし、友達に思いやりのある行動がとれる児童の育成

～言葉を豊かにすることで、よりよい人間関係を育む～

酒々井町立酒々井小学校

校長 吉村 忠広

1 はじめに

(1) 人権のまち（酒々井町）

酒々井町は、人権のまちとして、「学校教育を通して、人権を尊重し、他を思いやる児童生徒を育成する。」という研究主題を設定し、小中学校共通で、人権が尊重される社会づくりに向けた行動がとれる児童生徒の育成を、さらには、自分を大切にし、他の人も大切にできる児童生徒の育成をめざしている。

その方策のひとつとして、「小中学校人権作文集」の作成がある。全児童生徒が人権に関する作文を書くことにより、身の回りの様々な人権に関する問題等に気づき、考え、人権意識を高めることをめざしている。これらの作品の中から、人権週間に合わせ、学級1点ずつの作品を収めた作文集を作成、配付し、掲載作品を読んだり感想を書いたりした後、家庭に持ち帰って家族と話し合うこととしている。

さらに、全児童生徒を対象として、全9項目の人権調査を実施し、これまでの人権教育の成果と課題を得られるようにしている。調査内容を同様とすることで経年変化も評価できるようにしている。

(2) 学校における人権教育の取組の視点

人権教育を進めるにあたっては、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができる」ということが、態度や行動にまで現れるようにすることが重要であるとされている。すなわち、他の人とともによりよく生きようとする態度や集団生活における規範等を尊重し義務や責任を果たす態度、具体的な人権問題に直面してそれを解決しようとする実践的な行動力などを、児童生徒が身に付けられるようにしようとするものである。

具体的には、各学校において、教育活動全体を通じて、例えば次のような力や技能などを総合的にバランスよく培うことが求められる。

1 他人の立場に立ってその人に必要なことやその人の考えや気持ちなどがわかるような想像力、共感的に理解する力

2 考えや気持ちを適切かつ豊かに表現し、また、的確に理解することができるような、伝え合い、わかり合うためのコミュニケーションの能力やそのための技能

3 自分の要求を一方向的に主張するのではなく建設的な手法により他の人との人間関係を調整する能力及び自他の要求を共に満たせる解決方法を見いだしてそれを実現させる能力やそのための技能

これらの力や技能を着実に培い、児童生徒の人権感覚を健全に育んでいくために、「学習活動づくり」や「人間関係づくり」と「環境づくり」とが一体となった、学校全体としての取組が望まれるところである。

(文部科学省HPより)

(3) 本校における課題

本校では、よりよい人間関係を育むべく異学年交流「ふれあい活動」を中心とした活動を続けてきた。そのため、同学年はもとより異学年とも仲よく遊ぶ姿が見られ、交友関係は良好に見える。しかし、新型コロナウイルス感染症による活動の制限もあったためか、個々を見てみると、友達を傷つける言葉を口にしたり、手が出てしまったりという場面も見受けられる。時には聞くに堪えない言葉が飛び交うこともある。

友達に思いやりのある行動がとれるようにするには、まず、自分自身を大切にしなければならぬ。昨年度12月の人権意識調査では、「学校のことを考えて行動していますか。」「友達と仲良くなるろうと、進んで声をかけていますか。」「あなたには良いところや、頑張っていることはありますか。」という質問に対して、全体的にはプラス評価が高くなっている。しかし、学年が上がるほど低いという傾向が見られた。

そこで、意図的、計画的に推進する異学年交流、全校児童を対象とした人権教育を通して更に自己有用感を高めることが重要であると考えた。自己有用感を育むためには、子どもたちに活躍の場があり、そこで自分の

役割を果たし、それを称賛されることが必要である。

「下級生のために役に立てた」「上級生にお世話になった」という明確な体験を通して、今以上に相手を思いやる言動がとれる児童を育成していくことが必要である。

さらに、前述した文部科学省が示している力や能力の中でも重要とされている「コミュニケーションの能力」に着目し、取り組んでいく必要を強く感じた。

今年度は、学校教育目標具現化のために、酒々井小「3つの『あ』の約束」（①あいさつができる、②ありがとうが言える、③あんぜんに気をつけて生活する）を合い言葉にして指導にあたっている。

①と②に加え、今年度は、③友達を「さん、くん」づけで呼んでいるか、④「よくないなあ」と感じる言葉を言わないようにしているか、という4つの項目で、4月に6年生にスモールアンケートを実施した。その結果、①と②は87.1%、③は19.4%、④は96.8%であった。④の結果から、少数ではあるが適切ではない言葉を使っているということ、児童自身が自覚していることがわかった。

そこで、よりよい人間関係を築くこと（視点1）、さらに児童の言葉を豊かにし、人権に反するようなよくない言葉は使わないという意識化をさらに高めていくこと（視点2）が、以下のような活動で身に付けることができるのか、検証すべく本研究を進めることとした。

2 実践と評価

(1) ふれあい活動（視点1より）

本校では、ふれあい活動として、①ふれあいタイム（縦割り活動）、②ふれあい給食（縦割り班での給食）、③ふれあい清掃（縦割り班での清掃）、④ふれあい種目（運動会での縦割り班種目）⑤全校遠足（縦割り班での活動）を行ってきた。コロナ禍の影響で、②ふれあい給食と④ふれあい種目を2年間中止せざるを得なかった。また、今年度も、ふれあいタイムの回数を減らし、感染拡大予防に努めながら行っている。なお、③ふれあい清掃については10月開始予定としている。

ア ふれあいタイム

<活動計画>

- i : 4月 グループ名発表 名刺交換
- ii : 5月 レクリエーション（以下「レク」と記載）
（班で決めた遊びを全員で行う）

iii : 6月 全校遠足 並び方 安全な歩き方の確認

iv : 7月 レク（予定） 休校のため中止

<活動の概要>

i : 今年度の最初のふれあいタイムでは、6年生が、1年生を迎えに行き、活動場所まで案内し、グループ名の発表と名刺交換を行った。



<写真1 : 第1回ふれあいタイムで名刺交換>

毎回のふれあいタイムでは、最後に「活動のふり返り」や「気づいたことや感じたこと」を発表・記載する場面を取り入れている。

以下、評価については、児童の記載内容を中心に評価することとする。

わたしは、〇〇グループになりました。友だちからめいしをもらったので、次からは、名前ですんでみたいです。
(4年女子)

ぼくは、〇〇さんからめいしをもらいました。やさしそうなおねえさんでした。このグループになれてよかったです。
(2年男子)

名刺交換をしたことで、グループの友だちの名前を知ることができた。児童の言葉から、名前を知ることが自分の所属意識を高めるとともに、人間関係の構築に役立つことができたのではないかと感じている。

ii : はじめてレクを行った第2回ふれあいタイムでは、各グループで考えたレクを実施した。

みんなと協力して、その場でもルールを変更したり、名前を覚えてもらえるようにくふうができたので、よかったなと思いました。
(6年女子)

どのグループも楽しそうに遊んでいただけではな

く、6年生が自分なりに役割を果たそうとしていたことが印象的であった。中には、じゃんけんで勝った子に拍手を送ったりして、盛り上げていたり、低学年と高学年でルールを替えたりした（高学年は片足のみで歩く、低学年は両足可）（ボールを投げるときには、高学年は利き手と逆の手で投げる等）グループもあった。相手の思いを受け入れて、みんなで楽しもうとする思いやりの気持ちが培われつつあることを強く感じた。



<写真2：第2回ふれあいタイムの様子>

iii：3回目は、全校遠足に向けて、並び順を決め、目的地までの安全な歩き方を確認し合った。

司会をやって、大きな声でみんなを動かしたりするのが大変だと思った。前回よりもうまく、大きな声が出たので、きちんと役目をはたすことができた。

(6年女子)

6年生は事前に、グループ内で上と下の学年でペアを組めるよう並び順を考えておき、児童自身の経験から、危険箇所等を踏まえて、目的地までの経路を説明した。低学年の安全を守ろうとする気持ちがうかがえる。自分を大切に思うと同時に、相手を思う気持ちが培われつつあることを感じた。

イ 全校遠足

今年度は、6月に全校遠足を行った。6年生が中心となって活動を計画し、コロナ感染予防に留意しながら、町内にある総合公園まで約2キロメートルの道のりを歩いた。そして、各グループごとにレクを実施した。地域のボランティアの方の協力を得て、フライングディスクとグラウンドゴルフを体験することができた。また、帰り道の途中で歩くのに疲れてしまった1年生をおんぶする6年生の姿も見られた。



<写真3：フライングディスクを体験するグループ>

帰り道に自分が話すことがなくて、ひまだなと思っていたら、5年生が、「しりとりしよう！」と言ってきて、4人でした。おかげでつかれたけど、楽しくすごすことができました。

(3年男子)

6年生のリーダーの〇〇さんが、ドッジボールでボールをゆずってくれたので、やさしいなと思いました。わたしも、6年生のリーダーさんみたいになりたいです。

(3年女子)



<写真4：1年生をおんぶする6年生>

くり返しグループ活動を行うことで、人間関係の高まりが見受けられた。自然に手助けできる6年生の成長を強く感じた。

(2) なかよし映画会 (視点1より)

本校では、毎年、人権について考えさせる映画を見て、全校児童が書いた感想を廊下に掲示している。低学年と高学年で分け、その時に考えさせたいテーマを選んでいる。今年度は、低学年が「ぼくのきもち きみのきもち」。体が入れ替わることで、相手の気持ちがわかる、というもの。高学年は「自分の胸に手を当てて」。ネットの掲示板に悪口を書かれたことについて、どのように考えるかを問う内容であった。

改めてスマホのおもしろさがわかりました。私もスマホを持っているので、書き込む前にはしっかりと考えたいと思いました。言葉には気をつけたいです。
(5年女子)

体が入れかわっておたがいの気持ちが変わって、仲直りできたのがよかったと思いました。おたがいの気持ちをかんがえることが大切なのだと思いました。
(2年女子)

特に高学年においては、現在、本校でも課題になっている SNS いじめについて取り上げた。自分にも起こりうるかもしれない事柄について、主体的に考えることができたと評価している。

(3) 友達のよいところを見つける (視点2より)

日常実践活動として、各教室と廊下に「ほのぼのの木」という掲示物を作成している。友達の見習いたいところや自分自身ががんばったことなどを書いた「ほのぼのの葉」を貼っていく。今年度最初のテーマは、「今年がんばりたいこと」。

ぼくが今年がんばることは、低学年の人にいろいろなことを教えることです。なぜなら教えると、みんなが「ありがとう」と言って、教えた子も自分もえがおになるからです。
(6年男子)

特別支援学級6年生の成長が感じられた「ほのぼのの葉」である。酒々井小「3つの『あ』の約束」を実践する内容で、全校集会で校長からも全校児童に紹介された。紹介された児童は、照れながらも笑顔を見せていた。教室では、担任に「校長先生にほめられちゃいました。」と得意げに話していた。

また、6月のテーマは、「1学期にうれしかったこと」。1年生にとっては、小学校生活最初の「ほのぼのの葉」であった。

ぼくが1がっきにがんばったことはあいさつです。ろうかであったせんせいにじぶんからあいさつをしました。
(1年男子)

わたしは、ぜんこうえんそくのドッジボールで3ねんせいの〇〇さんがたすけてくれたのでうれしかったです。
(1年女子)

このように、自分の日常をふり返って、うれしかったことやがんばったことが記載されていた。ここでも、全校遠足で上級生にやさしくされたことが書かれていた。相手のやさしさに気付く心の成長を感じた。

なお、「ほのぼのの木」は、各教室にコーナーを設置し、毎月「ほのぼのの葉」を積み重ねていく。そして毎月一回、お昼の校内放送で、代表の作品を放送委員が読み、全校に広める。また、各学級の帰りの会にも、「ほのぼの見つけ」のコーナーをつくり、友達のよかったところやがんばったことを発表するようにしている。

さらに、ふり返り等で書いた文章や「ほのぼのの葉」の中で、交流・共有したい内容のものを選んで、ふれあいだより「かすたねっ」とに掲載し、多くの児童が読めるよう配慮している。

これら一連の流れにより、一人一人のやさしさや思いやりがさらに広がり、多くの児童に届くことを期待してのことである。



<写真5：ほのぼの木>

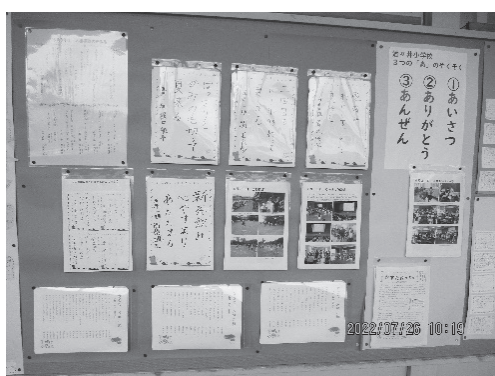


<写真6：かすたねっ (ふれあいだより)>

(4) 詩や俳句などの作品を共有する（視点2より）

上述した「ほのぼのの葉」の作成等、「書く」活動を充実させるためには、日ごろより文章を書くという経験を積み、言葉を豊かにしていく必要があると考える。

本校では、定期的に俳句を詠む活動を行っている。毎月の季題や例句をプリントにして全校に配付し、ドリルタイム等で自分なりの日常を綴っている。できあがった作品は、1枚のプリントにまとめて掲示したり、作者の字で清書したものを「ことばのまど」などに掲示したり、お昼の校内放送で紹介したりして共有している。秀逸句があれば、小学生新聞の俳句募集コーナーに投句もしている。



<写真7：ふれあいコーナー>

また、町全体での取組として、これも上述したが、小中学校人権作文集の作成がある。日ごろの学校生活で感じたことや、家族や友達との関わりなど、自分と関わる様々なことがらについて書くことにより、自らを振り返ることとなり、人権意識を高めることをねらっている。

さらに、俳句を詠むことが活かされている活動として、人権標語がある。全校児童が、標語を書くことをきっかけにして、身の回りの人権に気付いたり、人権尊重の重要性、必要性に気付けることを目標にしている。学級での生活やふれあい活動などで楽しかったことやうれしかったことを発表し合ったりしながらキーワード集めをしたうえで、

- やさしさが感じられるできごと
- 地域の人から見守られたこと
- ありがとうを言いたいこと
- お年寄りとのふれあい
- その他（登校班 いじめ防止 あいさつ 等）

などをテーマに、短い文にまとめる。俳句を詠むことに慣れているため、五七五で書く児童が多い。できた作品は、清書をして全校児童分、掲示する。また、代表の児

童の作品は、廊下等に一年間掲示するとともに、11月に行われるふれあい集会で読み上げる。下は、5・6年生の代表作品である。

5年 一人では できなことも 二人なら
友達と ケンカができる 存在に

6年 やさしきは みんなの心結ばれる
みんなでつなごう やさしさのバトン

3 実践をふり返って

(1) 視点1「よりよい人間関係を築くこと」より

人間関係の構築については、ふれあい活動が大変有効に働いたものと考えられる。毎回、同じメンバーで、しかも、通常のクラスよりも小さな20人程度のグループでの活動となるため、名刺交換も相まって、すぐに名前も覚え、人間関係が高まったものと考えられる。

各ふれあいグループには、6年生が4名ほど入ることとなる。その6年生の動きによって、グループの活動の充実度が変わるため、責任が大きい。自分のクラスでは、なかなか活躍できない児童も、ふれあいグループでは、中心となって活動することとなる。このことが自分の存在感である自己肯定感につながり、ひいては下級生から感謝されるという自己有用感につながったものと考えられる。

(2) 視点2「人権に反するようない言葉は使わない」より

スモールアンケートの結果（6年生）

4月 96.8% → 7月 100%

6年生に行ったスモールアンケートでは、「よくないなあ」と感じる言葉を言わないようにしているか、という項目で、4月は96.8%であったが、7月には100%になった。ふれあい活動を重ねていくことで、やさしさや思いやりに触れ、人間関係が高まり、さらに自分の思いを文章に綴ることにより、おのずと相手をほめる言葉となっていったのではないかと。相手をほめることは、自分を大切にすることにもつながるものと考えられる。

今回は、詩や俳句などを詠む活動を併せて実施してきた。語彙力の高まりこそが、やさしい言葉、思いやりの言葉につながると実感した。

人権教育には、体験活動の充実に加え、語彙力の向上も併せて取り組んでいくことが肝要であると強く感じた。

今日の「わかった！」を明日の「できる！」に

～思考過程の見えるノートづくりを通して学ぶ教師～

銚子市立双葉小学校

校長 宮内 教夫

1 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

I Tの普及、A Iの発達、グローバル化の加速等、社会の変化を見据え、新たな学びへと進化を目指し、学習指導要領は改訂された。「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」を総合的にとらえて構造化し、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を育成すべき資質、能力の3つの柱とし、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。

千葉県教育委員会は、令和3年度に「主体的・対話的で深い学び」の視点を加え、『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラムを改訂している。その中では、毎時間に行うのではないが、単元計画や授業計画に意図的・計画的に「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」場面を位置付けることが大切だと示されている。

(2) 本校の教育目標から

本校では、『確かな学力』『豊かな心』『健やかな体』をもつ双葉の子の育成～自ら学び、人から学び、体験して学ぶことで生きる力を育てる～を教育目標に掲げ、あらゆる場面で児童の主体性、対話性、体験性の尊重に努めている。

(3) 本校の実態

素直で真面目な児童が多く、授業中だけでなく家庭でも指示された課題には一生懸命に取り組んでいるが、自ら課題を見つけたり、進んで課題を見つけ、計画的に学習したりするなど、主体性の面では課題がある。

全国学力・学習状況調査や千葉県標準学力検査の結果からは、「思考・判断・表現等」（以下思考力に省略）が課題であり、知識・技能に比べ、思考力が課題である。

また、近年、教職員の若年齢に伴い、令和3年度の県学力検査では、主任の1組と若年の2組を比べると、総合得点の平均では約2点、思考力においては約4点の差があった。若年層は、どうしても授業力は発展途上であるが、日常の実務や研修、分掌に追われ、教材研究に十分な時間がとれないことが心

配される。

また、教員不足、教職員の未配置の深刻さは現場に大きな影を投げかけている。授業は一朝一夕に向上するものではないが、人的余裕のない背景は、熟練者から効果的な指導方法の伝授を一層困難にしている。

そこで、どの教科の基本ともなる『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラムを活用し、問題解決型の学習を実践していくことで、教師の授業の型を磨いていくことが重要であると考えた。

型に沿った授業は、児童も見通しをもち、安心して学習するよさがある。反面、型に囚われ過ぎた授業は、画一的となる懸念もあるので、4つの学習プロセスのどこに重点を置くかを意識しながら、児童の実態や学習のねらいに沿って児童の思考力を高めることを目標としていきたい。

また、ノート指導は古くて新しいテーマではあるが、児童の思考過程が見えるノートづくりを目指すことで、児童が自分の考え、つまずきや成長を振り返り、児童の姿から学ぶ教師の姿を実現させていきたいと思う。

日々の授業での「わかった！」の積み重ねのみが明日の授業の「できる！」につながっていくのだと思う。そのような考えのもと、日々の積み重ねを重視した実践である。

2 研究目標

検証授業と思考過程の見えるノートづくりを通して、算数科における児童の思考力・表現力を育てる効果的な指導方法を明らかにする。

3 研究の内容

資料を共有し教員相互に授業や児童のノートを見せ合うことを通して、指導・支援の仕方を検討していく。

- (1) 研究主題及び副題に関する基礎的理論研究
- (2) 児童の実態把握と課題の分析
- (3) 検証授業における抽出児と全体の様子から分析・考察及び研究のまとめの作成

4 研究仮説

仮説① 4つの学習プロセスを意図的・計画的に実施した数学的活動を行い、児童一人一人が自分の考えをノート等にかき表すことで、思考力を高めることができるだろう。

仮説② 児童がふきだしなどを用いて自分の考えをノートにかき表す学習活動を行うことで、教師は児童理解を深め、思考力を高める手立てを工夫することができ、教師の指導力を向上させることにつながるであろう。

5 双葉小の目指す授業像

- ・めあてと学び方が明確な授業
 - ・指導や支援の工夫がなされている授業
 - ・学ぶ楽しさや成就感を味わうことができる授業
- 校長メッセージ:「優れた授業には児童に学ぶ姿勢がある、自分の授業の型を備えてほしい。」

6 実践の概要

各学年の実態と単元のめあて、単位時間ごとの重点的な数学的活動（下線付）及び手立てについて以下に述べる。

(1) 2年「かさ」

①学級の実態

既習の「長さ」において、初めての単位に戸惑う児童が多く見られた。単位換算や正しい単位を選ぶ量感の理解が難しい様子であった。また、今後の「かけ算」の学習に向けて、単位量の考え方も身に付ける必要がある。

②単元のめあて

長さの学習を基に、体積を測定する活動を通して、普遍単位の必要性に気づき、目的に応じた単位で体積を的確に表現したり、比べたりすることができる。

③学び方

見いだす場面において、既習事項の「長さ」を想起させ、ふきだしに書かせた。調べる場面では、実際に体積を測定する活動を通して、任意単位の限界や普遍単位の必要に気付かせた。まとめあげる場面では、児童一人一人がどのように実感したかを見取ることができるように、振り返りも書かせた。

(2) 3年「わり算」

①児童の実態

既習の「かけ算のきまり」では、交換法則につい

てはよく理解していた。しかし、計算の誤りが見られたり、文章問題から立式する際に、被乗数と乗数を間違ったりするなど、理解が不十分な様子も見られた。全体的には自分の考えをかき表すことができる児童が多く、意欲的に取り組んでいる。

②単元のめあて

ブロック操作からノートにかき表す数学的活動を行い、包含除と等分除のちがいを明らかにすることで、除法の理解を深める。

③学び方

見いだす場面において、素材文からわかったこと、わからないことをなど、気づいたことをふきだしに書かせることで、既習事項を想起させ、演算決定に導いた。また、調べる場面において、ブロック操作をもとに、図にかき表す数学的活動を中心に繰り返した。図でかき表す際には、等分除と包含除の違いを表現できるように、丸で囲んだり、矢印を使ったりしている児童のノートを提示し、よさを共有した。

(3) 6年「分数のかけ算」

①児童の実態

既習の「文字と式」では、 x と y などを用いて式を一般的に表すよさを感じ、文字に数字を当てはめて求めることは全体的によくできていた。しかし、文字式から具体的な場面を作ったり、数量の関係を1つの文字式にまとめたりする活動には苦戦していた。5学年の「割合」でも、公式で求めようとするものの、もとにする量が読み取れず間違える児童も見られ、演算決定に課題が残った。また、積や商の見通しをもつことにも課題がある。

②単元のめあて

既習の整数や小数の計算を想起させ、分数の乗法についても、同じような関係や法則が成り立つことを理解する。また、その計算の仕方を図や式を用いてかき表すことで、多面的に考えたり、生活に活用したりすることができる。

③学び方

見いだす場面では、素材の数字を隠して提示することで、既習事項を想起させ、解決の見通しをもたせた。第4時「 $4 \div 5 \div 3$ の計算のしかたを説明しましょう」は、図で書き表しやすいうように、前時の素材文のように「3 d Lで、板を $4 \div 5$ m²ぬれるペンキがあります。このペンキ1 d Lでは、板を何m²

ぬれますか。」と提示した。第6時は、広げ深める場面で挙げたキーワードをもとに、各自でまとめた。

7 児童への手立てと変容

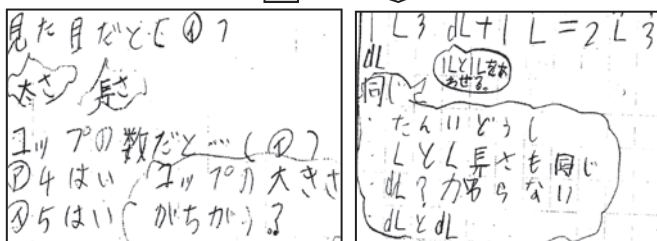
各学年毎に抽出児のノートから変容をたどり、指導の効果を考察した。思考力も身につけているがより高めたい児童をA、知識・技能はある程度身につけているが思考力を高めたい児童をB、個別支援の必要な児童をCとする。

(1) 2年「かさ」

2年A児

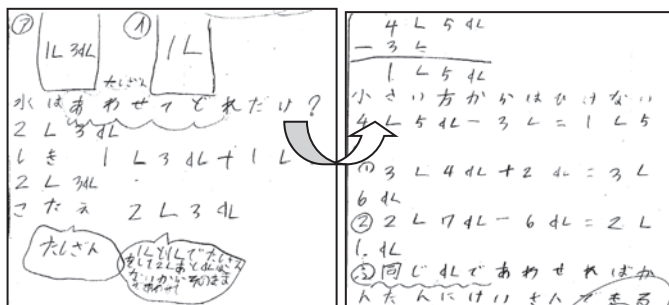
第1時では、大きさの異なるコップで水筒の量を比べた。見いだす場面で、掛図のコップを隠して提示したことで、同じ大きさのコップが必要だと気づき、ふきだしに書いていた。

その後も、まとめあげる場面で、学習したことの振り返りに、身の回りで同じくらいの物を問いかけたところ、「1 dLは歯みがきコップの半分」「1 mLは手の平にのせられる」など、生活と関連した記述があり、実感を伴った理解が進んだように感じられた。たし算でも、既習の「長さ」を想起したふきだしを書くことができた。



2年B児

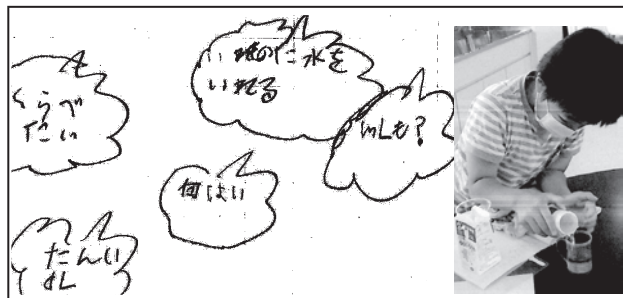
第1時での振り返りに、同じコップがなくても dL を使えば簡単に比べられると記述していた。たし算でも、素材に対してのふきだしは書いていなかったが、答えの予想を書き、見通しをもって取り組んでいた。調べる場面では、図をかき起こすことで、頭の中で L と dL に分けて計算していた。ひき算では、筆算で表し、同じ単位をそろえることに気づくことができた。その上



で、既習事項であるひき算の筆算に置き換えて計算する様子が見られ、考えの深まりが感じられた。

2年C児

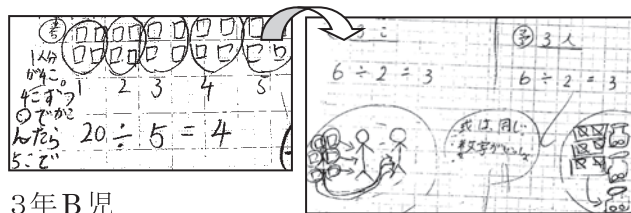
ふきだしも含めて、自分の考えをかき起こすことに戸惑っていた。長さの計算の際には、個別支援により長さの計算を想起させることで、単位をそろえて計算することができた。また、友達のノートを見たり、板書を写したりしたことで、単元の最後に行った3つの容器の体積を測定する活動では、5つのふきだしを書くことができた。振り返りには、「わかったことは、dLをつかえなかったときは、mLをつかえばよい。」と記述し、単位の理解が深まった。



(2) 3年「わり算」

3年A児

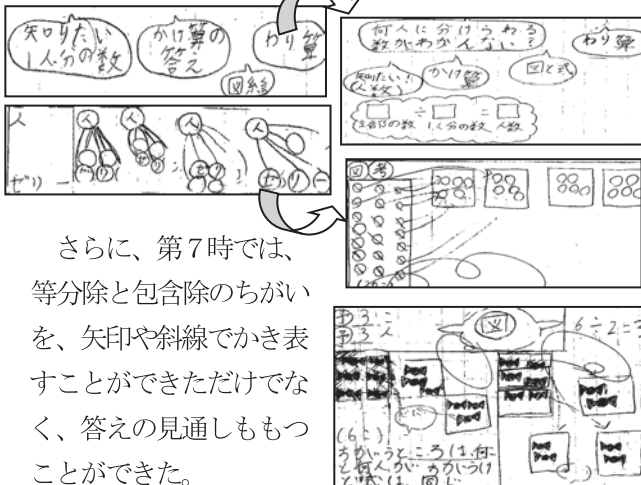
第1時から第3時までの「1人分の数をもとめる計算」では、ブロック操作を行い、それをもとにノートに図にかき表す活動を行った。第3時「ゼリーが20個あります。5人で同じ数ずつ分けると、1人分は何個になりますか。」では、すぐに4個ずつ分ける様子が見られた。「4個ずつでいいのかわい」問いかけると、ブロックでは、1個ずつ分ける様子が見られ、「トランプを配るみたい」というつぶやきも聞こえた。A児は、すぐに答えの見通しをもつことができることから、図にかき表す際には、4個ずつ囲んでいた。次時からの包含除につながるように、操作の過程がかき表せているのか投げかけた。等分除でも包含除でもブロック操作から図にかき表す活動を繰り返したことで、「等分除と包含除の共通点に着目し、わり算として統合する」際には、矢印を使ってかき分けることができた。



3年B児

B児は、計算は正しくできるが、文章問題などで戸惑う様子が見られる。そこで、見いだす場面の素

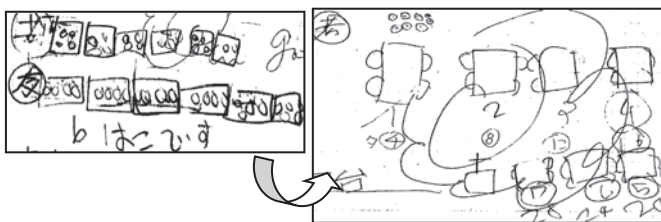
材文に対してのふきだしと、調べる場面の自分の考えに着目し、第3時の等分除（左）と、第6時の包含除（右）を比べる。第3時ではふきだしが4つ、第6時では6つに増えている。友達の手書きの考えや板書を写したことで、自分の考えを言葉や図に表すことができるようになってきた。



さらに、第7時では、等分除と包含除のちがいを、矢印や斜線でかき表すことができただけでなく、答えの見通しももつことができた。

3年C児

C児は、わり算の学習の際には、ブロック操作から式を書くだけで精一杯であった。除数のかけ算九九から答えを求めることはできたが、理解は十分ではなかった。そこで、あまりのあるわり算でも、ブロック操作を行い、それを図にかく活動を繰り返した。友達とノートを見せ合い、お互いにサインをすることで、楽しそうに共有した。その後、第6時「ケーキが23こあります。1箱に4このケーキを入れていきます。全部のケーキを入れるには、箱は何個あればよいでしょうか。」に対して、「わからない」というふきだしを書いていた。調べる場面では、ブロック操作で求め、ノートに丸を4個ずつ6箱に分ける図をかくことができた。第7時「タイヤを4個使って、おもちゃの車を作ります。タイヤは30個あります。車は何台作れますか。」では、4個ずつ丸をかき始めたが、戸惑っている様子が見られたので、「何が4つか」問うと、「車1台分のタイヤ」と答えたので、1台の車と4つのタイヤを簡単な図でかいた。（下図太枠内）すると、2台目、3台目とかき進め、答えを求めることができた。



(3) 6年「分数のかけ算」

6年A児

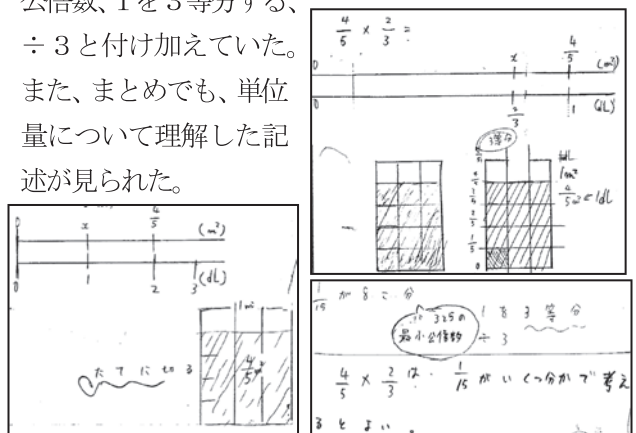
第4時では、まず3倍にしてから考えることで、 $1/15$ の単位量に気がついた。また、1Lますを $1/15$ にしていた友達の図をかき加え、ふきだしに「公倍数にすればよい?」と書いていた。

それを生かし、第6時では数直線から答えの見通しをもつとともに、かけ算を想起して $8/15$ を導き出した。友達の手書きの考えを聞きながら、 $8/15$ の枠と、「3と5の最小公倍数」いうふきだしを付け加えていた。

6年B児

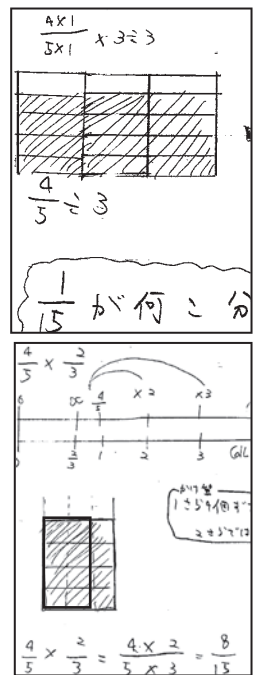
第4時では、数直線で答えの見通しをもとうとしていたが、戸惑っていたので、 3×5 ますで 1m^2 の図をかくように声をかけた。すぐに、 $4/5$ をぬり、3等分するために縦に区切っていた。友達の手書きの考えを聞いて、 $1/15$ が4個分というふきだしを付け加えていたが、単位については訂正できなかった。

第6時では、数直線で見通しをもち、 3×5 ますで 1m^2 の図をかいた。横に $1/5$ 、 $2/5$ と増えていくこと、縦に3等分することが、かき表されていた。広げ深める場面では、ペアで発表し合った後、全体で話し合った。分母、分子、 $1/15$ の8個分がキーワードとして挙げられた。その後、自分でかいた図の1ます分をさらにぬり、 $1/15$ が8個分、3と5の最小公倍数、1を3等分する、 $\div 3$ と付け加えていた。また、まとめでも、単位量について理解した記述が見られた。



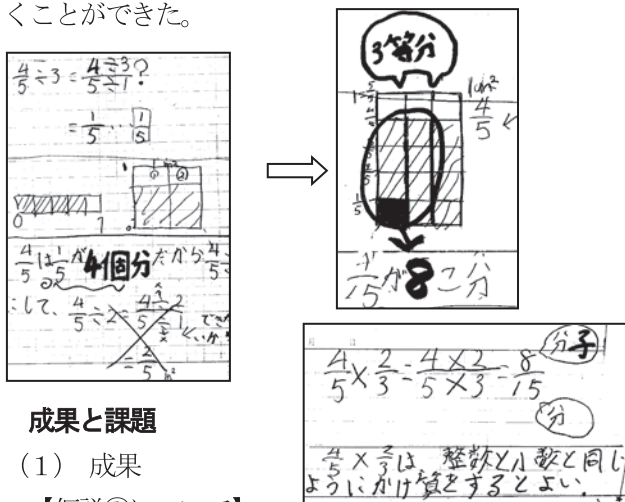
6年C児

第1時では、 $3/7 \times 2$ について、 $1/7$ を単位量として、たし算やかけ算で求めることができた。広げ



深める場面では、線分図を用いて $3/7 + 3/7$ をかき加えていた。しかし、第4時では、線分図や単位量、前時の $4/5 \div 2$ を想起したものの、戸惑っていたので、B時と同様の支援をした。

それを生かし、第6時では、 1 m^2 の図を縦に3等分し、単位量についてかき表すことができた。まとめでは、分子どうし、分母どうしをかければよいことに気づくことができた。



9 成果と課題

(1) 成果

【仮説①について】

- ・「見いだす」場面に重点を置いて、数字を隠したり、置き換えたりすることで既習事項を想起させることができた。また、それをふきだしに書くことで、答えや解法の見通しをもたせることができた。
- ・「調べる」場面では、Lますやブロックなどを用いた操作や、図などにかき表す活動に重点を置くことで、次時には短時間で操作したり、図などにかき表したりすることができた。前時の友達の考え方を取り入れる姿も見られ、よりよい方法を取り入れることができた。
- ・「まとめあげる」場面では、広げ深める場面に出てきたキーワードをもとに、それぞれがどのように理解したか見取ることができた。次時には、自分の考えや友達に発表する際にも、キーワードを意識して、書いたり、話したりする姿が見られた。
- ・4つのプロセスで学習を進めることで、児童は1時間の授業の見通しをもつことができ、ノートの手書き方も少しずつ身に付けることができた。
- ・実践モデルプログラムを活用し、数学的活動を意識した学習プロセスを重ねることで、児童の思考力が発展的に高まる様子を確認できた。

【仮説②について】

- ・ふきだしを活用することで、児童は率直に思いついたことをかくことができた。しだいにふきだし

の数も増えていき、既習事項を想起し、前時との違いに気づいた記述が見られた。児童の言葉から学習問題を作ることもでき、より主体的な学習につながった。

- ・見いだす場面以外でも、ふきだしを使って気づいたことを書いている様子が見られた。調べる場面でも「?」「合ってるかな」など、つまずきや戸惑い、不安などに共感し、支援に生かすことができた。思考過程をかき表す学び方として、身につけていることが実感できた。
- ・ブロック操作や式では理解しているようでも、適用問題でミスをしたり、宿題や翌日には忘れてしまったりする様子も見られた。図に書くことで理解を深め定着させることができ、広げ深める場面で、友達の考えをかくことで、次時に自分の考えとして取り入れる姿も見られた。
- ・ふきだしや図などを活用することで、児童の思考過程を可視化し、教師が児童の戸惑いやつまずきに気づき、より適切な支援をすることができた。
- ・思考過程の見えるノートづくりは、既習事項の想起や整理で役立つことが確認できた。

(2) 課題

- ・算数以外でも実践モデルプログラムを活用した授業づくりシートを活用し、授業を振り返り、指導力を向上させることが大切である。
- ・授業中での指導・支援には限界もあり、ふきだしの効果はあったが、授業後にノートを振り返ると、見落としもある。教師自身の振り返りのためにも、ノートは重要であり、児童の思考力向上と教師の指導力向上のために、児童の思考過程をかき表したノートの質を高めていきたい。
- ・本県の授業改善の「キーワード」は、「自分の言葉で学習のまとめを書く」である。毎時間の実施は難しいが、穴埋め式や選択式など、発達段階や実態に応じて、計画的に取り入れていきたい。

【参考文献等】

- ・千葉県教育委員会『「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム』
- ・啓林館 改訂版小学校算数「授業力をみがく」指導ガイドブック
- ・亀岡正睦編著 算数科言語力表現力を育てるふきだし法の実践
- ・中村光晴著 思考過程を大切にしたい算数ノートづくり
- ・平川賢著 これで解決!算数「教材・指導案・授業」づくり
- ・相馬一彦・早瀬裕明編著 算数科「問題解決の授業」に生きる「問題」集

『サファリ！ な子』の育成に向けて

～変化の激しい21世紀をたくましく生き抜いていく子どもたちを目指して～

市川市立中山小学校

校長 松永 裕思

1 はじめに

本校は、明治16年6月独立をもって開校とし、今年には創立140周年を迎える。学区の東南は船橋市に隣接し京成電鉄が学区南部を横断している。法華経寺をはじめとして寺院が多く、落ち着いた街である。

古き歴史があり、また理科教育において伝統ある本校は、市川市の東部、高台の地（通称うずら台）にあり、木々の緑に囲まれ、自然環境に恵まれた住宅地である。親はもちろんのこと、祖父母の代から家族そろって中山小学校の卒業生という家庭も多く、学校に対して非常に愛着を持っている。また、子どもの教育に対しても実に熱心で、PTA 活動においても積極的であり、協力的である。

2 学校教育目標と子どもたちの実態

学校教育目標は、学校の中で最重要目標であり、誰もが頭に入れ歩んでいくことが大切だと考える。

しかし、教育の職に就きながらも私は小中学校時代の学校教育目標を何一つ覚えていない。自分の意識も足りなかったのだが、子どもたちにとって印象に残る言葉でなかったことは確かである。

学校教育目標は、実態に合っていることが大切であるが、さらに学校職員はもちろんのこと子どもたち全員そして保護者や地域の方までも覚えていただけるものであることが、目標達成に近づく一歩だと考える。

そこで、本校に着任した初日に職員から本校の子どもたちの良さ・課題を教えてくださいました。

全職員からアンケートを取り、本校の子どもたちは温かい保護者や地域に生まれ、真っすぐで優しい子どもたちであることがわかった。さらに学力もしっかりついていることがわかった。令和3年度の全国学力学習状況調査では、全国平均を国語・算数とも10ポイント以上上回っていた。

反面、このような恵まれた環境であるが故に、挨拶も含めて主体性に欠ける面と心の弱い面が課題である

ことがはっきりした。

伝統ある本校のこれまでの学校教育目標は、長い間「心豊かで、かし

こく、たくましい」子どもの育成であった。これは、現在の中山の子どもたちにも合っている目標だと感じた。しかし、子どもたちが明確に意識するには長すぎてインパクトが足りない。そこで、「心ゆたかで たくましく かしこい」子どもを『サファリな子』と名付けた。中でも特に、たくましさを育てたい思いが強く、サバンナでもたくましく生き抜いていく野生動物をイメージしている。

学校教育目標は、合言葉として挨拶にも活用している。始業時に毎日各教室を回っているが、いつも「サファリ！」と声をかけながら教室を訪ねる。子どもたちからも元気な声で「サファリ！」と返ってくる。

本校の子どもたちは、大人になっても学校教育目標を間違いなく覚えているであろう。

3 社会的背景から

2030年頃にはIoT (Internet of Things) やAI (Artificial Intelligence) 等をはじめとする技術革新が一層推進し、社会や生活を大きく変えていく超スマート社会 (Society 5.0) の到来が予想されている。労働人口の相当規模がAI やロボット等に代替できる可能性が指摘される一方で少子高齢化が進み、技術革新に伴ってグローバル化の加速が予想されている。

また、予想もしていなかった新型コロナウイルスの蔓延で、今でも学校現場は多くの制限の中で可能な限りの活動を行っているが、グループ活動の制限や給食時の黙食はコミュニケーション力を育むうえでも寂しい状況である。

このような先行きの見えない21世紀を生き抜いて



いくためには、子どもたち自らが課題を見つけ、解決方法を探り、主体的に生き抜いていく力が大変重要になってくる。

4 サファリな子の育成に向けて

「サファリな子」のたくましさとはい、どのようなものであろうか。それは、変化の激しい先行きの見えないう21世紀において、予期せぬことが起きたとしてもくじげず、仲間と力を合わせて課題を一つ一つ解決していく力と考える。

では、どのようにしていけば育つのだろうか。

まずは、子どもたち一人ひとりを取り巻く環境が重要であることは確かである。私の両親の時代は戦争もあり、物資も豊かではなく満たされてはいなかったが、たくましさは現在とは比べられないほどあったと感じる。これは、仲間と力を合わせる経験や自然とともに生き抜く経験等、豊かさが少ないために工夫してよりよく生きてきたからだと考える。豊かさは人にとってありがたいものではあるが、人を弱くしていくものでもあると感じる。

そこで、学校の中でできる限り体を動かし、豊かな体験をすることや土と触れ合う経験をさせること、人とのふれあいを数多く作ること、そして、主体的に取り組む機会を数多く作ることによって自己肯定感を育み、たくましさを備えた子どもたちを育てていきたいと考えた。

(1) なかやま DASH 村



【なかやま DASH 村の看板と温室】

本校は、敷地はそれほど広くないが、木々が生い茂るなど自然環境に恵まれている。裏庭には、じゃぶじゃぶ池と名付けられた池や温室もあるが、十分活用されているとは言えなかった。

そこで、裏庭を「なかやま DASH 村」と名付け、昨年度より開拓を始めた。

まず、初めに掛かったのが、看板作りである。入り口に掲示し、誰もがわくわくする空間であることを認識できるようにした。次は田んぼ作りである。以

前は花壇であったと思われるブロックで囲まれた場所を掘り、田んぼ作りを始めると、興味をもった多くの学年の子どもと一緒に作りたいと言って、休み時間ごとに訪れた。



【手作りの田んぼで初めての田植え】

温室では、パイナップル。さらに、小さな畑で落花生。興味・関心のある子どもたちを少しずつ広げて関わりを持たせていった。

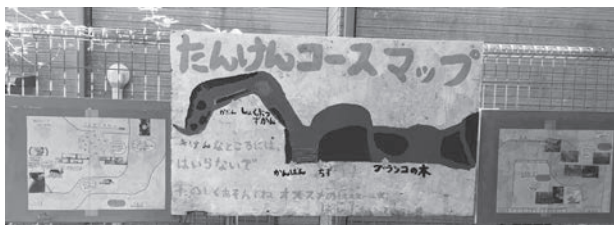
2年目の今年、じゃぶじゃぶ池の一つを蓮田に変え、蓮根作りに挑戦している。

(2) 探検コースの整備

校庭の脇に、「探検コース」と名付けられた林と雑草が生い茂る場所がある。ここは、特に低学年の子どもたちの遊び場であり、休み時間には虫取りをしている子どもたちが多くいる。低学年の廊下には「マイ虫取り網」がたくさん。やもりを飼って、「サファリくん」と名付け、育てている子もいる。

また、夏みかんもたわわに実っている。しかし、誰一人夏みかんを食べたことはなかった。なぜ、食べないのだろうか。お腹は減っていないし、学校生活で実っているものを口にする経験がこれまでなかったことも確かであろう。休み時間に採って6年生とともに味わってみた。酸っぱいが、新鮮さにあふれ優しい味がした。

安全確保もあるため、雑草を刈り取る場所とそのま放置する場所を決め、地図を入れた看板を6年生が作成した。



【6年生手作りのコースマップ】

(3) ベニア5枚の巨大掲示板

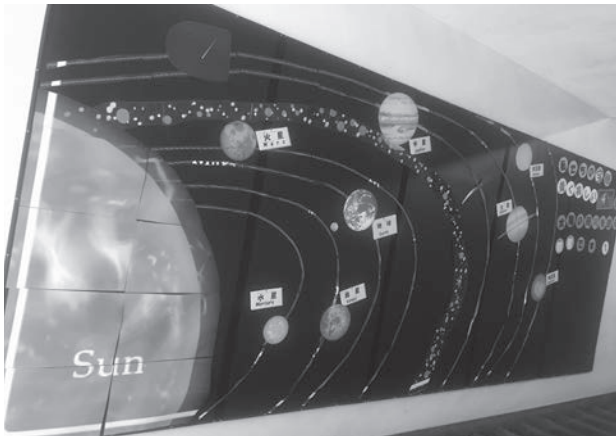
校内には、活用できる場所が多くある。どの学校でも活用できるのが階段の壁である。

私は教務主任になって以降、多くの学校で作成してきたが、本校にも2つの掲示板を作成した。土台としてトタンを活用しているため、磁石が利用できる掲示板である。

本校では、都道府県ごとに貼っていける日本地図と太陽系の惑星を現した太陽系マップの掲示板を作成した。



【令和3年4月作・日本地図】



【令和4年6月作・太陽系マップ】

階段の壁面に掲示してあるため、多くの子どもたちが毎日目にしていて、磁石で移動が容易にできるためときどきいたずらもされていることがある。都道府県の名前が移動されていたり、惑星の軌道がはずれていた。しかし、これは、子どもたちが興味を持って毎日目にしていて証である。

(4) 地域の方々による全校ふれあい道徳

人との関わりは、心の成長に欠かせないものである。

どの学校の地域にも、生き方を学びたい方がたくさん住まわれている。

本校では、平成20年より毎年、地域の方に各学級に入っていただき、生き方を学ぶ「全校ふれあい道徳」を実施している。

コロナ禍ではあるが、とても貴重な時間なので、昨年今年も実施した。

講師の先生も多様である。

学区を走る京成電鉄の駅長さん、茶道の先生、市川民話の会の方々、三味線奏者、東山魁夷記念館の学芸員、パン屋さん etc。

保護者にはこの時間もオープンデーの一コマとして参観いただいた。



【和の心を学ぶ茶道の授業】

授業後は、指導してくださった先生にお礼の手紙を書き感謝を伝えた。

日頃の授業とはまた一味違う学びができ、何より人との関わりがありがたいと感じられる時間となっている。

(5) 主体性を育む二つの提案

令和3年度の卒業を間近に控えた6年生に主体性を育む目的で二つの提案をした。

一つは校庭で「焼き芋大会」をすること、もう一つは二階のベランダから在校生に向けてメッセージを伝える「未成年の主張」を行うことである。

コロナ禍で十分な関わりが制限される中、卒業前に



思い出作りも兼ねた提案だった。

どちらも子どもたちは積極的に受け入れた。

焼き芋大

【穴を掘り、焼き芋】

会に向けて、

たくさんの落ち葉を集めることから始まった。仲間と共に休み時間を使って、活動した。当日は好天にも恵まれ、穴を掘り、じっくり焼き上げたお芋は格別の味がした。

卒業3日前に昼休みを利用して「未成年の主張」を実施した。

多くの人の前で注目を浴びて一人で話をするに初めは参加を迷う子も多くいた。しかし、自分の殻を破って卒業前に在校生へメッセージを伝えたいという6年生が13名も名乗り出た。

その内容は、「名前大切さ」「親への感謝」「自分の

夢「苦手なことから顔を背けてはいけない」「毎日楽しく笑顔で過ごして」etc. それぞれに思いがこもった素晴らしいメッセージであった。



【たくさんの在校生へ向けて「未成年の主張」】

(6) オオクワガタの飼育



昨年6月に子どもたちの憧れのクワガタ「オオクワガタ」の幼虫をいただいた。

わずか1センチ足らずの小さなものである。

【令和3年6月
1 cm】



校長室で1年かけて4匹の成虫になった。

校長室はいつでも誰でも入れるようにしており、この間たくさんのお子どもたちが訪れた。

特に成虫になってからは、毎日のように訪れる子もいて、いのちにふれる良い機会となった。

【令和3年9月
34.1 g】

【令和4年6月
オス8 cm
メス5 cm】



5 研究を通して

本校の理科研究は、昭和10年から始まっている。同年、公開研究会を実施し、全国から教師が集まったと記録にある。これまでに、千葉県から科学センター校に指定をされたり、市川市より理科研修センター校の指定を受けたりして、毎年市内外の教員に向けて授業を公開し歩んできた。

考え方は以下のとおりである。

子どもたちが自然との対話の中で、一人ひとりが気

づき、問い、考え、そして互いに深め合っていく授業づくりをしていくことは、学習指導要領における「生きる力」を育むことにつながる。「生きる力」を支えるのは、「確かな学力」である。「確かな学力」とは、知識を丸暗記する学力ではなく、主体的な追求を通して、実感を伴いながら質感を深めていく力のことである。理科・生活科において児童が、「確かな学力」を身につけていく過程を次のように考えている。

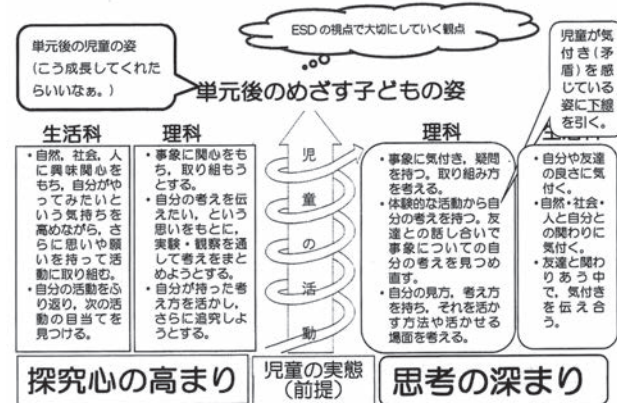
生活科では、自分の思いや願いをもって対象物にかかわる中で思考が深まり、その思考をもとに次の目的に向かって活動することにより探究心が高まっていく過程。

理科では、事象を追究していきたいという意欲から、体験的な活動を通して思考を深め、そこから新たな疑問が生まれることで探究心が高まっていく過程。

子どもたちが理科・生活科を通して、「生きる力」を身につけていくことが、未来につながる基礎教育を構築することにもつながると考え、研究に取り組んでいる。

<p>研究主題</p> <p>「子どもの探究心を育てる理科・生活科 ～子ども自ら気づき、問い、考える授業づくり～」</p> <p>研究仮説</p> <p>「児童の気づきの力を高めつつ、スパイラル型学習(探究的な学び)を進めていけば、児童の探究心を育てることができるだろう」</p>
--

「学びのスパイラル」とは、子どもたちの実態(スタート)から単元後の子ども像(ゴール)まで、子どもたちがどのように探究心を高め、思考力を深めていくかを表したものである。【図1参照】



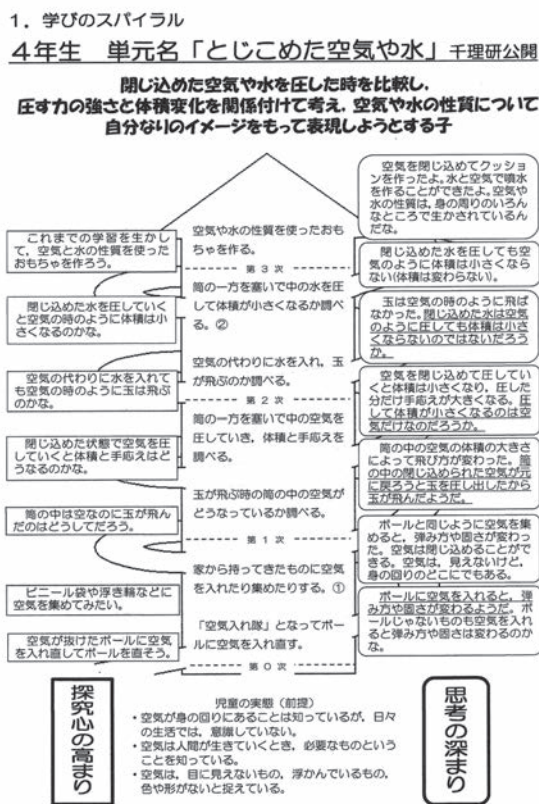
【図1】

単元後の子ども像には、単元を通して何を学び、最

最終的にどのような子になってほしいかという願いが込められている。その際、ESD の視点に立ち、これからの時代を生きていく子どもたちにとって、どのような力が必要となっていくだろうか考える。単元を通して、未来への架け橋となっていく力を単元後の子ども像に併せて教師が意識していく。

学びのスパイラルがスタートからゴールに向かってらせん状に上がっていくためには、「前提」「気づき(矛盾)」「再構成」「新たな見方・考え方」という一連の思考の流れが繰り返されていく必要がある。つまり、「前提」「気づき(矛盾)」「再構成」「新たな見方・考え方」という思考の流れを繰り返していくことは、子どもたちの探究心を高め、思考力を深めていくために重要な過程であると言える。

下図は、4年生の単元「とじこめた空気や水」での学びのスパイラルである。



【図2】

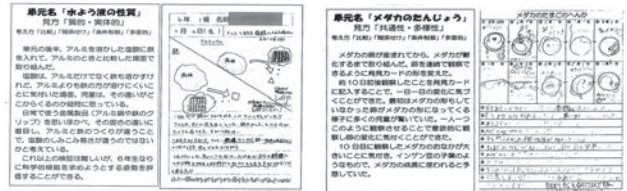
このように子どもたちの思考の流れを明確にとらえたうえで、低・中・高学年でそれぞれ3つの手立てを講じ(図3参照)、研究授業に取り組んでいる。

中でも、発見カードや観察カードの積み重ねは「量的・関係的」な発見や季節や時間、距離等に着目した発見など深まりがみられるようになってきている。

(図4参照)

低学年・特別支援部会	中学年部会	高学年部会
めざす子どもの姿 「発見カードや観察カード」の活用が得意な子になる。	めざす子どもの姿 「発見カードや観察カード」の活用が得意な子になる。	めざす子どもの姿 「発見カードや観察カード」の活用が得意な子になる。
チャレンジしながら 学び合う子 手立て	見つけ合い、 考えを伝え合う子 手立て	見つめ直し、 考えを深め合う子 手立て
①発見カード・観察カードの活用が得意な子になる。 ②発見カード・観察カードの活用が得意な子になる。 ③発見カード・観察カードの活用が得意な子になる。	①発見カードや観察カードの活用が得意な子になる。 ②発見カードや観察カードの活用が得意な子になる。 ③発見カードや観察カードの活用が得意な子になる。	①発見カードや観察カードの活用が得意な子になる。 ②発見カードや観察カードの活用が得意な子になる。 ③発見カードや観察カードの活用が得意な子になる。

【図3】 研究主題にせまるための3つの手立て



【図4】 発見カード

6 おわりに

子どもたちの好奇心に火をつけるために様々な仕掛けを行ってきた。

素直で純粋な子どもたちなので、一つひとつに期待する反応が明確にあった。

これまで経験したことのない作物を育て、いのちがたくさんふれ、多くの人との関わりも持つことができた。予想以上の成果を実感しているともいえる。

研究では、多くの気づきが生まれ、意見の交流により考えが深まり、探究心が育っていることも実感できる。

しかし、子どもたちに求めている「たくましさ」が育っているかと考えると、自信をもって「はい」と答えることは難しい。

まだまだ、収束の兆しが見えない新型コロナウイルス感染症の対応もそうであるが、今後予期せぬことが起きた際、子どもたちはくじけず、仲間と力を合わせて課題解決に向かえるだろうか。自ら主体的に判断し行動できるだろうか。

答えは実際の場面でわかるのだろうが、たくさんのいのちや土とふれあい、多くの方々と関わり成長して子どもたちは、間違いなく豊かな人間性を育んでいるはずだ。そう信じてこれからも、日々できることを精一杯取り組んでいくことが大切なのだと思える。

『未来を創る子どもたちのために!』

今年3年ぶりに水泳指導が実施でき、プール清掃を職員で行っていると、下校時にそれに気づいた子どもたちは誰もが「先生!ありがとうございます。」と声をかけていった。子どもたちの豊かな心に嬉しかった一コマであった。

科目「課題研究」における自然栽培実践の取り組み

～ユネスコスクールにおける課題研究の在り方を目指して～

千葉県立下総高等学校

教諭 齊藤 一彦

1 はじめに

本校は明治33年に創立し、今年123年目を迎えた伝統校である。下総台地のほぼ中央にある成田市に位置し、「園芸」「自動車」「情報処理」の3学科からなる県内唯一の総合専門高校である。また、昭和41年に自営者養成農業高等学校として文部省の指定を受け、千葉県で唯一寮のある公立高校で、現在でも園芸科1年生を対象に義務入寮を行っている。「ものづくり・人づくり・夢づくり」を学校教育目標に、規則正しい共同生活を通じて、自主性や協調性を養い、豊かな人間性を養成するとともに職業人としての資質・能力を育むような教育活動に取り組んでいる。

2 研究の背景

本校はユネスコスクールに加盟しており、近年話題となっているSDGsの取り組みを推進し環境、資源エネルギー、地域の伝統と文化を学ぶとともに、国際理解、地域貢献に積極的に取り組んでいる。本校には隣接する農場の他、大栄農場という遠隔地農場があり、合わせて東京ドーム約3個分の面積にもなる。このような広大な実習地で園芸科を中心に様々な授業や実習を行っている。

園芸科では、科目「課題研究」が2年次に2単位、3年次に2単位、計4単位が必修科目となっている。この科目は、生徒個々の実態に応じ、農業に関する課題を自ら見だし、これまで学んだ農業に関する各科目や自身の経験を基に、課題解決に向けて自発的、創造的取り組む科目であり、SDGsの実践も視野に入れ、地域資源の利用や地域との繋がりを視野に入れた課題研究の授業を日頃から目指している。

園芸を学ぶ中で、食の安全は以前から騒がれていたことであるが、それと同時に環境により農業「自然栽培」も注目を浴びてきている。

自然栽培とは、農業はもちろん、化学肥料や除草剤、動物性堆肥を使用せず、植物由来の有機物や有用菌だ

けを使用した栽培方法である。自然栽培と言えは、絶対に不可能と言われた無農薬でのリンゴの栽培に世界で初めて成功し、映画「奇跡のリンゴ」のモデルとなった木村秋則さんが数年前に話題となったが、この環境により自然栽培の授業実践は、残念ながら農業関係高校ではほとんど取り組まれていないのが現状である。

自然栽培は生産性がある栽培方法とは言えないが、人と環境に良いこの自然栽培をあえてここで取り組むことが、持続可能な社会教育の観点から効果があると考え、課題研究の時間で取り組むことにした。

3 研究の目的

本研究の目的は以下3点を主とすることにした。

1 つ目は、人と環境に配慮した野菜の自然栽培計画を行い、収穫が実際にできるのか実験を行う。

2 つ目は、学校内（実習地）や地域資源を活用した自然栽培を行う。

3 つ目は、この課題研究での活動を地域の連携につなげることを目的とする。

4 研究の内容

今回は園芸科野菜専攻3年生を対象とした、課題研究の授業である。科目「野菜」の授業と関連させながら自然栽培の実験授業を行う。

(1) 課題の設定

以前から園芸科野菜専攻では、「Think Globally. Act Locally.」「環境の問題は、地球規模で考え足下から行動する」を合言葉に、掌に地球を置き、自然栽培に取り組んでいる。

日本では、近年様々な種類の野菜が出回っている。今回は、その中からあえて栽培が難しく、知名度の高いメロンの自然栽培の実験を行うことにした。メロンと聞くと誰もが分かり、高級なものといイメージがつく。こうすることにより、達成感や栽培の難しさを感じることができるのではないかと考えた。

(2) 事前学習

教科書などには自然栽培に関する記述が乏しく、今回のようなケースでは、自然栽培に関する情報収集が要になる。図書室の書物はもちろん、学校の情報処理室でパソコンや、タブレット・スマートフォンを用い自然栽培に関する事例研究を行うとともに、年間の栽培計画を立てた。



【写真1：事前学習の様子】

(3) メロンの自然栽培の実践

①有機肥料作り

今回は、自然栽培の実践ということで農薬と化学肥料は一切使用することができない。そのため、有機肥料づくりから行うことにした。有機肥料には、家畜の排せつ物を利用した動物由来のものと、もみ殻や樹木チップなどの植物由来のものがある。動物由来の堆肥は、完全発酵し畑で使用できるまで5年ほどかかると言われている。化学肥料や未成熟の堆肥を使用してしまうと土壌中に大量の窒素分が硝酸態窒素となり残ってしまう。硝酸態窒素は、野菜の「えぐみ」の発生原因となる他、害虫は硝酸に過剰に反応し、寄りやすくなってしまいう傾向にある。また、硝酸塩の濃度が高いと胃酸と反応しニトロソ化合物ができ、発がんの危険性があると指摘もされている。このことから、植物由来の有機肥料を作ることにした。

本校園芸科には「稲作」を専門に行う作物専攻がある。校舎から約4.2km離れた大栄農場に約1ヘクタールの水田があり、そこで稲作の実習を毎年展開している。収穫期になるとイネのもみ殻が大量に発生することから、校内や地域資源を活用した自然栽培の実践にあたり、このもみ殻を有機肥料の材料にすることにした。

もみ殻を利用した有機肥料で「ぼかし肥料」と言われるものがある。ぼかし肥料の語源は諸説あるが、

土に混ぜてぼかす（薄める）ことからその名前がついたと言われている。このぼかし肥料は、米ヌカや有用菌などを混合し発酵させて作る。生のもみ殻では、土に分解されるまでに時間がかかる他、炭素率が高いため逆に土壌の窒素成分を消費してしまうことがある。ぼかし肥料は発酵させることにより速効性があり、土壌に分解されやすくなるため、今回のような実験には非常にベストと言える。また、発酵させるにあたり、大栄農場竹林床にある土着菌を採取し利用した。表1の分量を混合機に投入し、下総高校オリジナルぼかし肥料を作った。発酵して実際に使用できるまでの時間は最短で約1週間ほどなので、動物性有機肥料と比べると早いことがわかる。

【表1 下総オリジナルぼかし肥料配合割合】

基材	分量
もみがら	600
米ヌカ	300
土着菌	200g
地下水	適量



【写真2：混合機を利用した肥料づくりの様子】

②有用菌づくり

自然栽培では、ぼかし肥料と併せて有用菌を使用することが多く、今回は「光合成細菌」を培養することにした。光合成細菌は名前の通り光を利用して生育する細菌で、田んぼや水路などの土壌中に存在する。農業利用の利点としては、作物の生育促進、連作障害の改善、土壌の微生物を活性化させるなどの効果がある。一般的に培養には、光合成細菌と培養液（アミノ酸等を含む液）と水の3つが利用される。本校大栄農場の水田土壌から、光合成の採取を試みたが、中々うまくいかず、購入することとした。

また、光合成細菌の培養液も購入することにしたが、カツオなど魚類が主成分であることがわかり、購入資材の培養と並行し、培養液づくりの研究も行うことにした。光合成細菌を10ℓ培養する場合表2の通りの割合で混合し、細菌自体が光合成をすることから、ペットボトルや、ホームセンターなどで購入できる透過率の高いポリタンクで培養をした。液全体が真っ赤になれば使用でき、ぼかし肥料同様、資材は単純で1週間ほどで完成する。

【表2：光合成細菌10ℓ培養する場合の混合割合】

基材	分量
光合成細菌	2ℓ
培養液	50ml
水	8ℓ

③光合成細菌培養液づくり

光合成細菌培養液の主成分は魚類からできていることが調べ学習からわかり、何か地域資源を利用できないか考えた。そこで近年、霞ヶ浦、北浦を含めた利根川水系で大量発生している特定外来生物である「チャンネルキャットフィッシュ」通称アメリカナマズ（以下アメリカナマズ）が利用できるのではないかと仮説を立てた。アメリカナマズは食用とした養殖技術の確立のために、アメリカから1970年代に持ち込まれ、霞ヶ浦の養殖施設から逃げ出し増殖したとされている。アメリカナマズは食欲旺盛で、魚類・貝類藻類など、ほとんどのものを食べてしまう。利根川水系では、水産資源とされているテナガエビ・ワカサギ・シラウオなどがアメリカナマズに捕食され漁獲高が減少している。また、漁師の網具にアメリカナマズが掛かってしまい暴れた影響で網が破損してしまったり、鋭いトゲによって怪我をしてしまったりする事案がある。アメリカナマズは5～7月に産卵し、1回の産卵で約10,000個以上産卵する。ほとんどが孵化するため、繁殖力が旺盛であると言える。水郷地域の風物詩である、フナやコイ釣りにも影響を及ぼし、ほとんど在来種が釣れず、アメリカナマズが釣れてしまう状況にある。

利根川本流から本校までは約2kmと非常に近い位置にあり、千葉県生物多様性センターに確認した上、実際に生息するか調査を兼ねた駆除をすることにした。

調査にはいくつか誓約があり、網などの漁具は使用せず、釣り竿で行うことと、持ち帰り調査研究をする

場合は、必ずその場で殺処分することと指導を受けた。

調査に使用するエサは実習で栽培し、廃棄となるサツマイモを使用。布で包み両端からタコ糸で硬く巻き、弱火で3時間茹でて甘くした角イモを作った。利根川本流においてコイ釣り用の吸い込み仕掛けを応用し、角イモをエサに10分程度待つと1回目の当たりがあり、約55cmのアメリカナマズが釣れた。さらに10分後2匹目が釣れ、1時間程度の調査釣行だったが、アメリカナマズのみで、在来のコイやフナは釣れることはなかった。釣れたアメリカナマズは、血抜き後学校に持ち帰り、胃の内容物調査を行った。胃の中には、主に藻類や二枚貝などが見つかり、食性が分かった。調査後、水を張った鍋でアメリカナマズを1時間程度茹でて、出汁を光合成細菌と合わせ、1週間ほど培養した結果、培養液が真っ赤に変色し、アメリカナマズから培養液を作ることに成功した。



【写真3左：利根川で釣り上げたアメリカナマズ】



【写真4右：培養に成功した光合成細菌】

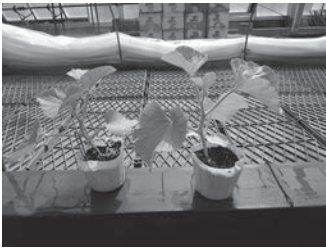
④メロン用土づくり～育苗

野菜栽培、特にメロンの栽培で重要になるのが苗づくりであると考え。「苗半作」という言葉があるように、育苗が今後の栽培を左右する重要な作業と言っても過言ではない。今回は、ぼかし肥料と光合成細菌を使用し、化学肥料を使用していない資材を利用し用土を作ることにした。よい用土の条件は、肥沃で、排水性・保水性の3つが揃ったものがベストと言える。育苗実験を重ねた結果、表3のような配合となった。用土の名前は下総高校から取り、下総高校ブレンド＝SKBと生徒が名付けた。

【表3：SKB用土10ℓあたりの配合割合】

基材	割合
赤土	5ℓ
ピートモス	2ℓ
大栄ぼかし	2ℓ
くん炭	1ℓ
光合成細菌	適量

育苗実験の対照用土として市販の育苗用土を用いた。下の写真5と写真6はSKB用土と市販の用土との生育差の写真である。いずれの写真も左が市販の育苗用土、右がSKB用土である。SKB用土の方が生育状況良好で、茎も太い。また、根の量は市販用土に劣るが、太くてしっかりしていた。このことから、化学肥料を使わず、自然由来の地域資源のみを使用して作ったSKB用土は、メロンの育苗に十分使用できることが分かった。



【写真5左：メロン苗全体の生育の様子】



【写真6右：メロン苗根の生育の様子】

⑤メロン苗の定植～生育管理

メロンの栽培実験には、作物の栽培が行われていない化学肥料成分の無いガラス温室を利用した。作物の栽培の基礎で最も重要となる元肥は、生徒自ら作ったぼかし肥料を使用した他、米ヌカや光合成細菌の散布も行った。この時点で、育苗用土（SKB）・温室内の土には化学肥料と農薬は一切使用していない。

メロン苗の定植は、他の野菜と違い、地際からの病害虫予防のため基本的には浅植えとする。生徒は初めての経験で、戸惑いながら行っていたのと同時に、このころになるとメロンに対する愛着と自然栽培に対する探求心が芽生えてきていると感じた。生育初期は、蔓の誘引を中心とした作業を行う他、果実の生育に最も重要である交配も自らの手で行う。栽培と同時に生育調査や観察も継続して行う。生育中期になると恐れていたアブラムシの発生が見られた。アブラムシは、ほとんどの作物に発生する。アブラムシの特徴は黄色や黒色で、体長2mm程度で、主に葉の裏側に密集して吸汁し、葉の生育が阻害されて落葉、枯死に至ることもある。また、モザイク病やすす病などのウイルスを媒介するほか、アリを誘引することもあるので早めの対策が必要で、通常であれば育苗時から農薬を使用する。対策として、粘着シートを温室内に張り、補虫と発生のもりタリリングを行うと同時に、寮の食事で廃棄

されてしまう牛乳を継続的に散布した。また、病害虫発生予防のため、食酢の2,000倍液を継続的に散布した。アブラムシの発生は、完全に抑えることはできなかったが、被害は最小限に抑えられた。アメリカナマズを利用して培養した光合成細菌の散布も継続して行った。



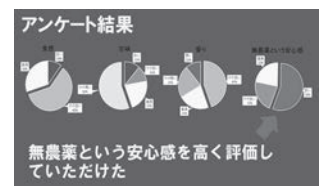
【写真7：光合成細菌散布の様子】

⑥収穫

収穫期のメロンには、アブラムシのすずが付着していたが、1つ1つ丁寧に拭いて収穫した。収穫したメロンを切ると、まぶしいオレンジ色で、農薬と化学肥料を使用せず栽培したとは思えないくらいのものであった。収穫したメロンを校内職員向けに配布し、食味アンケートを実施した。結果は、甘味は劣るが、香りの強さが通常メロンより高い結果となった。また、無農薬という安心感が、絶大な支持を受けた結果となった。



【写真8左：収穫したメロン】



【資料1右：食味アンケート結果】

(4) その他野菜の自然栽培の実践

メロン栽培と同時進行で、普段食卓に出てきやすいレタスとサラダ菜の栽培も行い、すべて無農薬・無化学肥料で栽培することができた。手軽に自然栽培が行えると実感させるため馴染み深い野菜をあえて栽培した。メロンと違い、アブラムシの発生はほとんど見られず、レタスとサラダ菜を栽培したことで、生徒はメロン栽培の難しさなど身をもって実感していたと思う。

(5) 自然栽培を通じた地域での連携

地域にある「直売所しもふさ」と連携し、野菜の委託販売を行っていただいている。今回は栽培したメロンの他に、レタスとサラダ菜も生徒が納品から陳列まで行った。制服姿の高校生が陳列しているとよくお客さんから「みんなで作ったのかい」と声をかけていただいた。生徒は自信をもって「はい、無農薬です」と自信をもって答えていた。

また、利根川水系で問題となっている外来魚「アメリカナマズ」を材料にして培養した光合成細菌を使いメロン栽培を行ったことから Channel catfish メロン＝「CCFメロン」として販売することができ、外来魚の有効利用していることをアピールできた他、新たな学校農産物のブランド化につながる活動となった。

直売所の委託販売の他、千葉駅構内での販売イベントへの参加や、同じ印旛地域にある房総のむらでの販売会へも積極的に参加し、販売するだけでなく、自然栽培への取り組みもPRした。

このような地域資源を活用した自然栽培は、持続可能な社会へ貢献していることから、ユネスコスクールとしてSDGsに取り組んでいる内容のポスターを作り、各販売会での展示の他、校内外への配布や掲示を積極的に行った。販売用のメロン箱のデザインや販売促進の張り紙などすべて生徒主体で考え、印刷まで行った。



【写真9左上：千葉駅構内での販売活動の様子】

【写真10右：販売会や校内掲示したポスター】

【写真11左下：生徒がデザインしたメロン箱】

5 結果と考察

本研究のメインとなる目的である、化学肥料・農薬・除草剤を一切使わない人と環境に配慮した自然栽培の実践を科目「課題研究」において成功することができた。野菜の中でも難しいとされるメロンの栽培をこの農法で行ったことは教員にとっても生徒にとっても大変達成感で満ち溢れるものだった。収穫の際に見たメロンの果肉の色は忘れることができないくらい輝いていた他、今回の取り組みを通して生徒が温室の中で夢中で自発的に植物と向き合う姿を見ることができた。地域で問題となっている外来魚「アメリカナマズ」などの資源を活用した栽培は、社会的にも大変貢献できたと考える。販売会に積極的に参加し栽培した農産物の販売を通し、地域の方との交流ができ連携を深めることができた。

6 おわりに

本研究は、ユネスコスクール加盟校として今後も継続してこそ教育的価値があると考えます。

本研究にご協力していただいた、地域の方々、関係機関の方々にこの場で感謝の意を申し上げます。

《参考文献》

- ・文部科学省 高等学校学習指導要領解説農業編
- ・農林水産省 地域特産野菜の生産状況調査
https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/tokusan_yasai/
- ・環境省 特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物のリスト
<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/list.html>
- ・木村秋則 2007年1月20日「自然栽培ひとすじに」創森社
- ・農文協 2012年10月 「農家が教える光合成細菌とことん活用読本、肥料に堆肥に、土壌・水質改善に」
- ・山田勲 1988年3月10日「野ゴイ」西東社

英語の家庭学習を通じた「個別最適な学び」の研究と実践

～自己調整をしながら学習を進められる生徒の育成を目指して～

松戸市立第五中学校

教諭 浅野 幸絵

1 はじめに

「令和の日本型教育」における児童生徒の資質・能力育成のため、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業・授業外の学習改善が求められている。授業外における学習改善として、2019年度より研究・実践を進めている「英語家庭学習フローチャート」(以下「フローチャート」)を用いた家庭学習の取り組みについて紹介する。

2 主題設定の理由

「息子が、既にわかっている単語をどうして毎日ノートに10回ずつ練習しなければいけないのかと文句を言っている。やらなくていいと言っても真面目だから、毎日毎日わかっている単語を家庭学習としてノートに練習している。書ける単語をノートに何回も書くことは、本当に勉強になっているのだろうか。もっと自分で決められる課題や、やりたい学習ができるような家庭学習は出してもらえないのだろうか。」

これは、中学生のご子息を持つ同僚の言葉である。中学校英語の家庭学習は、ノートに単語を10回ずつ書くなどの教師から指定された課題に取り組む形が一般的である。同僚の言葉をきっかけに、教師主導ではない、生徒が自己調整をしながら学びを進める英語の家庭学習の在り方について模索を始めた。

3 研究の内容

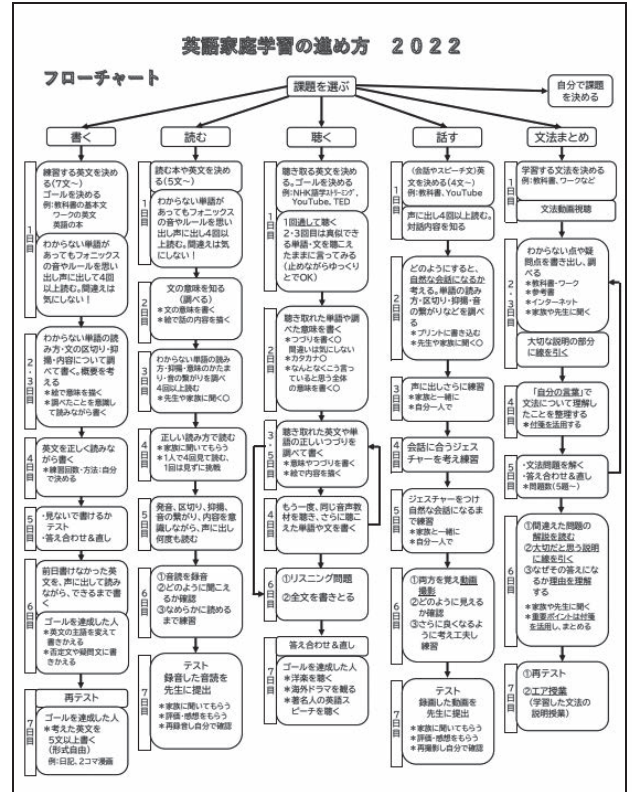
本家庭学習は、自己調整をしながら学びを進められる生徒の育成を目指し研究と実践を行った。形式は、生徒が自分に必要な学びを理解し、それに合う学習方法が選択でき、学習方法を習得しながら、主体的に継続できるものがよいと考えた。そこで作成したのが「英語家庭学習フローチャート」(図1参照)である。自分に合う学習方法を模索する生徒の一助となるため、フローチャートには多くの学習方法を提示し、取り組み方の具体例や使用可能なツールを添え記した。

生徒には、このフローチャートを使用し、3年間家

庭学習に取り組ませた。生徒の取り組みを週2回点検し、適宜一斉又は個別指導を行った。生徒には、毎日学習内容と振り返りを、記録シートに記入させた。

多くの学習方法で家庭学習を行い、振り返りをさせることで、生徒が自分に最適な学びを習得し、自己調整をしながら学びを進める学習者に成長することを期待し、研究を進めた。以下に、フローチャートの詳細、および3年間の研究内容を紹介する。

図1：英語家庭学習フローチャート(詳細は3.3.1.2～3.1.7参照)



3.1. 最適な学びを習得する新家庭学習

3.1.1. 英語家庭学習フローチャート

本家庭学習は、フローチャート(「読む」「書く」「聴く」「話す」「文法」「自分で課題を決める」)の6項目から、生徒が自分でやりたい学習項目を1つ選択し、毎日の学習指示に沿って、7日間1サイクルで学習を進める形式である。1日最短10分で終えられ、毎日無理なく続けられるハードルの低い設定である。本家庭学習の目的は、生徒に多くの学習方法を習得させること、主体的に学習を進めることであるため、毎日の学習方法は、具体的に提示している。フローチャート

は縦に1日1枠進み、7日目のゴール（テストや録画等）に向かい、1日毎細かな学習段階を踏みながら学びを進める設計となっている。学習方法はアウトプット学習を多く取り入れている。年度末には、その年度の学習方法、生徒の取り組み内容等を振り返り、改訂を行っている。次に、2022年度版中学3年生の各項目の詳細を紹介する。

3.1.2. フローチャート項目「書く」

「書く」は、英文を書いて覚えるだけではなく、文の区切り（意味のまとまり）や抑揚、概要等を自分で調べ、考えながら学習する。日本語で英文の意味を知ることが重視しておらず、理解した内容は絵で表現するように指示しているのが特徴である（表1：2・3日目参照）。これは、極力日本語を介さず、英語をイメージ（概念）で捉えられるようになるための訓練である。7日目は、ゴール達成の生徒に対し「ゴール＝学習終了ではない」という意味を含め、追加で学習指示を出している。

表2：フローチャート項目「書く」

書く	
1日目	<ul style="list-style-type: none"> 練習する英文を決める（7文以上）。 ゴールを決める。 わからない単語があってもフォニックスの音やルールを思い出し、声に出して4回以上読む。間違えは気にしない。
2日目 3日目	<ul style="list-style-type: none"> わからない単語の読み方、文の区切り（意味のかたまり）、抑揚、内容について調べて書く。 *内容を絵で描く *調べたことを意識し、読みながら書く
4日目	<ul style="list-style-type: none"> 英文を正しく読みながら書く。 *練習回数、方法は自分で決める
5日目	<ul style="list-style-type: none"> 見ないで書くテスト。 答え合わせと間違え直し。
6日目	<ul style="list-style-type: none"> 前日書けなかった英文を読みながら、書けるまで練習する。 ゴールを達成した人：英文の主語を変えて書きかえる。否定文や疑問文に書きかえる。
7日目	<ul style="list-style-type: none"> 5日目と同様のテスト再度行う ゴールを達成した人：考えた英文を5文以上書く。 例) 日記, 2コマ漫画

3.1.3. フローチャート項目「読む」

「読む」は、英文を読み問題に答える学習ではなく

音読である。音読は、問題を解かずとも英文の内容を理解できれば、文の区切り（意味のまとまり）や抑揚等で、理解した内容を表現できると考える。また、声に出して読むことは、聴覚、視覚、そして運動感覚に訴える学習であるため、より効果的な学習が望めると考えた。録音した自分の音読を聴くことは（表2：6・7日目参照）、効果的な学習方法である。

表3：フローチャート項目「読む」

読む	
1日目	<ul style="list-style-type: none"> 読む本や英文を決める（5文以上）。 ゴールを決める。 わからない単語があってもフォニックスの音やルールを思い出し声に出し、4回以上読む。間違えは気にしない。
2日目	<ul style="list-style-type: none"> 文の概要を知る（調べる）。 *わからない単語、内容について調べる *理解できた話の内容を絵で描く
3日目	<ul style="list-style-type: none"> わからない単語の読み方、抑揚、文の区切り（意味のかたまり）、音の繋がりを調べ、4回以上読む。 *わからない点を家族や先生に質問する
4日目	<ul style="list-style-type: none"> 正しい読み方で5回以上読む。 *家族に音読を聞いてもらう *1人で見ながら4回読み、1回は見ずに挑戦
5日目	<ul style="list-style-type: none"> 発音、文の区切り（意味のかたまり）、抑揚、音の繋がりを意識しながら声に出して何度も読む。
6日目	<ul style="list-style-type: none"> 音読を録音。どのように聞こえるか確認。なめらかに読めるまで練習。
7日目	<ul style="list-style-type: none"> テスト（録音した音読を先生に提出）。 *家族に音読の感想を聞き、必要に応じて再録音する。

3.1.4. フローチャート項目「聴く」

「聴く」は、生徒が自分で音声教材を選び、ゴールを設定し学習を進める（NHK 語学ストーリーミングやYouTube等のツールを紹介）。音声教材の多くは、音声（動画）のみのため、基本的に聴き取れたものを書き取る学習方法を提示している。字幕機能やスピード調節機能があるツールは、聴き取り練習や答え合わせの際、利用しやすい。

表4：フローチャート項目「聴く」

聴く	
1日目	<ul style="list-style-type: none"> 聴き取る英文を決める。 例) NHK 語学ストーリーミング、YouTube ゴールを決める。 1回通して聴く。2、3回目は真似できる単語や文を聴こえたままに言って

	みる。(止めながらゆっくりで可)
2日目	・聴き取れた単語や調べた意味を書く。 *つづりを書く。間違いは気にしない。 *カタカナでも可 *なんとなくこう言っていると思う全体の意味を書く
3日目	・聴き取れた英文や単語の正しいつづりを調べて書く。 *意味やつづりを書く *内容を絵で描く
4日目	・もう一度同じ音声教材を聴き、さらに聴こえた単語や文を書く。
5日目	・4日目の内容で、3日目と同様に行う。
6日目	・全文を書き取る、または、リスニング問題を自分で選択し行う。
7日目	・前日答え合わせと間違い直し。 ・ゴールを達成した人： 洋楽を聴く、海外ドラマを観る、著名人の英語スピーチを聴く

3.1.5. フローチャート項目「話す」

「話す」は、買い物や空港等における場面別英会話やスピーチ等から自分で英文を決め、取り組む内容である。会話やスピーチ内容は自作も可とする。「暗記して言えること＝話すこと」のゴールとしていない。自分の伝えたいことを、より伝わりやすくするための学習(非言語コミュニケーション学習)を取り入れている。本家庭学習では、身振り手振りや表情を自分で考えることが非言語コミュニケーション学習にあたる。

表5：フローチャート項目「話す」

話す	
1日目	・英文を決める(対話やスピーチ、4文以上) 例) 教科書、YouTube ・声に出し4回以上読む。内容を知る。
2日目	・どのようにすると自然な会話/スピーチになるか考える。 ・単語の読み方、文の区切り(意味のかたまり)、抑揚、音のつながりを調べる。 *考えたことをプリントに書き込む *わからない点を先生や家族に質問する
3日目	・声に出しさらに練習する。 *家の人と練習、自分一人で練習
4日目	・会話に合う身振り手振りを考え練習
5日目	・身振り手振りをつけ自然な会話になるように練習する。*3日目と同様
6日目	・動画撮影。どのように見えるか確認。 ・さらに良くなるように考え工夫し練習。
7日目	・テスト(録画した動画を先生に提出)。 *家族に会話/スピーチの感想を聞き、必要に応じて再録画をする。

3.1.6. フローチャート項目「文法をまとめる」

「文法をまとめる」は、単に教科書やワーク、参考書の丸写しをするのではなく、提示された学習方法で進める。例えば、資料を読み、学習文法に関し「自分が大切な説明だ」と思った部分に線を引く、「自分の言葉」で理解したことをまとめる、問題を解き、間違えた問題の「解説を読み、大切な説明だと自分が思う」部分に線を引く、「重要ポイントは付箋」を活用しまとめる、最終日に学習文法の「エア授業(学習した文法の説明をする)」を行う等である。

表6：フローチャート項目「文法まとめ」

文法まとめ	
1日目	・学習する文法を決める。 例) 教科書、ワーク、参考書など ・ゴールを決める。 ・文法動画視聴。
2日目 3日目	・わからない点や疑問点を書き出し調べる。 *教科書、ワーク、参考書、インターネットで調べる、家族や先生に質問する ・大切な説明の部分に線を引く。
4日目	・「自分の言葉」で文法について理解したことを整理する。 *重要なポイントは付箋を活用する
5日目	・文法問題を解く(5題以上)。 ・答え合わせと間違い直し。
6日目	・前日に間違えた問題の解説を読む。 大切な説明の部分に線を引く。 ・なぜその答えになるか理由を理解する。 *ワークの解答解説を使う *わからない点を家族や先生に質問する *重要ポイントは付箋を活用しまとめる
7日目	・5日目の問題をもう一度解く、または、エア授業(学習した文法の説明をする)を自分で選択し行う。

3.1.7. フローチャート項目「課題を自分で決める」

この項目は、生徒が自分でやりたい課題を決定し、一週間分の学習計画を自分で立て学習する。以下に、生徒が実際に作成した学習計画を紹介する。

表7：2020年度2年生(生徒A)が自分で考えた学習計画

1日目	・一週間の学習計画を立てる。 課題：自分の過ごした年末について英文にし、スピーチする。
2日目	・英文を書くために必要な英単語を調べる。少し英文を書く。
3日目	・昨日の続きを書き、完成させる。 ・先生に英文を添削してもらう。
4日目	・先生に添削してもらった英文を、スピーチ用書き直し、練習する。

5日目	・見ないで言えるように練習する。
6日目	・動画撮影し、見直しをする。家族に感想をもらう。
7日目	・本番撮影と編集。 ・QRコードにして完成。先生に提出。

上記生徒Aの7日目のノートには、QRコードが添付されており、読み取ると実際のスピーチ映像を見られた。生徒A自ら編集した動画が添付されており、実際に過ごした日の様子が映し出されていた。

3.2 生徒の実態に合わせた指導の工夫

3.2.1 スタート期 5項目を全員で学習

スタート期の家庭学習は、フローチャート配付直後、生徒個人に家庭学習として取り扱わず、各項目共通課題を、1項目一週間×全5項目を全員で実施する(学習方法は授業内で説明)。5週間の共通課題学習終了後、さらに支援が必要と思われる生徒は、個別で休み時間に指導する。個別に説明を行えば、学習方法を具体的に提示してあるため、大半の生徒が学習方法をマスターできる。学習方法を習得すれば、ほとんどの生徒がこのフローチャートを活用し、学習できるようになった。スタート期に十分時間を確保し、丁寧に学習方法を指導することが、後の家庭学習に大きな役割を果たすと考える。

3.2.2 リフレッシュ期 定期的な共通課題

本家庭学習では、定期的なリフレッシュ期として共通課題を出す。理由は3つある。1つ目は、マンネリ化を防ぐ目的、2つ目は、教師から新たな学習方法を紹介する目的、3つ目は、同じ課題に取り組むことで、他生徒の学びを吸収させる目的である。例えば、文法まとめの課題では、全員に同じ文法動画を視聴させ、重要だと思うポイントを押さえノートにまとめさせる。教師が点検した後、授業で上手にまとめた生徒のノートを紹介する。文法まとめを苦手としている生徒には、得意な生徒が良き手本となる。この取り組みで、学習内容の重要ポイントを押さえられる生徒が増加した。

他の共通課題として、2～3の異なる課題を提示する方法もある(表8参照)。生徒は、課題を1つ自分で選択した後、学習方法例を参考にし、自分で考えた方法で学習を進める。異なる共通課題の例を以下に記す。

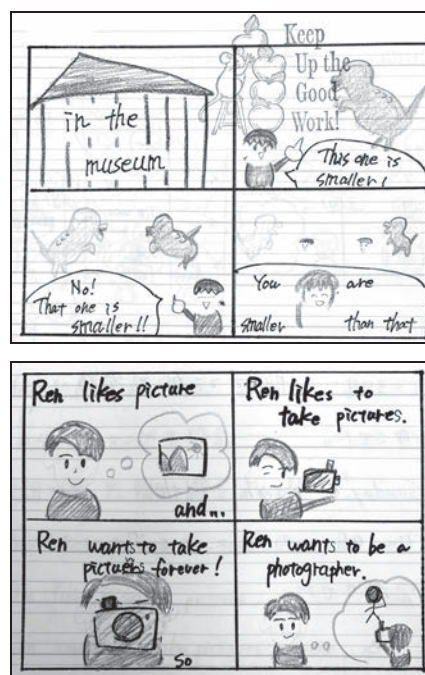
表8：2020年度2年生共通課題

課題	学習内容アイデア(例)
A) 1年間で学習	・学習文法をどのように活用

した文法についてまとめる	し、何ができるようになったかノートにまとめ、学習成果を見せる。 例) 文法を用いた英作文や対話文を自分で作る
B) 1年間で学習した英単語についてまとめる	・ノートにその英単語を用いた活用の紹介などをする。 例) 語源について調べる、例文を紹介する、同じ英単語の異なる品詞を調べる、英単語のイメージイラストを自分で考えて描く
C) 英語の本を読み、理解したことをまとめる	・読解した内容を、いろいろな方法でまとめる。 例) 話の内容を要約する、本に載っている問題に答える、他の人に説明するつもりで、文と絵でまとめる

次に示す資料は、上記の課題(A)を選択し、学習した生徒Bの7日目のノート(抜粋)である。生徒Bは、自分で考えた4コマ漫画で文法まとめを行った。

表9：2020年度2年生共通課題：生徒Bのノートより



3.2.3 本家庭学習による成果

成果の1つとして述べるのが、項目「自分で課題を決める」を選択する生徒の増加である。これは、生徒が自分の特性を生かした学習方法が何であるかに気づき、自己調整をしながら個々に合う最適な学習ができるように成長してきたからだと推測される。前述のとおり、こちらの想像を上回る自主課題を計画し、取り組む生徒もあらわれた。(表7参照)。

学習の効果として、生徒の変容が本家庭学習だけではなく、授業で行う生徒主体型学習においても見られた。生徒主体型の学習課題に対し、意欲的に生徒間で意見を交わす姿、自分で最適な方法を考えながら学習に取り組む姿が見られた。特に、グループによるテーマ発表を行った際は、生徒同士の活発な情報交換や教え合い学習、効果的なICTツールの使用と個々の得意分野を生かした分担と準備が、自分たちの力で意欲的・協働的に進められた。

この他に、英語家庭学習の取り組みが国語科にも広がった。国語科は、英語版フローチャートを応用し、国語版家庭学習フローチャートを作成し、生徒に取り組ませた。生徒は、英語家庭学習のスタート期に学習方法を理解していたため、国語版フローチャートに関する説明をほとんど必要とせず対応できた。別言すると、教科が変わっても、生徒はその教科における自分の必要とする学びを理解し、自己調整をしながら学習を進められたということである。

4 成果の要因と今後の課題

4.1. 成果の要因

以上の成果が出ている要因は、3つ考えられる。1つ目は、1日最短10分で終わられる無理のない学習設定により、継続した取り組みができたこと。2つ目は、7日目のゴールに向かい、細かな学習段階を踏みながら、具体的な学習指示を提示したことで、多くの学習方法が習得できたこと。3つ目は、生徒の良い取り組みを、逐次学年の学習掲示板に掲示し紹介したこと。以上3つの要因が成果につながったのではないだろうか。また、生徒の取り組みの様子や生徒の意見を取り入れ分析をしながら、毎年度末にフローチャートを改訂した。特に、ICTツールは日々進化をしているため、教師が研修をした後、フローチャートの中で新たな学習ツールとして紹介した。フローチャートの改訂も、成果の要因に影響を与えたのではないかと考える。

4.2. 今後の課題

今後の課題は、生徒が一層適切な学びの選択と学習を行えるよう、教師側の個の特性に応じた学びのプロデュース力の向上である。さらなる個別最適な学びとなる家庭学習課題の模索は、その1つである。自己調整をしながら学習を進める生徒育成のための有効な家庭学習として考えるのが、生徒に1台ずつ配付されて

いるタブレットPCを使用した学習方法である。生徒のICTツール（パソコンやタブレットPC、スマートフォン等）に対する興味・関心の高さと、ICT学習ツールが日々進化を遂げている点から、生徒が家庭学習を主体的に行う手段の1つとして有効だと考える。ICTツール（含：学習ツール）の研修は、英語科で適宜行っているが、ICTツールに偏り過ぎず、これまでの実践と最適に組み合わせ本家庭学習に取り入れるためには、教師がさらに理解を深める必要性を感じる。

また、国語科へ取り組みが広がったように、他教科へ本家庭学習を推奨もその1つと考えている。現在、本家庭学習は、英語科全学年と国語科1学年のみの取り組みである。しかし、自己調整学習のできる生徒育成のためには、他教科でも各教科の特性に合わせたフローチャートを作成し、家庭学習を取り組ませると良いのではないだろうか。生徒が各教科の具体的な学習方法を習得できれば、一層主体的に学ぶ学習者に成長し、学びを継続することで、学力向上につながるのではないかと推測するからである。教師側の学びのプロデュース力向上が、個別最適な指導を支える新たな課題であると考えている。

5 おわりに

英語の家庭学習は、指導方法や生徒の実態に応じて様々な方法がある。2019年度以降、じっくりと家庭学習に目を向け、試行錯誤をくり返し研究・実践することで、生徒の学習に対する姿勢や意識の変化、生徒の創造する学習計画の素晴らしさと実行力に、学ぶことが多くあった。同時に、自分で課題を選ばず支援を要する生徒が一定数いたという事実は、前述の課題と共に今後着目すべき点であろう。

近年のGIGAスクール構想に伴い、本校は先行実施校として2020年度秋より、1人1台タブレットPCを配付し、タブレットPCを活用した学びが始まっている。ICTツールを活用した家庭学習も、今後一層充実してくることを考えると、本家庭学習フローチャートも毎年度改訂を重ね、自己調整をしながら学習を進められる生徒の育成と成長を支えていけるようにしていかなければならないであろう。個に応じた指導ができるよう生徒一人一人の興味・関心に対応した、多岐に渡る学習課題を今後も提示していけるよう研究を進めていきたい。

「生徒指導の機能」を生かした、「学級だより」発行の在り方について

～「持ち上がり学級」が少なくなった現状のために～

鎌ヶ谷市立鎌ヶ谷小学校

教諭 澤井 謙 一

1. 研究の目的

「持ち上がり学級」という言葉が、かつてほど学校現場で聞かれなくなってから、久しくなったように思う。私が初任者だった頃は、1年生から2年生に持ち上がってからクラス替えと、「2年で1まとまり」という学級が一般的であった。それが段々と1年単位でクラス替えをし、5, 6年生のみ「持ち上がり学級」という風になってきた。そして、ついに今年度から、本校でも5年生から6年生へ進級する際もクラス替えが行われるようになった。つまり、全て1年間のみ学級経営となったのである。私自身も「持ち上がり学級ではない6学年学級」の担任をすることは、初めての経験となっている。

当の子ども達にとっても、「6年生への進級時にクラス替え」は、大きな動揺があったようである。5年時は各クラスとも安定をしていたので「このままのクラスで卒業したい」という子ども達の声も、少なからず聞こえてきた。これで6年時の学級がまとまりを欠いてしまったら、児童は「やはり5年生の頃がよかった」と、後ろ向きの心境のまま卒業を迎えることにもなってしまう。

この学校の実態を受けて、「学級だより」に目を付けた。私は学級だよりをかねてより発行してきたが、これが「学級経営において、どれほどの役割を果たしているのか」を、系統的に分析しようと考えたのである。そこで今年度は、「生徒指導の機能」を意識的に活用しながら、学級だよりに盛り込むように発行を続けた。

「持ち上がり学級」が珍しくなった現在において、本研究が学級経営の一助になれば幸いである。

2. 児童実態

学年児童数	208名 (男97 女111名)
学級児童数	35名 (男16 女19)
学年学級数	6学級

本学年は児童数が200名を超える大人数を抱え、学級数も6学級と多い。つまり、クラス替えをすると6分の5が新しいメンバーになるので、一般的な学校

よりも、その影響は大きいと想像する。現に、クラス替えを終えた4月当初、学級の雰囲気は休み時間でも非常に静かなものであった。

3. 「生徒と指導の機能」と「学級だより」への活用

ここで、「生徒指導の機能」をおさらいしておこう。「生徒指導の機能」は、「生徒指導提要」(平成22年3月 文部科学省)にて、次のように説明されている。

生徒指導は、一人一人の児童生徒の個性伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の児童生徒の自己指導能力の育成を目指すものです。そのために、日々の教育活動においては、①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することの3点に特に留意することが求められています。

「生徒指導の3機能」と称されることもあるが、すなわち「自己存在感」、「共感的な人間関係」、「自己決定の場」がそれである。

これら3つについて、「学級だより」において以下のような記事で活用を図った。

(1) 「自己存在感」について

「自己存在感」は、「自分を価値のあるもの、かけがえない存在として認め、集団の中で居場所があると感じる気持ち」と、説明されている。積極的な児童は自然と感じるものであるが、内向的な児童は喪失しやすいものである。

そこで、「学級だより」の活用を考えた。内向的な児童の行動や発言を、積極的に紹介するのである。具体的には以下の内容である。

① 子ども達の意見・感想を紹介する

次ページの学級だよりは、作文の課題において、児童がどのような考えを述べたのかを紹介したものである。紹介されることで、児童は担任からの「承認」や

を数名紹介した。ある児童は「相手としては笑わせにきているのだな、と思った。ポジティブな一面もあるというのが分かったけど、でもネガティブな方が強いと思ってしまう。」と述べていた。別の児童は「私はよく言われるけれどノリがいいと思うし、あんまり仲良くない人には言わないと思うから、言われたら私はのっちゃうと思います。」と述べていた。「自分は思ってもなくても、相手は傷ついているかもしれないし、それは逆もある。加害者にも被害者にもなる確率は普通にあるのだ。」と述べている児童もいた。

「学級だより」でお互いの考えを再認識し、形として遺すことができる。「相互に人間として無条件に尊重し合う態度で、ありのままに自分を語り、理解し合う人間関係」を築く上で、道徳の授業内容を「学級だより」で紹介することは非常に有用であると考える。

(3) 「自己決定の場」について

「自己決定の場」とは、「自ら課題を見つけそれを追究し、自ら考え、判断し、表現すること」と説明されている。学級においては「学級目標をみんなで決めたこと」は、自分を含めた学級全体での「自己決定の場」を与えられたと感じた児童が多かったことだろう。

「学級目標」を決める上で、学級会を開いた。担任からは「文章ではなく、ワンワードであること」、「自分たちだけという、オリジナリティあるもの」という2つの条件を課した。子ども達は話し合い、いくつかの候補を上げ、投票をして学級目標は決定した。それは「ライオンハート」である。社会科の授業で「政治」を扱った際、王政だった当時と比較する課題を設け、リチャード1世を登場させた。その勇猛な姿勢から「ライオンハート」の異名をとったが、それが児童たちに強く残っていたようである。こうして世にも珍しい「ライオンハート」という学級目標が誕生し「どんな時でも勇気をもって取り組む。また、いじめなどを目撃したら“それは間違っているよ、と、勇気をもって声をかける人になる」という理念をもたせた。字が得意な児童が題字を、絵が得意な児童が挿絵を描いて学級掲示物を作製し、「学級だより」にて上の通り紹介した。

「ライオンハート」という、オリジナリティの高い学級目標が生まれた。それゆえ、子ども達は「自己決

定の場が与えられている」と、強く実感したことだろう。これを「学級だより」で記事にして読むことで、それを再認識することができたことだろう。



6年1組の、教室掲示用の「学級目標」が完成しました。学級目標は、「ライオンハート」です。学級会の話し合いを経て、投票で決めました。学級目標を決めるにあたり、担任として2つの注文をしました。1つは「ワンワードであること」です。単語ではない文章、例えば「決まりを守り、学級みんなが楽しく過ごせる協力し合えるクラスにしよう」のような目標もありません。こちらはこころの良さがありますが、私はターゲットが分散し、一体何を目標せばいいのか分りにくくなると思います。また、長いほど覚えづらくなります。目標ですから「あなたのクラスの学級目標は何」と聞かれたら、すぐに答えられて然るべき、と考えます。それで「ワンワードであること」を条件としています。もう一つは「オリジナリティがあること」です。例えば「一生懸命」という言葉があります。私は本紙でも「一生懸命のすばらしさ」をかいて書いた通り、すばらしい言葉で学級目標にもふさわしいと考えます。その上で、誰もが知るこういう言葉ではない、あまりない言葉を要求しました。その方が「自分たちの目標だ」という馴染みとどうか、帰属意識が高まると考えるからです。以上の2つを条件として、学級会で決定するように促しました。こうして生まれたのが「ライオンハート」です。示は、社会科で子ども達に紹介したりリチャード一世のあだ名に由来します。その勇猛な姿勢から「ライオンハート」と称されましたが、これを目標としました。6年生になり、最古学年として様々な取組があります。そういつたことに勇気をもって立ち向かうような、そんな思いが込められています。また、友達関係でも、普段の生活の中でも、不正と思われることがあっても「それは間違っているよ」と、勇気をもって言うように、という願いも込められています。日本広しといえど「ライオンハート」を学級目標にしているのは、我が6年1組だけかと思えます。「自分たちの目標」を胸に、卒業まで過ごします。

<2022.6.16 No.45 より>

5. 成果と課題

(1) 児童から見られた変化

「生徒指導の機能」を意識しながら「学級だより」の作成を続けてきた。学級だよりは原則として毎日発行し、1学期は全部で68号まで発行するに至った。

では、当の児童たちは、1学期の間でどのような変化をしてきたのだろうか。

1学期末の7月19日(金)に、作文の宿題を課した。テーマは「1学期を振り返って」というものである。特に「学級について」と促したわけではなかったのだが、多くの児童が学級について、またクラス替えについてふれていたのは、やはりという思いがあった。

私はクラス替えの時、「1組ってなんだか、きびしいイメージ…」と思っていた。でも、今は一組のイメージはすっごく楽しいクラスだと思う。なぜなら、クラスメイトと仲が良くてイベントも多くて、みんな全力で楽しんでいるからだ。(中略) 1学期は不安から始まったが、どんどん楽しくなってきた。2学期も3学期も、まだまだ盛りだくさんになりそうだ。

女子児童Tさん

一学期の思い出といえば、思い出なのか分からないが、一番に思いつくのは、クラス替えで澤井先生のクラスになったことだ。最初は前にやったアンケートの答えでもあった通り、怖い先生だと思っていた。でも、澤井先生のクラスで三ヶ月過ごして、本当は優しい先生だと分かった。これからも楽しい思い出を作っていきたい。

男子児童Uさん

私は最初「あっ、これ死んだわ」と思いました。先生男の人で初めてだし、友達だった人は結構いたけど、なんか忘れ去られてたらどうしようなどとめっちゃ気まづかったです。(中略)あと私、先生のこと好きじゃなかったんです。もしかしたら嫌いの方までいっていたかもです。なんかすっごい偏見だけど、厳しそうだし、少しふざけたらすっごい正論で返してきそうだし、宿題多そうだし、話しかけないでくださいオーラ出している気もするし。(中略)最初は死んだと思っていたのに、心境の変化ってすごいですね。今ではもう、最高って感じなんで、ずっとこのクラスのままでいいです。

女子児童Nさん

3名の作文を挙げたが、決してこの3つが特徴的というわけではない。他にも「私は6年生に進級した4月6日のあの日…。仲の良い友達もいないし、なんか気まづい…。もうこの一年間終わった…と思った。」という書き出しの児童もいた。やはり、こちらの想像通りで、6年生のクラス替えに大いに戸惑いがあった児童が数多くいたことが分かった。しかし、それらの児童も作文の通り、今やすっかり学級に馴染んでいる。

また、もう1つ興味深かったことは、「担任である私に悪印象を持っていた児童が多くいたこと」である。この学年の児童は5年生の頃から預かり、クラス替えをして6年生の今年も担任をしている。学年主任、男、40代ということも手伝って、子ども達は先入観的に「怖い」、「厳しい」、「真面目過ぎて面白くない」と想像していたようである。「話しかけないでくださいオーラ出している気もする」という児童もいた。

こういった児童たちに対して、「学級だより」の果たした功績は大きかったことだろう。つまりは、「担任と児童たち」という間でも「共感的な人間関係」が育まれたと考えられる。この作文こそがその証で、そうでなければ「怖い先生だと思っていた」や「先生のこと好きじゃなかったんです」といった内面を吐露するこ

とは、決してなかったことだろう。「共感的な人間関係」で結ばれた信頼があるからこそ、こういったことまで担任にいえるようになったと考えられる。

(2) 調査結果からみる成果

(1) 学校生活アンケート

- ・悩みや困っていることがある児童 0名
- ・先生に伝えたいことがある児童 0名

(2) いじめ調査アンケート

- ・いじめられたことがありますか 0名
- ・いじめをしたことがありますか 0名
- ・冷やかされ、からかわれたりしましたか 0名
- ・誰かと仲間外れにしましたか 0名
- ・いじめを見ましたか 0名

上は、2つのアンケート結果である。見事に0名が並び、良好そのものである。時に「児童が本音を言わないこともあるから、アンケートの意味は低い」という意見を目にするが、本学級は「担任が嫌いだった」ということまで素直に伝えられる子ども達である。そこまでの子ども達ならば「悩み」や「いじめを見た」ということ隠すことはまずないだろう。

2つのアンケート結果から、現学級は非常に良好な状態であることが、成果として見られた。

(3) 保護者たちの反応

この「学級だより」だが、あくまで対象は保護者である。保護者に向けて書いたものを、配付時などに児童も読み、結果的に児童も内容についてふれるというのが前提である。

そんな保護者達が、この「学級だより」について、どのような思いをもっているのか。保護者向けにアンケートを実施した。自由提出の中、35名中25名から返信をいただくことができた。

Q. 「学級だより」では、どの記事に興味がありますか？(複数回答可) ※()内の数値が投票数

- 休み時間などの学級の様子(19)
- 授業での学級の様子(19)
- 授業での学習内容(15)
- 子ども達の意見・感想(19)
- 係や委員会での様子(12)
- 提出物などのお知らせ(13)
- 代表に選出されたことを伝えたもの(14)
- 「宿題のあり方」など、担任の思いを述べたもの(17)

全8項目であったが、いずれも万遍なく得票した。8項目すべてに投票した方は9名もいた。

ここで興味深かったことは、最も得票が多かった内容は「様子」を伝えたものだったということである。休み時間、そして授業中と、子ども達がどんな「様子」で生活をしているのか、というところに最も興味があることが分かった。華々しい特別な活躍以上に、保護者は「日常」を知りたがっているのである。

同数で「子ども達の意見・感想」があったのは頷けるが、次点が「担任の思いを述べたもの」であったことには驚いた。注目は子ども達に寄っていて、あまり担任には向いていないと想像していたからである。ところが、決してそんなことはなく、担任がどんな考えを持っていて、どんな決断をくださったかなどにも、保護者は大いに関心を持っているのである。

自由記述欄では、ありがたいことに感謝の言葉が並んだ。「主人は遅く帰宅し娘と話す時間もないので、学級だよりを寝る前に読むのを1日の楽しみにしています」という方がいた。「家で学校での様子を話すことはあまりないので、学級だよりの内容を話題に、家族内で話すことも多くなりました」という方もいた。また、「授業の様子や学校の様子、子ども達がどう思っているのか、また先生の視点が入っているのもよい」という意見もあった。様々な家庭環境や子ども達がいる中で、またコロナ禍で学校へ足を運びにくくなった昨今、学校（担任）—家庭（保護者）—児童 の三者を「学級だより」は結びつける役割を果たしたのである。

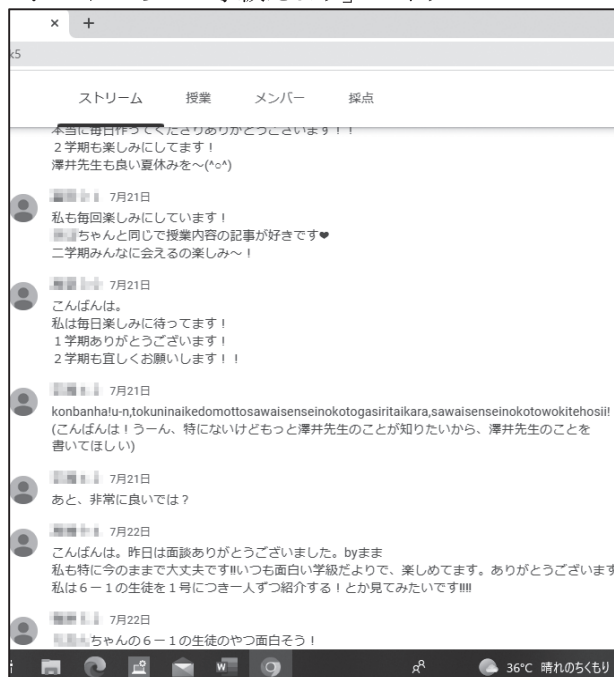
（4）課題

「学級だより」を活用した取組であったが、「学級だより」は前述した通り、あくまで保護者向けに書いたものである。そこに、受け取る児童が6年生であったことから「生徒指導の機能」を意識的に盛り込むことで、この成果が得られたと考えられる。

これを、低学年でやったらどうであろうか。漢字も難しく、到底読むことはできない。担任の思いを高学年ならば併せ読むこともできるであろうが、低学年ではそうはいかないだろう。

もちろん、低学年であっても「学級だより」は大いなる効果を生み出すことは想像できる。ただ、今回と同様の紙面構成や書き方をしても、同様の効果は得られないと考える。低学年には低学年の、中学年には中学年の構成や工夫が必要であろう。

7. これからの「学級だより」づくり



<2022.7.21 タブレット PC 上でのアンケート>

鎌ヶ谷市では、市内の全小中学生にタブレット PC が令和2年度より配備されることとなった。そこで、タブレット PC を活用して、「学級だより」に関するアンケートを実施し、2つのリクエストを受けた。

1つは「澤井先生のことが知りたいから、澤井先生のことを書いてほしい」というものである。もう1つは「私は6-1の生徒を1号につき一人ずつ紹介する！とか見てみたいです!!!」というものである。これは他の児童たちも「いいね!」、「面白そう!」と好評を博していた。担任同士、児童同士の関係がいかに密接であるかがうかがい知ることができた。

この「タブレット PC を使ったアンケート」は、本研究論文のために実施したのだが、児童側からも意見を発することができる点が、新たな活用法としての発見であった。「学級だより」は担任が書いて配付される「一方通行のメディア」でもある。タブレット PC を活用すれば、児童側からも「双方向に意見を発することができる」のである。またこれは、「自己決定の場」が与えられたことを意味し、さらに「生徒指導の機能」を意識した「学級だより」を作成することができる。

「学級だより」を通して学級経営は、まだまだ進化する余地を残しているのである。

<参考文献>

『生徒指導提要』文部科学省（平成22年3月）

佳 作

《佳作》

学校部門

松戸市立松飛台第二小学校	校長	市川 正人	多様な背景や課題を持つ児童が共に学ぶ学校教育の充実を目指して
成田市立本城小学校	校長	井上 功太郎	夢や希望を笑顔で語る子どもたちの育成
成田市立神宮寺小学校	校長	内田 淳	「自分を信じてがんばる子」の育成に向けて
匝瑳市立八日市場小学校	校長	裕倉 孝夫	児童一人一人が「笑顔いっぱい」になる学校を目指して
市川市立塩浜学園	校長	松井 聰	県内初の義務教育学校 塩浜学園の現在地
旭市立鶴巻小学校	校長	堀川 金一	数学的に思考し、表現する力の育成を目指して

個人・グループ部門

千葉県立八街高等学校	教諭	嶋田 亮太	進路多様校における生徒の英語に対する意識と英語の授業は英語で行うことの難しさ
松戸市立松戸高等学校	教諭	瀬和 真一郎	高等学校の体育における振り返りの効果の検証
千葉市立柏台小学校	教諭	村松 綾	豊かに表現する児童への指導の工夫
市川市立行徳小学校	小学校 英語専科	内川 佳代	図書・総合・社会科と外国語科のクリルを目指して
習志野市立谷津小学校	教諭	秋元 由理	小学校における専科という立場での無限の教育活動への挑戦
松戸市立上本郷小学校	教諭	武藤 光亮	教材の焦点化を通して「深い学び」の実現を目指した体育授業
柏市立大津ヶ丘第二小学校	教諭	川股 千秋	算数科におけるめあてとまとめの再考
流山市立おおぐろの森小学校	教諭	北島 愛	個の課題を踏まえた学び合いの授業の中で子どもたちの社会性を育てる
佐倉市立志津小学校	教諭	中村 陽一	日常的に考えさせる道徳教育の実践
木更津市立鎌足小学校	教諭	山本 裕貴	「自ら考える力」を育てる理科指導
浦安市立美浜中学校	教諭	川久保 周	中学校の学年経営におけるシン・マネジメント
浦安市立明海認定こども園	教諭	河原 七海	豊かな表現力を養うための援助の在り方について
佐倉市立上志津小学校	教諭	仙波 仁子	主体的・対話的で深い学びを生き生きと実現する児童の育成

令和4年度募集

教育実践研究論文集

— 第37号 —

令和5年1月 発行

発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部

千葉市中央区中央4-13-10

(千葉県教育会館新館)

電話 (043) 224-8851